

# 英文評釋

緒言

坪内雄



方今我が國に行はるゝ英文學の教授法につきてはあかざ思ふこといも皆に  
 のみならず、なかに最も歎ずべきは訓讀法の宜しきを得ざることなり。第二は教授  
 者の鑑識の乏しきとなり、くはしくは只管字句の解にのみ泥みて趣致と風調とを  
 除所にするの弊あることなり。第三は教課書撰擇の無差別なることなり。すなはち  
 一詩文を講ずるに當りて其の感想の健不健、文致の新古、措辭の雅俗等これら緊要  
 なる辨別をなすまで一切無差別に教授すること是れなり。もとより中央首都の  
 教授者中には已に此の弊に心づきて改善に力を致せるもあれど、そは尙極めて少  
 數にて多數の教授者の着眼は今も従前に異なることなしまして、地方なる教授者  
 等はいかゝる改善の必要なるべきをだに認めずして死讀に泥めるも多しといふ。  
 かくの如くにして續かば十年英文學を修むとも其の眞の趣味は解するに由なく  
 偶々國文に累せんのみ。案ずるに此の弊習を矯治するの一策はまづ所謂直譯法

英文評釋 緒言

を改めて新訓讀法となすにあらんか。夫れ英語學を修むると英文學の趣致を味ふとは其の法おのづから一なるを得ず單に英語のみを學ばんとせば前後六七月が間外國人の家に同棲するも或は一斑を學ぶを得んさはれ英文學を味はんとせば更に幾歩をか進めざるべからず。すなはち英語の意を解するにのみといめずして其の風趣をも領せざるべからず。及ぶべくば我が國文と對照して彼の詩文の趣致を玩味し彼れの圓轉滑脱は我が圓轉滑脱を以て迎ふべく彼れの森嚴莊重は我が森嚴莊重を以て迎へ能ふべくは響の音に應ずるが如く影の物に隨ふが如く原趣を髣髴するをもて要とすべし拙くとも從來の不妥拙陋なる直譯法を全廢し語を訓ずると同時に多少原文の風趣をも傳ふべきなり。こはもとより行ひ易からざることなれども只一步を前進するもまた一步の改善なりひたすら守株するの愚なるには優らん。予が嘗て『國學院雜誌』に掲げたる英文評釋はこの訓讀法に對する第一歩の改善を表するもの或は以て参考に資するに足らん。下に其の一端を轉錄するを見よ。

今日英文を讀み習はんとするもの、不便二あり英和對照字典の尙甚だ不完全なるを

從來行はる、訓讀法(所謂譯讀)のいさくほしいまゝなるをなり。其ののみ行はれし『薩摩字書』などいへるに比ぶれば今日行はる、英和字典の優れること數等なれど譯法宜しきを得ざるもの尙あまたあり。例へば専門にのみ用ふる語にして己に殊別なる名稱の定まりたるに孟浪杜撰なる譯語を填し問ふ讀者をして一物を二物か疑はしむることあり。且『薩摩字書』以來の因襲にしたがひ甚しき俗語をもちちたき漢語をも殆どわいだめなく譯語としてまへへ用ひたれば國文を讀む心もて英和字典を見るべきは動詞を形容詞と誤り意義殆ど無き接續詞にも深き意義あるやうに思ひ誤ることあり。例へば「That」といふ語は接續詞として用ふる時は概して國文の「と」といふ語又は「を」といふ語に相當するのみなるを字典には「何々する事」と譯したるゆゑ初學者は此の語に必しも「事」といふ義伴へるやうに心得

He said that he would not go.

といふ文を訓するや「しや」逐語譯にものすとも

「彼れはいへり彼れはゆくま」

などいへるべきを

「彼れは彼れが行かぬであらう。」とをいひし

こやうに訓するゆゑ所謂譯讀に慣れぬ者はみづから訓トながら何の意とも解し兼ねるなり。或は「いひし」とは連川音にやといぶかるもあらん。總して今の英和字典は現在動詞を譯するに常語（phrases）の使用法によりたれば「刑す」「稱す」などありて當然なるをば「刑す

る「稱する」を譯して連用言かき疑はしめ過去動詞を一概に「刑せし」「稱せし」「殺せし」「そしりし」を譯して國語法を案したり。

必竟これは國文法の一定せざりしに因ることなり、即ち正常なる英和對照文典の成りがたかりしに因るなり。或は明治新文法の制定せらるゝの時來たらば「刑する」「稱する」等は現在動詞として許認せらるゝに到るならん、而も今行はるゝ文法上よりいへば破格の言たること勿論なり、すなはち俗語上には許さるべきも文章上には許さるまじきものなり。

又英語の代名詞はくまぐにて非情有情の別あり、男女の別あり、又主位賓位領位などいふ位置の格あり。男性の代名詞は *he, him* 等にして女性の代名詞は *she, her* 等なり。字典之れを譯して男性は「彼れは」「彼れに」など女性は「彼の女は」「彼の女の」「彼の女に」など管々しく物せり、これ又訓を冗漫ならしめし一因なり。國文の代名詞もくまぐさなれど「彼」といふに男女の別なければ男をも女をも「彼れ」と稱すべく、又それがもてる物を指さんに必しも「彼れの帽」「彼の女の帯」といはすともあるべく、皆おしなべて「其の若しは」「それが」などいはいはゞ足るべくや。多くはかゝる代名詞さへ省かれても至當なるが如し。例へば今の直譯法によれば「彼れ帽をさりて起ちぬ」といはゞ足らんを「彼れは彼れの帽をさり而して起ちあがりし」と訓むなり、冗長の至ならずや。かゝる例一々既かば限なからん。さて又所謂譯讀法の不都合は字典の杜撰よりも甚し。例へば「(手)を」を「わたくし」

し」と俗訓しながら *you* (爾)を「なんぢ」と雅に訓べて「わたくしは爾を愛する」などいふ不審の訓を成し、若しは接續詞の *and* をいつも同トに「ソツシテ」又は「而して」と訓べて「蟻と蝶」又は「蟻と蝶と」さあるべきを「蟻とソツシテ蝶」と訓み、廉且正なる「若くは」「廉正なる」と訓べて妥當ならんを「廉直なる」而して公正なる「こやうに冗長なる熟語を繋ぎ合はせて訓む」などはいふも更なり、足下がそを知らざりしは不思議なり、「いはいはゞ足るべきを」「汝がそれを知りなまざりし」といふの「いはいはゞ」が不思議である、「と」讀むなど笑ふべきよりはむしろ我が國文を害ふものとして憂ふべきなり。よしや聰明なる讀者輩はかゝる拙譯に拘らずして原文の趣致を解すも其の合得の運かるべきは多く辨するを俟たざるべきなり。思ふに維新以後國文の法格のみだりがはしうなりたるには種々の由縁あれど所謂直譯法もまた興りて力ありしは明なり。奇怪なる熟語耳なれぬ造語の用ひらるゝに至りし若しは文のおしなべて冗漫になりし皆此の直譯法の弊なり。

予嘗て或國語の學校に聘せられて英文學を教へたりしことあり。かしこの學生はなべて國文法には通じたらん、善なるに尙英文を譯するには所謂直譯の法によりて甚しき破格の言葉をつらね履く正しけれど其の甲斐なかりき。一方に於て矯正するも他の教授法舊の如くならば且直うして且曲ぐるのたぐひなるべく國文家が一方に於て頻に國語法を講ずるも他方に於て英學家があやしき直譯の句法を教へば國文の一定は到底行はるべき時なからん。正當なる和英對照文典を

編纂すること明治文壇の急務の一なり。

六

更に一例を挙げん我が愛する同胞といはゞ足らんを我が親愛する所の同胞といふ。親の字に必しも深き意あるにあらず所詮は譯讀口吻のうつれるのみ。又此の所のさいふ語の維新以後いたく行はるゝに至りしと思ふに英語の關係代名詞 that, who, which などをおしく訓したるが遂に笨癖となれるにやあらん。此等のことわり一々にいへばくだくし(中略)もさより予の訓讀法とても悉く妥ならざらんは勿論なれど從來廣く行はれたるに比せば國語を害ふこと尠かるべしと思ふのみまたかゝる訓讀法行はまほしく思ふ同感の士今は世に乏しからず辰巳小次郎岡介由三郎の二氏をばしめ雜誌やうの發見物にては『日本英學新誌』『英學』なほ其の他予が知らざるあたりに同感の士あまたあらん只久しき因襲を破るこゝの難くて世に新訓の行はれぬなるべし。

右は予が新訓論の一斑なり其の例は『國學院雜誌』に毎號ひきつゝ掲げれば一讀して其のやうを見らるべし尙本評釋の本文によりても予が旨の在る所は知るに足らん。

さて以上に説ける所は只訓讀法に關する改善の一策のみ此の策もとより万全なるにあらず。或はいはん英語と國語とは到底語の脈を殊にせるものかゝる國語法に拘泥したるの訓は却りて英文の眞意を害ふ。英語を解するには宜しく大意

譯を主とすべし若干の語をひきくるめて俗語をもて綜譯し全辭の眞義を傳へんを要とし強ちに語脈に泥むべからず。足下の所謂新訓は幾分か逐語譯の趣あり又恐らくはひとり文章家の教授者を俟ちてのみ行はるべきことにして尋常の教授者には望みがたからんと。或は然らん。但し予は英語學の教授を論ずるにあらず主と英文學の教授法を説けるなり而して英文學の教授者は多少國文に通達し并に文章に達せざるべからず然らざれば争てか英詩文の趣味を講ずるを得ん。さて第二の弊といふは英文學を教授する者の美文上の鑑識(批判力)乏しことなり。悉しくいへばひたすら一語一句を解釋するにのみ汲々として一篇の眞意と風趣餘韻とを傳ふるに力めざることなり。げにや英語を教ふるをのみ主とせば必しも風趣を談ずるに及ばざるべしまかれどもかりにも英文學を講ずとせば作家の精神のこもれる所其の文致の殊なる所其の風調の妙其の餘韻の多少若しくは其の作家の特質なども併せて講ぜざれば不具足にあらずや。例へばアヂソンの文の如き若し之れを單に語義の解釋にといめば大かたは平々坦々其の何の邊に談諧の妙あるか其の何が故にジョソソンの小品と異なるか其の如何なる特質か

ールドスミスの散文に異なれる殆ど見分くるに由なからん。若しくはシェイクスピアの劇詩の如き已に演伎すべきものとせばたとへこれを口譯するも幾分か其の科介との關係を示し其の語の緩急鹽梅若しくは輕重の度合等を示さずば其の何が故に古今空絶の傑作なるか、いづこか人情の精髓なる其の近松竹田等に比して如何なる著き選庭あるか殆ど判知するに由なかるべし。蓋しアヂソンもペーコンもシェイクスピアもテニソンも方今行はるゝ直譯法によりて譯せられ而も語義以外の風趣につきては殆ど傳へらるゝ所なくば共に是れ異風の怪文字、重くるしくまはりくどく然らざれば言ひまはしいとおさなびたる舌たらずの言葉に似て其の何が故に妙なるかは殆ど片影だに知らんに由なし。もとより英國の詩文章は我が國文に比するときは全く語の質を殊にすればひとり訓讀の方法のみによりて趣味と風韻とを傳ふるは所詮望みがたきことなれどもさりとして教授者の着眼にしてをさく風韻を傳ふるにあらば其の法必無とは斷ずべからず。例へば一詩文を講ずるに先だちまづ該作家の略歴を語り其の境遇時勢を叙し、又其の作家の特質を説き其の作の由來を述べ及び其の作の趣味を指摘し或は和漢

の作物につきて類同を求め或は和漢のと對照して其の感想の異なるを示さば多少其趣味を髣髴するに庶幾からんか。然るに従來の教授家は概してかゝる點に留意せざるなり、彼等は森嚴なる論文をも輕妙なる戯文をも同じ口吻にて譯し去り同じ着眼にて講じ去るなり。甚しきは第一リードルの文章とシェイクスピアの句とをだに區別せざるなり。

Ant and spider. (蟻とさうして蜘蛛)

To be or not to be! that is the question: (あるべく或はあらぬべくよ、それが問題なり)

二者共に殆ど何の義とも解しがたし。而して教授者は曰はく、後者はシェイクスピアの傑作『ハムレット』中の名文句、デンマークの公子ハムレットが父の讐を殺さんとて殺すを得ず煩悶苦惱のあまり發したる獨語なり。即ち生きてゐやうか又は生きてゐまいかの義即ち死ぬるがましか生きるがましか若しくは存らふべきか但しまた存らうべきにあらざるかなど意譯すべきか。何等の妙文句ぞ。是れハムレット公子が生死の間に苦悶する時の劈頭の警句と。讚歎幾百言、聽く者

呆然恐らくは只イハレを聽いて不精々々感服するの外なかるべし。何となれば所謂意譯を聽くも尙其の妙を認むるに由なければなり。蓋し死ぬるがましきか云々を聽くや人恐らくはまづ地方の益歌を想起すべく「存らうべきか云々」をきかば其の七五調の悠長なるに感じて原語の風調をさどらざるべし。すなはち千百言の講釋も到底風調を傳ふるに益せざるなり。然らば如何にせば可ならん。無上の良法は最良の意譯を施すにあれどもそは大文學者を俟ちてなるべきのこと、尋常の教授者の能ふべきことにあらず。要は教授者をして批判家、賞鑑家たるの資格を具へしむるにありたどへ具象的に真趣味を傳ふる能はざるも抽象的に之れを講ずるの能なかるべからず。前の例については、此の劈頭の苦悶の語の如何に簡潔なるかを説き如何に獨語soliloquyの冒頭のかくあらざるべからざるかを説き、拙き意譯を施さんよりはむしろ忠實なる逐語訓を下すべし。例へば

存さん存さん、存さん存さん、これこれ也 疑問  
To be (or) not to be, that is (the) question:

この譯もとより何の風調をも傳へざるなりされども原意を増減するの弊はなし。蓋しこのさしに必しも應當應當、須須などやうの「ベシ」の義はあらずまして「孰れか勝れる」

とやうの強き意はなし。名優の此の段を演じたる型かたによるも、此の一句は極めて靜に言はるべきものにて意譯にもせよ、直譯にもせよ、一語たりとも増減すべからざる等なり。こは只一例にとまれど總じて鑑識なき講釋ほど原作の真趣味を害ふものはなし、到底説明する能はずは忠實なる逐語訓を施すが却りて万全に近き策なるべし。所詮英語の教授ならば知らず尙も英文學を教へんとせば賞鑑の識ほどは具へざるべからず。

さて第三は教課用書撰擇の無差別なることなり。從來の教授法によれば英國十八世紀の名家も現十九世紀の名什も殆どわいだめなく採用せられ而も教授者は其の新古の説明をもせず二百餘年前の名家の詩文の語法又は文脈さへ頗る今とは異なるをも現時の英文のやうに講じ去り些の注意をも施さざるなり。或はまた破格の名文を採用して之れを教課書となすことあり例へばカーライルの晩年の作の如きこれなり。其の議論の是非はまばらしく措く其の破格文たるは争ふべからず例へば我が西鶴の作の如し其の破格の甚しきにも拘らず美文たるの價値はこれあり而もこれをもて國文の模範とし教課に用ふべしといふものあらば

眉を擡むる者十中八九ならん。いはんや何等の説明もなくして尋常の詩文の如く講じ去るをや。但し予は英文學の教授法を論ず故にカーライルの晩作といふともこれを排除せよといはんとはせず只其の教授者の粗放と不深切とを非とするのみカーライルの如き情熱者の所論は論としても若干の批評を附加するの要あり况や文としては一種特別の性質あり十分の評釋を加へずんば徒に初學の讀者を惑はし單に英文學の本質を誤解せしむるのみならず尙他に欺すべきの弊を生ぜん。かくの如きはまだよし甚だしきに至りては其の文辭こそはめたでけれ其の論述せる事柄は拙くとも彼なたにては已に陳腐に屬したるを今尙新しき説のやうに誇張附會して講ずるため我が年少の子弟をして圖らずも時勢に後れしむることあり若しくは不健全の感想を傳へて感じ易き頭腦に累することあり。例へばバイロン、シェンリー等の詩はをさく時運に胚胎して成れものゆゑそを講述するや毎に歐洲の當代を併叙し何故にバイロンの憤激の志かく猛烈ならざるを得ざりしか何故にシェンリーの感想のさしも理想界に逸したりしか佛蘭西革命の狂暴が如何に人心を震蕩せしか個人と社會との軋轢の如何に極端に達したりし

か此等密接せる大事件を併せて叙説する所なくんばひとり彼等の詩篇をして幾分の氣籜を減せしむるのみならず感じ易き年少の子弟をして間々不健全の感想に感染せしめ不測の弊害を醸すことあるべし。今や我が思想の潮流は將に泰西の大潮に合流し相ならびて理想の大海に向かはんとす否或は泰西のに駕して眞先に理想海に注がんものは我が日東の思潮ならんか電の如き今日の潮勢より觀ればいまだ殆ど圖るべからず。時勢已にかくの如し然るに退潮とも名けつべき過去の感想を代表せる彼なたの詩文章を講讀するに當たり此等緊要の説明を怠り或は語義のみを講じ去り或は甚しく誇張敷衍し更に甚しきに至りては作家が不健全の感想をさへ讃歎稱揚して措かざる如き教授者の沒鑑識に因るとはいへども頗る欺くべき弊にあらざや。バイロン、シェンリー等は例として擧げたるのみジョンソンの『ラセラス』アヂソンの『スペクテートル』ポーアの『人間論』スウィフト、エマソン、キョエテが壯時の作など皆注意して講ぜざんば不測の失弊を醸すの虞あらん。英語のみを教ふるにはかゝる虞なきことなれど總じて文學的講習は幾分か情操上に影響を及ぼすものなり。思はざるべけんや。

### アルフレッド、テニソン略傳

英國文學の全盛期は第一をエリザベス女王朝とし第二をアン女王朝とし第三を常今ギクトリア女王朝とす。此のうち第一は情熱と創新とを以て勝り第二は詞藻の美と結構の巧とを以て勝り第三は觀念の深遠を以て勝る而してテニソンの如きは實に第三者の先驅者の一にして其の代表者たるに耻ぢざるものなり。詳細の評論はすべて之れを英文學史にゆづりこゝには其の畧傳と其の特質の概略とを叙すべし。

アルフレッド、テニソンは紀元後一千八百〇九年八月五日英國リンコンシャーなる一村サマルビーに生まれき。其の父博士ドクターソオルジクレイトン、テニソンは同村なる寺領の監理者にして其の母エリザベスはロウスといふ處の牧師スチイブン、フィッチといふが女なりき。アルフレッドは第三子にして兄弟六人あり、フレデリック、チャールズ、エドワード、ホラシオ、アーサル、セプチマス是れなり。妹一人ありシ、リアといへりグラスゴウ大學の希臘語學教授エドマンド、ロウ、ロシントンといふに嫁しぬ。



アルフレッド、テニソンがはじめて其の作を公にせしは一千八百二十七年にして齡わづかに十八歳の時なりき。こは其の兄チャールズと共に物せし集にて題して『兄弟詩集』"Poems by Two Brothers"といへり。姓名を録せずして出版したるが其の自叙中に記して曰はく卷中なる諸作は總て十五歳より十八歳までの間に作りしもの、但し兄弟相談して作せしにはあらで各自別々に物せしなりと。蓋し兄チャールズはアルフレッドに長ずること僅に一年と一ヶ月なりき。之れより先、アルフレッド七歳の時ロース、グラムマル、スクールと稱する小學に入りき。後數年、故ありて家に歸り兄チャールズと共に父が薫陶を受けて人となれり。『兄弟詩集』は此の家庭教育中の作なり。さて詩集出版の翌年(一千八百二十八年)或は謂ふ同二十九年のはじめと兄弟相携へて嚮に長兄フレデリックが入學せしかムブリッヂ大學の一校トリニチ、コレイヂに入りぬ。入學の當時アルフレッドは懸賞詩篇に當選して名譽の金牌を得たり。"Tribute"といへるは此の時の作なり。彼の有名なる歴史家ヘンリー、ハラムが子、アーサル、ヘンリーと相知りしもまた此の際なり。後にアルフレッドがあらはし、有名なる傑作「紀念のために」"In Memoriam"

は此の心友を追悼して作せしものなり。其の他在學中の交遊はいづれも後年に至り文學、政治、宗教等に錚々たる名を博せし人々なり。

上にいへる應賞の詩『テムボクツ』は一千八百二十九年中に上梓せられ同年七月の『アセニヤム』(雜誌)は好意をもて之れを迎へ其の才藻をたへたり。按ふにテニソンが特質の影は已に此の壯時の作に見えたり是れいと稀なる現象なり。彼のロオド、バイロンの如きは近世稀に見る所の逸才にして其の文致といひ其の感想といひ奇峭矯勁時流に卓然たる所の者ありされども其のはじめて作りし作 "Hours of Idleness" には其の特色殆ど見えず尋常の英才と見られしのみましてや後年のバイロンの影は之れを認むるに由なかりき。

一千八百三十年更に詩集を出版せり題して "Poems, chiefly Lyrical, by Alfred Tennyson" といふ抒情詩を主とせるアルフレッド、テニソンが詩集の義なり。此の集中に載せられたるものうち "Ode to Memory" (記憶力に寄するの長歌) "The Poet" (詩人) "The Poet's Mind" (詩人の心) "The Deserted House" (廢屋) 及び "The Sleeping Beauty" (睡美人) の如きは前途のいよゝ多望なるを示し且其の傑特なる真相をも現せり

（此のうち睡美人は何故にや其の後の詩集には省かれたり。此の集に對する世間の批判、就中諸批評雜誌の月旦は褒貶相半したり恐らくは非難のかた多かりしならん。かくて同三十二年（作者二十三歳の時）に第二の詩集世に出でたり題して“Poems by Alfred Tennyson”とす（り）『アルフレッド・テニソン詩集』の義なり。此の集に見えたるうち最も清新と思はるゝは

“The Lady of Shalott.”

『シャロットの妖姫』

“The Millers' Daughter.”

『磨者の娘』

“The Palace of Art.”

『美術殿』

“The Lotos Eaters.”

『無爲の島人』

“A Dream of Fair Women.”

『衆美人の夢』

等いづれも皆情理高遠、詞致典麗、之れを前年の諸作に比するに風情風姿ふたつながら豊然たるものあり。蓋しテニソンが詩人としての本領は此の時に至りて漸く其の圓境に近づけりしなり。之れより前の作は概して筆ならしいの趣あり又詞調の琢磨と修鍊とに過半其の力を奪はれたるの觀あり。吾人は三十二年をもて

テニソンが詞壇の卒業期と名けんとすすなはち彼れが本色の確定せし時なり。さはれ當時の諸評家は之れを遇すること必しも厚からざりき。例へばジョン・ロウソポット（モートの婿）の如きはやゝ戲體的筆法もて『毎週評論』に之れを評せりまづは『エストミンストル』に載せたるジョン・スチュアルト、ミルの批評をもて當時の尤も穩當なる評とすべし。ミルの評は一千八百三十五年七月の號にいでたり。爾後十年間は折々雜誌などに寄稿せしのみにて久しく長篇をいだしりしが一千八百四十二年（作者三十三歳の時）更に新版の詩集をいだしぬこは已發の兩集より粹を抜き更に若干の新作を加へたるものなり。新作中の傑作は蓋し左の數篇ならんか。

“Ulysses.”

『ホリシース』

“Love and Duty.”

『戀と義』

“The Talking Oak.”

『解語の樅樹』

“Godiva.”

『ゴチヴァ』

“The Two Voices.”

『二聲』

就中末二篇の如きは當年のテニソンを表現する者として尤も留意すべき價值あり殊に『二聲』の如きは十九世紀のハムレット公子が獨白と稱せられたり。此の新詩集いで、テニソンが詩名ははじめて定まりぬ英國の讀書社會ははじめてテニソンの大詩人たるを知りぬ。此の集の如何にもてはやされしかは出版の翌年に第二版いで又其の翌々年(一千八百四十五年)に第三版いで、又其の翌年(一千八百四十六年)に第四版いで、又同四十八年に第五版のいでしをもても知るべし。さて之れより先同四十七年に“*The Princess: A Medley*”と題したる長篇の物語歌いで其の翌年には其の再版いで同五十年に至ては“*In Memoriam*”梓に上りぬ。此の作は同じ年のうちに版を重ねること都合三たびに及びきといふ。

一千八百五十年六月十三日ヘンリー、セルウッドの女エミリーを娶りて妻とす時に四十一歳なりき。之れより先同年四月時の桂冠詩宗メトリカル・ソネットナルゾナルスみまかりて其の後を襲ふものなし。テニソンとエリザベスブラウニング(有名なる女詩人)とは其の候補として推されたりしが多少の動搖の後輿論はテニソンに桂冠を捧げ

き。此の決定に與りて最も力ありしものは其の近作“*In Memoriam*”の好評なりきとぞ。翌年三月パッキンガム宮に於て女皇陛下に謁し同月更に其の詩集の第七版をいだしぬ。“*To the Queen*”と題したる小品は此の版の巻首に添へしものにて并クトリア陛下にたてまつりしものなり。

桂冠詩宗となりし後の諸作は一々紹介するに遑あらずこゝには只其の尤なるものゝ題名のみを掲ぐべし。“*Maud*”といふ長篇は一千八百五十五年に成り同五十九年には明にテニソンが傑作中の一なる“*Idylls of the King*”の第一いでたり。此の巻のうちには“*Enid*”“*Vivien*”“*Elaene*”“*Guinevere*”の四篇含まれたり。同六十四年には“*Aylmer's Field*”“*Sea Dreams*”“*The Grandmother*”“*The Northern Farmer*”の四篇と共に『*イノセント・マン*』といふ物語歌い又同六十九年には“*Idylls*”の次篇いでき。此のたびは題して“*The Holy Grail and Other Poems*”といふ。此の集のうちには“*The Coming of Arther*”“*The Holy Grail*”“*Pelleas and Ettarre*”及び“*The Passing of Arther*”の諸篇を含めり。さてまた同七十一年には『當代評論』の紙上に“*The Last Tournament*”といふ同七十二年には“*Gareth and Lynette*”同七十五年には“*Queen Mary*”(劇の詩)同七十

七年には「Harold」(同上)同八十年には「Ballads and Other Poems」なり。

三三

テニソンの多才なるや其の作せし所一様ならず所謂 Idyllic Poetry に屬する山野の風物に係せる物語歌あれば幽玄深遠なる哲理に係せる冥想の作あり尋常の物語歌もあれば寫景狀物を主としたる作もあり。又尋常の抒情歌あり又純然たる劇の詩あり。いづれも刻苦洗鍊の作、就中狀寫諷詠の趣致はゆたかに當世紀を代表するに足れり。但し其の劇の詩はむしろ其の短所を表せるものなり第一、科介の妙乏しく第二篇中の人物に彼のシェイクスピアに見るが如き宛然入神の妙相無し。所詮テニソンは抒情狀景の巨擘、兼ねては物語歌の妙手なり。

テニソンが世間に示したる莊麗なる詩篇はいづれも經營慘憺の結果なりき。英國の詞壇古來名家に富めりと雖もみづから詩人の天職を意識し其の天職の神聖なるを信じ十年一日の如く忠實に熱心に續断に眞摯に勇猛精進片時も其の理想を忘れざりし者は思ふに五指を屈するに過ぎざるべし。ミルトン、チャルズナルス、ブラウニング、此等二三者の名を挙げ更にテニソンの名を掲げばまた他を擧ぐる能はざらん。テニソンが理想は其の由りて來たる深くして遠し二十一歳の詩集

に己に其の明瞭なる表白あり「詩人」及び「詩人の心」の如き是れなり。又前に卒業期と名けし其の第二の詩集中にも其の理想の見えたるものあり「シャロットの妖姬」の如き「美術殿」の如き共に肺腑底よりいでたる聲、其の由る所深しといふべし。予は下の評釋に於てまづ此の卒業期の作に就きてテニソンを讀者に紹介し此の大家の片影を寫すべし。

テニソンが畧傳を結了する前に更に少しくいふべきは彼れと時勢との關係なり。總じて文學は當時を反映するものにはあれど時勢に後ると時勢に併行するど時勢を先導するとの間に作家の品質の優劣あり。テニソンの如きはもとよりいまだ時勢を先導せし作家とはいひがたければ之れを豫言者と稱せんは溢美なれど毎に當時を代表せりといふ稱は何人も否拒せざる所ならん。按ずるに彼れが作には毎に宗教上、道德上、社會上、すべて此等の問題に關する當時の進歩せる輿論の影映れり。勿論嚴密にいふ時は彼れが歌へる所は必しも當年最勝の思想にはあらず最も創新なる思索、最も進歩せる思想にはあらず而も其の作に見ゆる所は當時の眞相を反射せるもの、最も聰明なる英國人全體の最近年に於ける修鍊と經

驗との結果、苟も當代の聰明者が自家の影なりとして首肯せざるを得ざりし者なり。これ豈時勢を代表せる者にあらざらんや。或は晩年のテニソンを貶する者あり曰はく彼れは最早英人の理想を歌ふ能はずと夫れ或は然りしならん。され晩年のテニソンが時勢に後れしを實とするもそれは功成り名遂げて實を身へんとせしころのテニソンなり其の壯時のテニソンはたとへ最も進歩せる思想に副ふ能はざりしもたしかに新しき思想の謳歌者にして時には新理想の鼓吹者なりき。例へば千八百四十二年にいたし、『ロクスレー、ホール』を見よ、彼れは人物の口を假りて自家の感慨の影を抒らして更に轉じて將來の期望を歌へり是れ明に時の改進黨の希望なりき猶後年に及び『六十年後のロクスレー、ホール』を著して時の保守派が抱ける思想と疑惑とを歌へるがごとし。或はまた『Princes』を見よこれには當時の新問題たる女權論の旨に密接せる者なり。若しくは『美術殿』の旨を味へ、是れはこれ當代の一弊たりし出世間熱の誤謬を諷刺し暗に眞善美の相關を説き世間と出世間との關係を歌へるものなり。『美術殿』の美術に於けるは St. Simon Styliter の宗教上の僻見に於けるが如し後者は主我的枯禪主義の弊を難じ世間的

義務の重すべきを説けり。いづれもテニソンが理想の影にしてまた當代の思想の粹なり。要するにテニソンが終生の理想は天法を畏敬するにあり精進を推奨するにあり秩序を紊さずして進歩するにあり義理を重じつゝも人情を重じ平等を愛しつゝも差別を愛し出世間に遊びつゝも現世間に處するにあり。其の平素の行實も頗るよく此の理想に副へりしに似たりテニソンの如きは思ふに詩人中の君子人たるに近かるべし。

予は此の評釋の緒言中に彼れが全豹を詳述するの餘地を得ざればまばらく評論をこゝに止めたいちに訓釋に着手すべし。彼の卒業期以後の作についてはまたあらためて説く折あらん以上はたゞ彼れが片影を紹介せるのみ。テニソンは千八百九十二年十月五日齡八十三歳にてみまかりぬ。

## The Lady of Shalott

『シヤロットの妖姫』は Donna di Scalotta と題せる伊太利小説より思ひつきて案を構

へたるものと聞こゆ。ふと見れば何のことも無き一小話に類するものなり。其の筋の要をいへばむかし古英國の英雄王と聞こえしアーサルといへる君がカメロットの王城に在しけるころ其の王城へ流るゝ一道の小川あり其の川上に一の小島ありてシヤロットの島といへり。此の島の樓上に只ひとり妖姫ありて常にあやしき織物をす然るに宿世の業因ありて憫むべし此の姫は終生此の樓に幽せられ曾て他にいづるを許されざるのみか其が面前に据えられたる一大明鏡に映じ來たる山河艸木花鳥舟車人獸の外は絶えて他を見るを許されず若しかりそめにも機械る手をとれめ樓外の景物を見ることがあらば不測の災厄を蒙るべしといふ神明のいましめあるが爲に姫はとこしなへに鏡にのみむかひ山川田野をそびらし只管織物にいそしむものから未來に何の望もなく樂しみも無く恐れも無くまた存ふる甲斐も無く殆ど死にたる身と異なることなし。さるほどにある日のことなりアーサルの君に使ふる武士にランスロットといふ好丈夫あり甲冑はなやか

に取りよろうて背後の岸頭をよざりけり。さて其の姿の鏡の面に映るを見るやさしも日ごろは謹慎なりし心も戀風にゆらぎそめて物織る手をとれめてつとふりかへり見るとそのまゝ鏡は微塵に碎け散りて不祥の兆<sup>きざし</sup>歴然たりけり。姫は宿業のまぬがれかたきを悟り竟にみづから死を決してさゝやかなる艇に打乗りやがて流れくゝてカメロットの城下にいたりそこにて息をひきとりけりといふ是れ此の篇の大要なり。されども深く其の言外に立入りて作の真相を窺ふときは所謂シヤロットの妖姫とは天地の美を歌ふ詩人にして荒唐奇怪なる篇中の事件はすべて出世間界即ち詩的本領と俗界即ち世間との關係矛盾衝突及び其の悲むべき結果等を暗示諷諭せるに外ならずと見ゆ即ちテニソンが觀念の影なり。章を分かつこと四、其の一に於てはまづシヤロット島の四圍の光景を叙寫し來たる。

其の一  
Part I

On—either—side—the—river—lie

Long—fields—of—barley—and—of—rye,

That—clothe—the—world—and—meed—the—sky;

英文評釋 テニソン『シヤロットの妖姫』

And thro—the field the—road—runs—by  
 To—many—tower'd—Camelot;  
 And up—and—down the—people—go,  
 Gazing where—the—lilies—blow,  
 Round—an—Island there—below,  
 The—Island—of—Shalott.

是れ其の、一中の第一解なり。律は昂起四步格即ちアイアムビック、テトラミートルにして首の四行は相つぎて押韻し第四行にいたりて更に律を約して調をあらため更に又一轉して低起格を併用し巧に次の三行を押韻し尾におよびて第四行と和韻す。昂起格と低起格とのことは、英文學史チヨウサルの條下に畧説し置きたれば参照すべし。所詮律格及び風調の事は口授するに易く筆談し難し否なし難きにあらず解せしめ難し又管々しく煩はし故に予はすべて以下の評釋にては只意義と風韻とのみを談じ律呂の説明には及ばざるべし。讀者此れを諒せられよ。前に訓じたる一解は殆どものづから明にて釋を要すべき節すくなし。多樓臺の

訓はやゝ妥當を欠く城樓など譯すべくや我が國にいへる城櫓やうのものゝあまた巍々として聳えたるをいふなり。すべてシヤロト島外の風景を簡叙す。寓意の上よりいへば世間日常の景况來往する行客は世間尋常の俗衆なり。

Willows—whiten, aspens—quiver,  
 Little—breezes dusk—and—siver  
 Thro—the—wave—that—runs—for—ever  
 By—the—Island—in—the—river  
 Flowing—down to—Camelot.  
 Four—gray—walls, and four—gray—towers,  
 Overlook—a—space—of—flowers,  
 (And) the—silent—isle imbowers  
 The—Lady—of—Shalott.

原詞に就きて律調の波瀾を味ふべし。前解は昂起格をもてはじまり此れは却りて低起格をもて起くる。かゝるたぐひの作は單に意義のみを讀みては旨味のな

かばを没了すべし韻語の佳什の譯すべからざるは此の故なり。  
此の段はた意義明白なり特に釋すべき要あるを見ず。只一句黒みてそよぐとあるは國文の許さざる所ならん。原意は河浪の風にもまれて黒みわたれるをいふ。浪を賓とし風を主としたるにちのづから一種の情趣あり是れまた譯するに術なし。

岸の ぼつりな きたと柳にのりかへり  
By—the—margin, willow-veild  
重げなる大船をゆく  
Slide—the—heavy—barges trail'd  
徐歩の馬に ちし 鳴らさくる人もなく  
By—slow—horses; and unhalid  
此の船は 衆の帆をたつ  
The—shallop fifteth silken-saild  
走つて  
Skimming—down to—Camelot.  
かばはあつた誰だかは見こる 彼の船の其の手を打ぶるを  
But who—hath—seen her wave—her—hand?  
昔は かの船のどし 誰か見るはつ彼を  
Or at—the—aisement seen her—strand?  
はた 彼れはしも知らるゝなつて此のあたりの人に  
Or is—she—known in—all—the—land,  
彼のシラロットの妹の船は  
The—Lady—of—Shalot?

「重げなる大船」とは物あまた積載せたる船をいふ。按ふにカメロット城におはすア  
ーサルの用船か又は乗客貨物を送る船なるべし。「すべる」とは船の下りゆく形容  
也。「よびかくる人もなく」とは日々に船は川下へくだりゆけど彼の姫のたちいで  
ゝ之れを見る影もなくまた人のひとりだに此の船に物いひかくることもしなしと  
の意。船も寂として下り人も寂として在り彼れ此れ相關する所なし。彼れは現  
世間此れは出世間境。

のつり只を別る思ふ朝またたき  
Only reapers, reaping ~~the~~ barley  
衆のちし 大衆のちし  
In—among—the—bearded—barley,  
聴いたを聲を聞へりせやばらへちのちのちなご  
Hear—a—song that—echoes—cheerly  
清へへびり流せふへ かなたなる原野へ  
From—the—river—winding—clearly,—  
舟の國のシラロット  
Down to—tower'd—Camelot:  
ふへつ夜々の月の下に 幾どなる原の歌を  
And by—the—moon the—reaper—weary,  
衆のちなる原野をゆく 幾どなる原の歌を  
Piling—sheaves in—uplands—airy,  
衆のちをたかへりてかへりてさつさつとさつさつとシラロットのシラロットの  
Listening, whispers 'Tis the—fairy—



「Lady-of-shalott」

「髯のびし大麥」とは麥の穂の生ひのびたるを髯の延びたるに喩へていふ也。cheerly  
といふ語今は「快活に」樂しげになどを釋するを常とすれど古くは「いき／＼と」「さま  
しくなどいふ義に思ひたりこゝは briskly の義なれば本譯の如く物しつ。以上本  
尊たる妖姬が周邊を叙せり以下妖姬が平生の起居におよぶ。

其の二

Part II

There she (weaves) by-night-and-day  
A-magic-web with-colours-gay.  
She-hus-heard a-whisper-say,  
A-curse-is-on-her if-she-stay  
To-look-down-to-Camelot.

She-knows-not what-the-curse-may-be,  
And-so (she) weaves-steadily,—  
And little-other-care-hath (she),  
The-Lady-of-Shalott.

奇しく怪しき稜を織るとは暗に靈妙なる詩歌又は他の美術を作するを指せるな  
らん。「美術は清淨潔白なる出世間の技なれば些も俗感の伴ふをゆるさず塵俗の  
世間を樂欲するの念いさゝかも添ふときは美術はたちまち穢き物となり作家ま  
た禍を受くべしゆめ世間に執着の目を注ぐな。是れそこともなくさゝやく聲の  
美術家に警告する所なり。すなはちカメロット城は俗世間を代表せるなり。而し  
て妖姬即ち美術家は其の心清淨無邪もどよりいまだ其の災厄の如何ならんをも  
知らねば只管織物を織るの外絶えて餘念あることなし是れ美術家が初一念にし  
てすなはち其の本相なり。たゞしかく釋するは蓋し言外の隱微といふものかゝ  
る穿鑿を立離れて別に此の詩の旨を味はざるべからず。

And moving thro' a-mirror-clear

(That) hangs—before—her—all—the—year,  
 Shadows—of—the—world appear.  
 There she—sees the—highway—near  
 Winding—down—to—Camelot:  
 There the—river eddy whirls,  
 And there the—surly—village—churls,  
 (And) the—red—cloaks—of—market—girls,  
 Pass—onward from—Shalott.

妖姬の面前に終年懸けられたる一大明鏡あり、窓外なる山川艸木はいふに及ばず、  
 彼なたの岸頭に往來するありとある世人の影は皆まざくとうつりあらはる。  
 所謂明鏡は詩人美術家が想像の鏡なるべし。「いそがしき浮世の影原詞には忙し  
 きといふ語はなけれど moving とあるによりて繁き來往の義見えればかくは譯  
 しつ。「うねくれる」とは大略の曲折してカメロット城のかたへ通じたるをいふ。「あ  
 らくれる」とは粗野といはんほどの義。「きぬ赤き市の乙女」とは赤き色の羽織やう

のもの被たる少女の物賣をいふ。此の島にてつくりたるを賣らんために又はか  
 なたにて買ひだしせん爲に市へゆくなり。  
 すべて叙寫の妙は一々評するに違なければ省く宜しく原詞を咀嚼し其の旨のめ  
 でたきを知るべし。

Sometimes a—troop—of—damsels—glad,  
 An—abbot—on—an—ambling—pad,  
 Sometimes a—curly—shepherd—lad,  
 Or long—hair'd—page in—crimson—glad,  
 Goes—by to—tower'd—Camelot;  
 And—sometimes thro'—the—mirror—blue  
 The—knights—some—riding two—and—two:  
 She—hath—no—lajol—knight—and—true,  
 The—Lady—of—Shalott.

鏡面に映じ來たる浮世の現象を敘するにまづ無邪快活なる少女の一群を以てし

次には嚴肅なる老法師を點出し更に里びたる羊かひのわらは、又花やかなる殿上人、やがて一轉して本篇の骨子たる美丈夫の上に及ばんために三々伍々騎して來たる武士のとに及ぶ。「長髮の小殿原」とはカメラットの王城に奉仕せるわらは小姓の謂なり。むかしは長髮をたくはふるは殿上人の特權なりき。「アハレまだひとりだに」云々はシヤロットの姫に意中の人無きをいふ。西洋封建のむかしには東洋に例なき一種の習慣ありて苟も當時の眞武士たらんものは必ず一貴女を選びて其の女君とあがむるの例なりき。貴女もまたかゝる武士を得ることを譽とせり。Knightとは勳爵ある武士の謂なれば予は之れを士爵と譯す。正當に謂へば士爵と貴女との關係は主と従との關係に外ならねど後には人情の自然によりて此の主従の關係のうちより切なる戀愛の成たちしこと間々あり隨うて貴女は士の意中の人士は貴女の情人たりし趣あり。こゝにシヤロットの姫をあはれみて未だかしづきのものゝふなしといふは其の意中の人の無きを謂ふ也。士爵と貴女との關係は泰西の中古史に通じたる人の熟知する所なれど不案内の人は予が近ごろ文武叢誌といふ雜誌に「西洋中古の武士道」と題して叙説せるを見るべし。

But—in—her—web—she—still—delights

No—weave—the—mirror's—magic—sights,

For often thro'—the—silent—nights

A—funeral, with—plumes—and—lights—

And—music, went—to—Camelot:

Or when—the—moon—was—overhead,

Came—two—young—lovers—lately—wed;

'I—am—half—sick—of—shadows,' said—

The—Lady—of—Shalott.

まかはあれど一心不亂に織物に身を委ねたるシヤロットの妖姫は戀の何たるかも知らねばこそ鏡に映る影を種にくさくの世のさまを綾のきぬに織りいだしまばらくも休むことなく絶えて餘念なきものゝ如し。蓋し此の不可思議なる鏡

にはあらゆる人世の影はうつれりあはれなる野邊送りの悲しき影もむつまじき男女が月下の影も、およそ人間の悲喜哀歎物として映らぬはなかりけり。按ふに不思議なる魔鏡は詩人及び美術家が想像の魔力、妖姫はすなはち醇乎たる美術家、綾ぎぬはすなはち詩歌、繪畫。夫れ美術家は超然として塵欲の外に立ち常に想像の世界に住し自在に人生の苦樂を冥想し自在に人生の悲喜を描畫し以て至淨の悅樂を享受す須らく他に求むる所なかるべきなり。まかれども人はもと木石にあらず多感多情の美術家いつまでかよく超然たるを得ん。彼れが出世間の悅樂は動もすれば他の世間的悅樂を羨み此れを棄て、彼れを取らんとす。是れを美術家が最も危險の試験期とす。シヤロットの妖姫の如きは今方に此の危險の淵に臨みたり。彼れは月下の男女を見、其のむつまじきさしめごとを聞き我れあらず艶羨の心を生ぜりされどみづからは夢にだに羨む心ありと意識せぬなり。すなはち獨語して曰はく、あはれ倦み果てつ影を見るもど。彼れはいまだ自家を知らず自家の本心を會せざるなり塵欲肉欲などいふ怖ろしき惡魔がさりげなき假面をかぶりてひそかに忍びより、つゝあるに氣附かざるなり危いかな。

PART III

矢の射はるるに 眼を住むたのつの一軒籠より  
A—bow—shot from—her—bower—eyes,

彼の人は騎馬にのりてゆきり 大麥の穂の間を  
He—rode between—the—barley—sheaves,

日の光 光のさすまはるるに  
The—sun came—dazzling—thro—the—leaves,

And famed upon—the—brzen—graves  
勇敢なるシヤロットの(胸の)上

Of—bold—Sir—Lancelot.

此の節に至りてはじめて男主公ランズロットを點出し來たる。彼の人どまづほのかに指しやがてソルランズロットと明叙しついで其が携へたる楯に及ぶ。

一個の赤十字の騎士 終に 一人(の脚)に  
A—red—cross—knight for—ever kneel'd—

鏡をもちてはるるに(の)上  
To—a—lady—in—his—shield,

その指 輝きだす 黄ばんだ楯に  
That sparkled on—the—yellow—field,

はるかにシヤロットの島外に  
Beside—remote—Shalott.

ランスロットが携へたる燦爛たる楯の面に赤十字架を徽章とせる一個の武士の一貴嬢の足下に跪けるかたを畫きたり。(赤十字架は勳爵士が本來の標章)蓋し神明を崇尊し婦人を敬愛するの意を示したる畫様なり。すなはち暗に此の楯の持主ランスロットが生平の主義を標示す。さて此の金銀を鑲めたる楯の其の背後なる黄雲に映じて燦爛的燦たる風情いと簡に寫されたり。前の節の青白き夜景と此のはでやかなる晝の景と相照映して一段の趣致あり。

殊王を鑲めたる手ひきは  
The—genny—bridle glitter'd—free,

わきの綱なる馬の鬃に  
Like—to—some—branch—of—stars we—see

懸るを見る彼の黄金なす天の河に  
Hung—in—the—golden—Galaxy.

馬の手綱にびんたを鑲  
The—bridle—bells rang—merrily

カスロットは彼れを馬を進めける  
As—he—rode—down—to—Camelot.

「とあるつらなれる星」とは銀河はつらなれる星の集合より成れるなれば其のうちの一つらに似たりとの意。原文には「一枝」とあれど一連の義なり。支那にては銀河銀漢などいへるをこゝに「黄金なす」といへるは詩人の形容なり實にはたがごと銀といふよりも一段きはやかなり。As he rode の as は「何々するにつれて」といふ時のつれての義ありこゝには「時に」と訓ませたれど處によりては「まゝに」随うて「何々せしかば」何々するからに「な」便宜の訓を施すも可なり。こゝはランスロットが駒を進むるにつれて手綱の鈴樂しく面白く鳴りひびくといふほどの意なり。

其の強健なる手綱に  
And from—his—bazon'd—baldric slung

一のふたしち口金の槍に  
A—mighty—silver—bugle hung,

其の進むにつれて  
And as—he—rode his—armour—rang

其のたがシヤロットの島外に  
Beside—remote—Shalott

訓はすべて便宜にきたがひて物したれば同じ原語にありながら前後訓を異にせるものあり意味を咀嚼して訓讀の鹽梅をなとるべし。例へば Remote は「はるか

なる「又は「隔たれる」といふが本義なれどこゝには「かなた」と訓じ前に「島外」と訓ませし Beside をこゝにては「島邊まで」と訓めるなど。 Mighty は俗語にていはゞ「メバラシキ」といはんほどの義を含めり「大なる」の義にはあらず。

此の段及び次の段は筆を極めてランズロットが盛装と其の風丰の美とを状叙す。只に目に見て立派なる由をほのめかせるのみならず耳にも美しき銀鈴の音、踏々たる甲冑の響、文外に含ませたる蹄の音、馬の嘶などくさくさの物の音をも叙し、だしてまづ讀者の心を動かし、竟に妖姬をも動かし來たる。筆簡にして老成。

なぐりて 奇装の盛もなく暗れたる日に  
All in—the—blue—unclouded—weather

まげく 珠玉も飾らむと輝けり 鞍のなまじ草は  
Thick-jewell'd shone the—saddle—leather,

兜の羽根飾り  
The—helmet—and—the—helmet—feather

炎々たり 合して一團の猛火の如く  
Burn'd like—one—burning—flame—together,

カメロットは疾く彼を駈を進めしめり  
As he rode down to Camelot:

All は一字一句には係らず、此の段悉皆に係る俗語に碎きて説かば「すべて此の事

たるや青天白日最もうらくと晴れ渡りたる日に起こりたる事なり、されば日光と盛装とが相映じて其のきはやかさもまた一志はなり」といはんほどの心なるべし。「鞍のなめし草」とは柔草もて被ひたる鞍のと也。「炎々たり」云々とあるは紅の鳥毛つきたる金色燦爛たる兜の眞晝の日光に反射して遠目には猛火の燃ゆるが如く見ゆるをいふ。

群ぐは 折々に 彼の群たゞの夜半の聲を被りて  
As often thro—the—purple—night,

燦然たる群星  
Below—the—starry—clusters—bright,

その長髯のひかりの  
Some—bearded—meteor trailing—light,

此の孤頭を過ぐるに似たり  
Moves—over—still—Shalott.

陰鬱静寂なるは島内の景致燦爛目を奪ふは島外の風物、就中ランズロットの盛装、此の二者の照對を以て彗星の突として星づき夜に飛び過ぐるに喩ふ着想已に妙、詞調更に妙、これまた到底訓じがたきもの。「さる長髯のひかり物」とは彗星をいふ。 trailing は尾を牽くをいふ義。こゝの As は猶の字にあたるまづ猶と訓み後

に。と。し。と。訓み戻りてもよし。 still は寂寞の義、こゝには孤と假譯せり。

彼の影なる鏡に額は 日の光に glow'd

His brode—clear—brow in—sunlight glow'd

其の影なる蹄は 彼の軍馬の蹄に

On—burnish'd—hooves his—war—horse trod;

彼は其の影に 彼の鎧の影に

From—underneath—his—helmet flow'd

其の影なる蹄は 其の影の蹄に

His—coal—black—curls as—on—he—rode,

As—he—rode—down—to—Camelot.

From—the—bank and from—the—river

其の人の面影は 水晶の鏡の面に

He flash'd into—crystal—mirror,

Tirra lirra, by—the—river

Sang—Sir—Lancelot.

「廣やかなる額」は美丈夫の相也かなたにては男女とも額の高くして廣きを尊ぶ。「踏歩しゆきぬ」の原語 trod は tread の過去にて昂然として歩行するの意あり今好譯語を得ず。「石ずみにまがふ」云々彼なたにては黒きを石炭に喩ふること珍ら

しからず和漢の文章に漆黒とあると同じ心と知るべし。「岸よりも又河よりも」とあるはランズロットの影の岸よりすぐに鏡に映れる外に河にうつりたる影の更にまた鏡に映るの義實際はあるまじきことのやうにも思はるれどこゝは妖姫が心の動かざるを得ざりし因縁を著くせん爲に間接にも又直接にも誘惑物の襲來せるさまをほのめかしたるならん。例の寓意の方面より臆測の解を下さば直に映る影は自家の想像に浮ぶところ即ち我が直覺によりて見いだしたる浮世の姿、水面より反映せる影は他人が想像浮びたるを更にまた想像したるたぐひにて喩へば古詩古歌などに寫せるを讀みて浮世の有様と想像しかくもあるべしと思ふのたぐひか。そはとまれさらでも月下に逍遙する情夫情婦の影を見てより心漸く動きそめて織物織ることに倦みたりし妖姫は此の俊爽なる美丈夫の影を見て心恍惚と我れを忘れ思慕の情禁する能はず折しもあれかなたの岸にいと明かなる聲音してテラレラと誦するものあり。嗚呼これ此の影の主の聲か。目己に美しき姿を見耳また此の美なる聲を聞く姫が心動いて更に動かざるを得んや。「テラレラ」は歌うたふ節なり意義なし）すなはち姫は突として起ち

She left—the web, she left—the loom,  
She made—three—paces—thro'—the—room,  
(She) saw—the—water-lily—bloom,  
(She) saw—the—helmet—(and)—the—plume,  
She—look'd—down—to—Camelot.  
Out—flew—the—web—(and)—floated—wide;  
The—mirror—erack'd—from—side—to—side;  
'The curse is come upon me,' cried—

The Lady of Shalott.

此の段落と解釋をくみあはせしむ。ローの断るべきは water lily の譯なり前段  
に lily もありしも同じき花なること明なるを water の字なかりしためいぶかし  
と思ひながら「百合」の花と訓ませしは誤なりきよろしく「蓮」とあらたむべし。

Part IV.

In—the—stormy—east-wind—straining,  
The—pale—yellow—woods were—waning,  
The—broad—stream in—his—banks complaining,  
Heavily—the—low—sky—raining  
Over—the—tower'd—Camelot;  
Down—she—came—and found—a—boat—  
Beneath—a—willow—left—afloat,  
And—round—about—the—prow she—wrote  
The—Lady—of—Shalott.  
And down the—river's—dim—expanse  
Like—some—bold—seer—in—a—trance,  
Seeing—all—his—own—mischance—  
With—a—glassy—countenance—



船はカメロットの方を見ひふか  
 Did—she—look—to—Camelot.  
 And at—the—closing—of—the—day  
 She—loosed—the—chain,—and—down—she lay;  
 滔々たる河水は船を載せしはるるもなだく流に去らる  
 The—broad—stream—bore—her—far—away,  
 此ミヤロットの歌を(載せし)  
 The—Lady—of—Shalott.

妖姬死を決して舟に上る心はひとへにランスロットに集る恍としてカメロットを  
 遠望するのみまた些の他念なし。戀の魔力の大なるを見るべし。此の段寓意の  
 方面より見れば恐るべき煩惱の明なる真如を蝕せるため神聖なる天職中道に破  
 れ忽然として悲境に墜落せるものとも見るべし更に悉しくいへば我が理想中の  
 幻影を何等の手續をも蹈むことなくして直に實現せんと欲したるによりて自招  
 自致したるの悲劇とも見るべし。然れどもあながち寓意のみに泥むべからず戀  
 の魔力といふことを眼目なりと見て此の詩を味ふも頗る可也。蓋し春女の吉士  
 を思ふは造化必然の妙作用にして水火も之れを禁むる能はず死もまた之れを威  
 赫する能はず女をして甘じて死地に就かしむといふ是れ此の篇の一面の想なり

打臥して 船はカメロットの方を見ひふか  
 Lying, robed—in—snowy—white.  
 右に左にひたひたに 船はカメロットの方を見ひふか  
 (That) loosely flew to left and right—  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 The—leaves—upon—her—falling—light—  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 Thro'—the—noises—of—the—night  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 She—floated—down—to—Camelott:  
 And as—the—boat—head—wound—along—  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 The—willow—hills—and—fields—among,  
 城内の人々は 船はカメロットの方を見ひふか  
 They heard—her—singing—her—last—song,  
 (船はカメロットの方を見ひふか)  
 The Lady of Shalott.  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 Heard (a) carol, mournful, holy,  
 (船はカメロットの方を見ひふか)  
 Chanted—loudly—chanted—lowly,  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 Till—her—blood—was—frozen'd—slowly,  
 船はカメロットの方を見ひふか  
 And—her—eyes—were—darken'd—wholly,—

Turn'd—to—tower'd—Camelot.

「悉皆昏うなりにけり」とは「全く見えすなる」の意。歌ひながら死にゆくさまの如何に美しきぞ詩人は醜を美にすとはこのらの筆つきをいふなるべし。

For—ere—she—reached—upon—the—tide  
水涯なる第一層。  
The—first—house—by—the—water—side,  
水涯の邊なる第一層の屋敷。  
Singing—in—her—song—she—died,  
シヤロットの歌聲。  
The—Lady—of—Shalott.

「どゞく」とは「到り着く」の意。 upon the tide とは潮流に押し流されての意。「水涯なる第一層」とは「シヤロットの市」に着くや否といふ意を目に見るやうにいひあらはせるなり水に臨る町はづれの家屋といふ意。

Under—lower and balcony,  
園の下の庭壁と並の廊下。  
By—garden-wall and gallery,  
庭の壁と並の廊下。  
A—gleaming—shape—she—float'd—by,

Dead-pale between—the—houses—high,  
寂然の市とわがシヤロットの城の間に  
Silent—into—Camelot.

Out—upon—the—wharfs—they—came,  
市人も 市人も 女房も  
Knight and burgher, lord—and—dame,  
騎士と市人並の町人並の女房も  
And—round—the—prow—they—read—her—name,

The Lady of Shalott.

「かすかにきらめく姿」とは「たそがれの星あかりに姫が白衣のきらめくをいふ。此のあたりの詞調を味へば水のまゝに流れゆく舟の姿見ゆるやうなり高樓櫓比せるひま／＼を物しづかに流るゝ川の息たえしなきからを寂然と載せてゆくさまあはれにもまた物淋し。「波戸」とは波戸場といふに同じ。 Dameとは高貴の女性をいふ官女などを指す假に女房と譯しつ。 round the prowとは「舟首の周邊」にの意すなはち舟の胸ともいふべきあたりには姫が名を一行に横書せるを指す、roundの語今よき訓を得ず。

Who—is—this? And—what—is—here?

And—in—the—lighted—palace—near  
 Died—the—sound—of—royal—cheer;  
 And—they—crossed—themselves—for—fear,  
 All—the—knights—at—Camelot;

But—Lancelot—mused—a—little—space;  
 He—said, “She—has—a—lovely—face;  
 God—in—his—mercy—lend—her—grace,  
 The—Lady—of—Shalott.”

これはたそ云々とは市人等が船をみつけたる時の言葉ならんを突然借り來たりて地の文(作者が語)とまじへつらねたる面白し但しかゝる筆つきは彼なたの詩文には常に見る所也。どもしびのがいやける館とは案ずるにアーサルの王宮、あて人等が夜遊とは舞踏會などにや。cheerとは正當にいへば宴樂といふ意なり又 royal も王宮のと訓ずるかた原義に適へり。忌はしき妖婦の死骸が流れ寄りたりときいて人々皆悚然とおそれおのき今までさんざめきたりし歌吹海も忽然として

聲を歛め四下閃として人籍の頼に死に果てたる索然たる趣いとよく died といふ一語に見えたり。人々おちて十字を切りぬとは魔を攘ふまじなひのたぐひ也十字を我が指もて我が躰に書する真似する也九字を切るたぐひと知るべし。十字は例の十字架に因める也。妖姫をおそれて猛きものゝふだにものいみをするは上代の手ぶり也譬へば維新前の國俗が牛を食ふときいて外國人を忌み嫌ひしと同理なり我が身の穢れんを怖るゝなり。あはれむべしシャロットの姫は勢ひかくの如くなればしかばねとなりてだに蛇蝎の如く忌まれ誰れひとり葬りえさせんといふものもなし。全くうつゝ世どかけはなれたる生活せし報しるけく天地廣しと雖も唯ひとり知己もなく同感の友もなし。只管美の爲にのみ美を愛して些も人生の利害を考へざる美術家の到底かゝる業果をまぬがれざる由はテニソンが常に信念せりし所にや Palace of Art 『美術殿』のうちにも同じ筋の思想見えたり。さはれまごゝろの力ばかり偉なるはなし妖姫が身を棄ててもランスロットを慕ひし赤きこゝろは流石にかなたにも通じぬとおぼしくランスロットが退席の一言は妖姫をして地下に瞑せしむるに足る。此の靈妙不思議の感應は眞個不

可言不可説の妙境也個人と個人との上にもいふべく詩歌美術の上にもいふべし。蓋し無上無等々の神呪は至誠也至誠の前には魔障なく至誠の前には距離なし至誠は直に其の的を貫く正に是れ説明をも媒介をも要せざる以心傳心の境なり。

船たび

The Voyage.

「船たびは明にテニソンの處世上の觀念を歌へるものなり。テニソンの思へらく人生は理想の追求に外ならず」と。具にいへば人は缺陷の現世に満足する能はずして常に理想的境涯を想像し件の極致的生活を實現せんと欲し無限無窮に精進するものなりすなはち謙々として曾て知足する所無しかゝる精進の氣根のわればこそ人間の世界は漸進漸化して幾段づゝか改善の實を擧ぐるを得るなれ若し此の心なかりせば人生はやがて沈澱腐敗し退轉墮落するの外なかるべし。無限精進は人間必須の要訣隨うて人間の歴史はとこしなへに理想を追求する無終的

旅行の記録なり猶地球周遊の船が其の航路の極まるを知らざるが如しと。くはしくは下の節々に釋する所によりて會得すべし。

We left behind the painted buoy

That tosses at the harbour-mouth;

And madly danced our hearts with joy,

As fast we heeled to the south:

How fresh was every sight and sound

On open main or winding shore!

We knew the merry world was round

And we might sail for evermore.

buoyは船につけたる浮標なり通常目になつやう彩色せるものなり。南をさしては眞意の方面よりいへば理想の在る所を指すすなはち光明赫耀たる方角なり。樂天の觀念を抱いて世の海にいづれば聞睹一として樂しからざるはなし。此樂

しき世界云々の二句は作者が樂天的觀念を簡説せるもの、以爲へらく人間の進化は無限無窮なるべし喩へば地球の圓形なるがゆゑに之れを周航するにあたりて些の限界もなきが如く人智の發達には限なくして人の努力には限あるがゆゑに所謂理想の本體は到底捕捉して實現するに由なく隨うて如何に勇猛に精進するも眞の理想其の物を捕へ之れを實現し得るの期は望むべからず、理想を捉らへ得たりと思ふはおしなべてその影又はまぼろしを捉らへ得たるにて眞の理想は常に毎に幾段か彼なたにたいよへるものなり。蓋し從來理想たりしものも一たび捉らへ得て現實とすればたちまち醜き若干の缺陷を現じ再び人をして第二の理想を追求せしむるに至る。かるがゆゑに理想追求を本願とせる人生の航海は所詮極する期を知らざるべしと也。

其の二

暖風きた、くを拂つて吹かすなり  
Warm broke the breeze against the brow,  
船首なる美人の頭は  
Dry sang the tackle sang, the sail:  
The Lady's head upon the prow

吹かすは、くを拂つて吹かすなり  
Caught the shrill salt and sheer'd the gale.  
大海の浪は船體を叩いて船首を高く  
The brood sea swell'd to meet the keel,  
船首の影を高く、船首の影を高く  
And swept behind; so quick the run,  
船首の影を高く、船首の影を高く  
We felt the good ship shake and reel  
船首の影を高く、船首の影を高く  
We seem'd to sail into the Sun!

Dry sang &c. の dry は、くを拂つて吹かすなり。船首なる美人の頭とは我が龍頭、船首などいへるに同じく船首に美女の半身像を彫り添へたるをいふ、多くは希臘古代の女神の像なり。「大海の浪は云々」とは高浪の船を迎へて膨張しやがて船の過ぐるに共に船體を拂うて船のかたへ疾走し去るをいふ。此のあたり原詞はすべて過去動詞もて物したれど翻はわざと現在時法を用ひたり。「朝日のただなかに云々」とは船を東方へ進むること急なるをいへるなり矢を射る如く旭日の昇れるかたへ行くを形容していへるなり。第一節にては船南に向ひ今はまた東に向ふこは人生旅行の變轉常なきを諷示せるなり。之れを一個人の上に喩へばはじめて社會(世の海)に出でたる時の姿なり。年少く氣鋭にして前途の望海の如しまた

樂しきことあるを知りて悲しきことあるを知らず一意我がゆかむと思ふ方に向つて直行せんとすれどすべて詩歌はたとへ寓意を主とせる作とてもあながちに寓意に泥むべからず此の作の如きはもとより隱微あるが爲に妙なりと雖も其の隱微の寓意を離れて單に航海行として翫味するも尙且美なる故に更に妙なり。以下の諸節皆然り讀者宜しくまづ尋常の航海として其の情姿を味ひさて後に寓意の妙に及ぶべきなり。

其の三  
III

How oft we saw the Sun retire,

And burn the threshold of the night,

Fall from his Ocean-lane of fire,

And sleep beneath his pillar'd light!

How oft the purple-skirted robe

Of twilight slowly downward drawn,

As thro' the slumber of the globe

Again we dash'd into the dawn!

此の一節最も訓じにくし我が國ぶりと痛く異なる比喩多ければなり。まづ太陽の次第々に西海に退きて終に水平線底に没し去るさまを形容せる詞など殆ど國文には譯しがたし。夜の戸口とは將に暮れんとする西の空といはん程の義、而して海原の火路とは夕陽の反射して火の燃ゆるが如く見ゆる西の海をいへるにて假に之れを太陽の通過する街路に喩へたり。柱なす殘光の底云々とは已に水平線下に没し去れる日の光の譬へば火柱あまた打立てたらんやうに天に向つて直射ししばらく殘照を留めたるをいふ。映る日とは太陽の西するをば人の寢室に退き褥に就くに喩へたるなり。黄昏の着るむらさき裾の服とは日の入り果てゝあたりのやうく昏うなりゆくさまを天邊より紫色の裾つけたる長上被の垂下せらるゝやうなりと見たてさて之れを薄暮が着る服の如く言ひなしたる所此の作者の妙想なり。全地球の眠れるもなかとは猶夜といはんがごとし。志のゝめの空に云々とは再び東方をさしてまっしぐらに船を進めたりし時といふ意。

此の一節の大意は幾たびも日の沈むを見幾たびも日の暮るゝを見尙まばらくも退轉せずして常に東方へこゝろをさし晝夜休まずして精進せりとの意なり。

其の四

New stars all night above the brim

Of waters lighten'd into view;

They climb'd—as quickly, for—the rim

Changed every moment as we flew.

Far ran the naked moon across

The houseless ocean's heaving field,

Or—flying—shone, the—silver—boss

Of her own halo's dusky shield;

こゝは船の進行するにつれて四圍の現象の變はり行くさまを寫したり。星なども今まで航行せりし半球上にては見も慣れざりしがかゝりやき剩へ見るが中にそれ等の星影は天に中して空の様も海の姿も毎瞬間にかはりゆくとなり。「水の端

とは水と天と接するあたりをいふ。「むきだしの玉兔」とは周邊に雲なく澄みわたりたる月なり。houselessとは荒れたる原の落漠たるさまに喩へていふ、くはしくは些の蔽ふものもなく只ひとへに茫々たる海原といはん程の意。若しは飛びつゝも云々とは澄みわたりたる月の間に其のまはりに暈をいただき船の疾行するにつきてさながら中空を飛び走るやうに見ゆる、喩へば中古武士の携へし圓形の楯の黒色なるに銀の凸飾を施せるが日に映じて輝けるが如しといふ意。中古の楯は概して圓形若しは楕圓形なり而して其の中央には凸出せる圓飾がねを加ふるを例とせり、爰には其の凸飾を月に見たて楯の地を暈に見たてたり。最後の一句は直訓しかねたれば意を取りて義譯せり。

其の五

The peaky islet shifted shapes,

High towns on hills were dimly seen,

We past long lines of northern capes

And dewy Northern meadows green.

(いづれに)海を波路に入りて  
We came to warmer waves, and deep

東の海を渡る船は走り渡りて  
Across the boundless east we drove,

波の起つる長き波の breaker sweep  
Where those long swells of breaker sweep

ニシメツの生たる岩根と丁子木とを島を根を等と(東の海を)  
The nutmeg rocks and isles of clove.

船やうやく進みて北洋に入る季候と風色と見るく變化す。峰多くある小島の船の位置と共に姿をあらたむる見るやうなり。「岡のべの高き里」のおぼろげに見らるゝは船やゝ浪に近ければなるべし。「高き里」といへる岡の上にある里なれば也。さて北方の海岸に添うて次第々々に進航し船は已に温帯海に入りぬ、肉豆蔻を産する島及び丁子の産する島はいづれも東洋の島々なり。例へばモラツカ群島の如きフィリッピン群島の如き是れなり。deep「遠く」又は「はるか」の意。

其の六

火の燃ゆる峯々の影を  
By-peaks—that-flamed, or, all—in—shade,

灰の雨のふちりて一層の波のゆるゆると海を揺る揺る(峯々の影を)  
Gloom'd the low coast and quivering brine

その灰の雨に濡らぬ山に  
With ashy rains, that spending made

Fantastic plume or sable pine;  
(峯々の影を)影を燃ゆる(峯々の影を)影を燃ゆる

By sands and steaming flats, and floods  
また(峯々の影を)口を海を流るる(峯々の影を)口を海を流るる

Of mighty mouth, we scudded fast,  
紅花咲きまじる森の山に

And hills and scarlet-mingled woods  
山に紅花咲きまじる森の山に

Glow'd—for a—moment as—we—past.  
我の船の飛ぶ(峯々の影を)我の船の飛ぶ(峯々の影を)

此の一節はむねと南洋の風景を叙したり。「火の燃ゆる峯々」とは噴火山也。「打曇りて灰の雨ふらせ云々は噴火山の奇現象なり、灰面の中天に舞ひ廣がりて或は大なる羽根飾の如く見え或は墨繪の松杉の如く見ゆる由は彼なたの航海記に往々詳叙せる所なり。「ふるふ沖」とは灰の雨に撲たれて浪の揺動するさまをいへる也、浪の荒るゝを形容して「鞭もて打たれたる海などいふこと彼なたの詩文には屢々見る例なり。「湯氣たちのぼる平地」とあるも熱帯地方の殊なる現象を描ける也。「紅花咲きまじる森の岸」に添うて船の疾行するはしにちらちらと目に映するさまありげなり。

其の七



O hundred shores of happy clime,

How swiftly stream'd ye by the bark!

At times the whole sea burn'd at times

With wakes of fire we fore the dark;

At times a carven craft would shoot

From havens hid in fairy bowers,

With naked limbs and flowers and fruits,

But we nor paused for fruit nor flowers.

こゝに住まば樂しからんと流石に心も目も率かるゝ浦は幾ばくといふ數を知らずしかるを仇にのみ見すとし船は矢の如く疾行す。最初の二句は流石に未練の残れば後にせし津々浦々を追懐し「汝等」云々と呼びかけたるなり。按ふに理想を追ふものはかりそめにも中道に停まるべきにあらざ現在の幸福は所詮理想上の淨樂に易へがたし。疾行する船は向上無限の淨願を代表し風土めでたき津々浦々は現世間の利福を代表す。さて更に勇を鼓してますます船を進むる程に或

時は燐火海に満ちて浪悉く青白きことあり或は之れを乗切りて走りへに炎々たる船跡を残すこともあり共に南洋に於ける特殊の壯觀なり。また或時は突爾として南海島に棲める裸体の蠻人野花果實等を獨木舟に積み載せて近づき來れる蓋し外國船をみとめて商せんとするなり。其の花美なりと雖も其の果うまげなりと雖も船中の者一人として之れが爲に精進の本願を忘れしものなし一意前進せんとするのみ曾て船を停めしことなし。物えられる獨木舟とは獨木舟の外面を種々に彫刻して飾りたるをいふ。

VIII.

For one fair vision ever fled

Down the waste waters day and night,

And still we followed where she led,

In hope to gain upon her flight.

Her face was evermore unseen,

はるなる海線の上に向ふ  
 And fixt upon the far sea-line;  
 さはれ人音の心そらにうらへ  
 But each man murmur'd 'O my Queen,  
 我がは汝に追隨せむ 我の心そらにうらへ  
 I follow till I make thee mine.'

現在の利福をも棄て、只管に船を進むるは何故ぞといふに他なし我がさしてゆく浪のあなたに輝妍たる一個の神女の髣髴として影を現し船にさきだちて走ればなり。こゝに謂ふ神女の幻影とは何ぞ。朦朧たる理想の影をいふ也。人々は其の心の目に此の美しき幻影を見るが故に片時も現在にのみ執着せん心はなく晝夜休息せずして精進する也、いつかは彼れに追いつきて宿望を達したしと念願すればなり。されど此の理想の影は常に毎におぼろげなるゆゑ未だ一人だに明白には理想の本相を認め得たる者なし、理想の面はとこしなへに未來に向かひとこしなへに前のかたに向かへり。確定不同の本相は哲士も未だ明説する能はず天才も未だ詳狀する能はず。さもあれ衆皆ひそやかに獨語すらくあはれ我が佛、我が本尊、たとへ汝れが本相は明かならずとも我れは汝があとを尾ひゆかむ竟

に汝れを捉らへ得て我が有となさむまでと。すなはち世の海を渡らむ者にして苟くも理想を實現せむことを期せざるものなしといふ意。  
 「海線の上」とは「水平線上」の義、前釋によりて其の義をささるべし。

其の九  
IX.

わい其の影は或時にはたまたまた或時にはやまやま  
 And now we lost her now she gleam'd  
 或時の影は或時にはたまたまた或時にはやまやま  
 Like Fancy made of golden air,  
 或時は影に似てはたまたまた或時は影に似て  
 Now nearer to the prow she seem'd  
 或時は影に似てはたまたまた或時は影に似て  
 Like Virtue firm, like Knowledge fair,  
 或時は影に似てはたまたまた或時は影に似て  
 Like Heavenly Hope she crown'd the sea,  
 或時は影に似てはたまたまた或時は影に似て  
 And now, the bloodless point reversed  
 或時は影に似てはたまたまた或時は影に似て  
 She bore the blade of Liberty.

此の段は理想の變幻無窮なるを説けり。或時は理想全く消盡して人々其の影を

認め得ざることあり或時は其の影燦として金色の光明を放ち人々の心眼に照り輝きえも言はず尊くは拜まがまるれど而も何物とも名状しがたきことあり。或時は又目近く現れ一舉せば實現し得らるべきが如く思はるゝことあり。或時は理想の本體は或哲學者の唱へたるが如く毅然たる圓滿の淑徳に外ならじとも見え又或時は如々たる正智に外ならじとも見ゆ。又或時は無常有漏の浮世の浪間に逆風怒濤を恐るゝ色なく泰然として高々と妙なる姿を現すを見れば所謂理想とは現世に實現すべきものといはんよりは未來世すなはち天上界に對する人間の信仰希望ともいふべく此の苦海を渡る唯一の舟筏なるが如し。又或時は理想の風姿一變し譬へば手に一利劍を提げて立てる一個の女神と見ゆ。此の利劍は圓滿なる眞自由を獲る利劍なり但し其の鋭尖は地の方へ向かひ且其の刃邊には些の血斑だにも無し。按ずるにテニソンは温和なる改進黨を奉じ痛く過激の改革を惡めり故に刃に舐らずして自由を獲るをもて理想とせる也。 Knowledge fair の fair を美しきといふ義に釋したるもありいかによ。按ふに美德の毅然たるものに對して「正智」といはん程の心に用ひたるにはあらぬか、fair には「公正」といふ義

あり偏せず局せざる正智とてこゝには釋しつ。

第十  
X.

And only one among us—him  
 We pleased not—he was seldom pleased:  
 He saw not far: his eyes were dim:  
 But ours he swore were all diseased.  
 'A ship of fools,' he shriek'd in spite,  
 'A ship of fools,' he sneer'd and wept.  
 And overboard one stormy night  
 He cast his body, and on we swept.

凡そ人として理想の貴きを念はざるはあらじと思へど數多き人の中には絶えてかゝる念のなきもあり。同じ船に乗込める者の中に唯ひとり異なる考へを抱きて只管現在にのみ執着せるがありけり。彼れは常に氣むづかしくふさぎがちに

て而持例ならず何人のいふことも彼れが心には叶はぬらしく曾て悦べりし例なし。思ふに彼れは只目前のみを見るなるべし遠方に美しき物の影見ゆるを彼れは打詠むる能はざるなり彼れの視はかすめる也。(こは世間のみ執着せる俗人を指す)。されどみづからは然思はず却りて理想を追ふ我が黨をば惑亂狂妄の愚人と卑しむ嗚呼此の船は痴駱の乗れる船と絶叫して或はさげすみ或は歎じ果はえたへずや打泣けりき。さてかく目前の事にのみ執着せるがゆゑに偶々目前の不幸に遭遇する時は當來を頼として一時を忍耐せんたより無く隨うて苦悶を遣らんに由なし此の世頼まれずと思ひ入りては世を厭ふ念も禁じがたき道理なり。されば或あらしの夜人々の眠れる間に彼れはひそかに抜けいで、遂に船外に身を投じ大海の藻屑となりにき。あはれは限なしと雖も今更に如何ともせんすべなし我々が乗れる船はやがて其のまゝに疾走せり。

其の十一

And never sail of ours was furl'd,

Nor anchor dropt at eve or morn;

We lov'd the glories of the world,

But laws of nature were our scorn

For blasts would rise and rave and cease,

But whence were those that drove the sail

Across the whirlwind's heart of peace,

And to and thro' the counter gale?

現世間に如何なる變あるも理想を追ふ船は停まることなし我が黨は當來に希望を屬すること甚深なればなり。かくいはば人或は言はん汝等は現世を愛せざるか、ひとへに出世間を道なりとせるかど。否、我が黨は現世を度外視する者にあらざ、現世の光榮を認むること、に於ては我々豈人後にちんや現世を愛すること、に於ては我々豈餘人に劣らんや。只謂ふ所俗人は只管現在に執着し自然の進化をのみ是れ法とし天の爲す所は人一毫も之れに加ふるの力無しとなす。彼等の天法を重ずるや人間の進化をひとへに自然作用に一任せんとす彼等は自然法の狂

ぐべからざるを唱へて竟に人間を偶人視する也。我が黨は然らず深く人爲の重  
 ずべきを信ずるが故に理想の追求をもて人間の爲さるべからざる大なる務と  
 なし隨うて彼等が唱ふるが如き制限を卑しむ。何が故に然るか。答へて曰はく  
 現世の事業には障魔多し譬へば暴風の吹起り吹き荒れて船の進行をどいむるが  
 如し吹き起るも偶然吹き歇むも偶然現世の障害は殆ど豫め期すべからざるもの  
 なり。されどかゝる障礙あるに拘らず船の能く行くは何故ぞ。尤も怖ろしき旋  
 風の中心をも横切り逆風にもさかひ逆風をも貫き能く其のさすかたへ向ふは如  
 何。何物が船を驅るぞ。逆風は帆にさかへる也而も船の進むは如何。是れ豈靈  
 妙なる人心の作用に因らざらんや。船を進むる蓋し人間の偉力にあらずや若し  
 偶然と自然とのみに依頼せば嚴密にいへば一段も船を進むるの機無からん。偶  
 然及び自然の障魔は突然として來たり又卒然として去る必しも恐るゝに及ばず、  
 また決して頼むに足らず。

「帆を驅る」(drove the sail)と原詞にあるは「風は帆に逆へるに何物が帆を驅るぞ」の意  
 なり。「されど那邊より來つる云々」は何物に由來せるの義也。「旋風の穩かなる

中心」とは旋風の周邊は近づきがたきほど風浪の荒るゝこと激しきものなれど其  
 の中心は却りて平穩なりといふ意、こは理學家の唱ふる所なり、されど此の中心に  
 入らば恐らく出づること叶ひがたかるべく最も怖ろしき境涯なり。此の段の解  
 釋はマクミラン版の釋をも参照せしが心得がたきふし多ければこゝには専ら予  
 が見る所によりて解を下せり彼の釋は恐らくテニソンの本意とはたがへるなら  
 ん。

其の十一  
XII

又我らより寒風の吹來に來り  
 Again to colder climes we came,  
 我ら仍舊往くは(寒風)の吹來に來り  
 For still we follow'd where she led:  
 今我ら仍舊往くは(船長)の往く處に  
 Now mate is blind and captain lame,  
 又船長は盲なり、船長は跛なり  
 And half the crew are sick or dead,  
 又半分の乗組人は病むる者なり或は死す  
 But, blind or lame or sick or sound,  
 我ら盲なり或は跛なり或は病むる者なり或は健なり  
 We follow that which lies before:

蓋し此の樂<sup>レ</sup>を世界は球の如く知る<sup>ル</sup>也<sup>シ</sup>  
 We know the merry world is round,

知<sup>ル</sup>船<sup>の</sup>果<sup>は</sup>圓<sup>也</sup>  
 And we may sail for evermore.

無限向上の船旅はしてしなく船は再び寒帯の海に入りぬ。巨山の如き氷塊に船幾たびも危く肌を裂く<sup>ハ</sup>の寒風に耳鼻ごとく腐り爛る。遮莫いかなる艱苦に遭ふも我が黨は宿願を絶つ能はず。今や我が黨の木鐸たりし者も多年の艱難に身神共に疲憊し同志はたなかは枯槁せり、され我が黨の素志は奪ふべからず尙も理想の片影を逞ひ百難を排除して精進の勇を鼓す。何となれば無限進歩の確信は依然として抜くべからざればなり。

以上此の一篇にあらはれたる觀念は作者が確信せし所有名なる『イムメモリアム』以後の作には此の觀念常に見えたり。蓋し此の『船たび』はテニソンが觀念と理想を窺ふには頗る便宜なる作なりこゝに之れを評釋せしも早う我が國の讀者に此の作者の片影を知らせんとて也。

前には説き洩ししが此の作の律格は昂起格<sup>アイソヒト</sup>にて四歩を一行とし始終同一の律格也。

(完)

ドラ女物語

上に訓釋せる二篇はテニソンが作のうちにて隱微の寓意に富みひとへに表面のみを讀みては十分の旨味を悟りがたきたぐひなるが下に物する『ドラ女』が物語は素樸淡雅の好小話、その味ひは釋を俟たずして知らるべし妙は理窟の上にあらずして人情の上にあり殊にドラ女の如きは此の作者が得意の人物、温順貞良の權化とも評すべし。ドラといふ名我が國にては聞き苦しけれど彼なたにてはいと可憐なる名とせり、美代、千代などいふ名と同じ程によるこぼるゝ少女の名と知るべし。

此の小話はもとメリー、ロッセル、ミトホオド女といふ女作家の作『我が村』といふ小話集中に見えたるを其の筋の大むねだけを借り來て更に新工風を加へたるものなり。風調のいと美しうして辭<sup>ことば</sup>の簡樸雅馴なるところ尤も翫味すべし。

ドラ  
Dora.

農夫<sup>ファーマー</sup>の<sup>ハット</sup> Allan at the farm abode

英文評釋 テニソン ドラ女物語

William and Dora.  
 And she his niece,  
 And often thought 'I'll make them man and wife.'  
 Now Dora felt her uncle's will in all,  
 And yearn'd towards William; but the youth, because  
 He had been always with her in the house,  
 Thought not of Dora.

「しばし二人をなげうつし、おれ一瞥とも打ながめての意。『叔父が思ふる  
 事』」  
 意也。「同じ家に在りし故に我が同胞のやうに思ひ做して行末妻とすべからざる  
 は思はずなり。」

Then there came a day

When Allan called his son, and said, 'my son:

I married late, but I would wish to see  
 My grandchild on my knees before I die:  
 And I have set my heart upon a match.  
 Now therefore look to Dora; she is well  
 To look to; thrifty too beyond her age.  
 She is my brother's daughter: he and I  
 Had once hard words, and parted, and he died  
 In foreign lands; but for his sake bred  
 His daughter, Dora: take her for your wife;  
 For I have wish'd this marriage, night and day,  
 For many years.  
 'I cannot marry Dora: by my life  
 I will not marry Dora.' Then the old man  
 Was wroth, and doubled up his hands, and said:

「You will not, boy! you dare to answer thus! 敢て答へんや  
 But in my time a father's word was law, 昔も父の言は法なり  
 And so, it shall be now for me. Look to it; 然し今も我の言は法なり  
 Consider, William: take a month to think, 一月を以て思案せよ  
 And let me have an answer to my wish; 然し我の望むを答へよ  
 Or, by the Lord that made me, you shall pack, 主よ、我が造りし主よの口を以て、お前を去らば  
 And never more darken my doors again?」

Look to Dora はほゞ本文に訓じたる意、其の次の Look to は「打ながむる」の意。 brother は兄とも弟ともわきがたけれど物語の筋を案じドラの井リアムより年下なるを思へば弟と訓ずるが妥なるべし。「命かけて」は「誓うて」の義。井リアムが妹愛せりしドラを妻とせよといはれて案外を感じ「滅相な」と思へるまゝをニヒなくいひあらはし端なくも父子の仲たがひを醸せるは、是非も無き行きちがひ也。一方は一圖に思ひ込める老人かたぎ、一方は思ひやり無き少年、かゝる譯もなき行ちがひが元にて浮世の悲劇は演ぜらるゝなり。「兎まれ」云々、bit をかゝる場合に

用ふることに間あり、悉しくは汝の意はとまれかくまれ」の義。「我が若き頃には云々、當今は知らず我が若きころには父の命、法律同然にて背き悖らざるを孝子の本分とせり我れはた其の子に對しては専制君主的權力を有すべき筈なり若し我が命に背かば一日も此の家に住ますまじきぞ汝それ之れを思へ」の意。一度はいたく怒りながらまた言葉を重ねて反省せよと諭すさま親心見えていとめでたし。「速に旅装すべき也」とは「速に此の家を立去るべき也」の意。「我が家の戸口を昏うせざるべきなり」とは「汝の面を見れば我が家爲に昏うなる心地すくはしくいへば、不快の影を生ず」また來たる勿れの義。

But William answer'd madly; bit his lips, 彼は狂おしく答へて唇を噛み  
 And broke away. The more he look'd at her 彼の見るに其の見るに  
 The less he liked her; and his ways were harsh; 彼の好むに其の好むに  
 But Dora bore them meekly. Then before 然しドラは彼を弱く承へた  
 The month was out he left his father's house, 一月の月経し去りて父の家を去り  
 And hired himself to work within the fields; 自ら雇ひて田舎に働くに



And half in love half spite, he woo'd and wed  
 A labourer's daughter, Mary Morrison.

僅々數行のうち尋常作家が幾ヘーラの小説文中に叙状しいだすべき事を簡叙し盡くし而も短慮なる少年の輕擧かたくななる老父の怒温良なる女子が可憐なる面影をも見えたり。「ひらあつた」は父への面おもてをさす。

Then, when the bells were ringing, Allan call'd  
 His niece and said: 'my girl, I love you well;  
 But if you speak with him that was my son,  
 Or change a word with her he calls his wife,  
 My home is none of yours. My will is law.'  
 And Dora promised, being meek. She thought,  
 'It cannot be: my uncle's mind will change!'

「祝ひの鐘婚禮の時教會堂にて鳴らす鐘なり。「あり得べきことかは」とは叔父が井

リアムを怒る心のうつろひもかくてつゝかはんはあり得べきことならずと思へるなり。未段の一句無邪温良なる少女子の口吻を摸しりだして餘蘊なし。

And days went on, and there was born a boy  
 To William; then distresses came on him:  
 And day by day he pass'd his father's gate,  
 Heart-broken, and his father help'd him not.  
 But Dora stored what little she could save,  
 And sent it them by stealth, nor did they know  
 Who sent it; till at last a fever seized  
 On William, and in harvest time he died.

此段すべし釋を要せざるべし。口癖のうつろひは父のうつろひ長かるを味ふべし。

Then Dora went to Mary. Mary sat

And look'd with tears upon her boy, and thought  
 Hard things of Dora. Dora bane and said:

I have obey'd my uncle until now,  
 And I have sinn'd, for it was all thro' me  
 This evil came on William at the first.

But, Mary, for the sake of him that's gone,  
 And for your sake, the woman that he chose,  
 And for this orphan, I am come to you:  
 You know there has not been for these five years

So full a harvest: let me take the boy,  
 And I will set him in my uncle's eye  
 Among the wheat; that when his heart is glad  
 Of the full harvest, he may see the boy,  
 And bless him for the sake of him that's gone.

第五行の端に在る and は「而も」の義に當たる其心して訓サヘシ。 you know かゝる場合に用ひたる現在動詞は國文にては未來又は未定の義となるが通例なるが如し故に「知る」と訓せずして「知りまさん」と訓じたれど若し俗言もて訓ずれば you know の二語は單に「何々をさしやう」といふ時の「させう」に相當す極めて輕き詞なりすなはち「かゝる豊年は近年稀なことでござんせう」に「させう」に「マヤ」に「よ」つて其の子をば云々と訓みつくべきなり。 bless は當の人の爲に「幸福を禱る」といふ義なり親の子を bless するも「さし取りも直さず」深く「さしやう」の義なり curse (呪咀)の反對なり。

And Dora took the child, and went her way  
 Across the wheat, and sat upon a mound  
 That was unsown, where many poppies grew.  
 Far off the farmer came into the field  
 And spied her not; for none of all his men  
 Dare tell Dora waited with the child;  
 And Dora would have risen and gone to him,

But her heart fail'd her; and the reapers reap'd,  
 And the sun fell, and all the land was dark.

「種まかでありし岡の上」は「麥の生」てありぬ岡すなはち遠方よりもよく見らるべきところ也。こゝに彼の孤兒をすわらせて片意地なる叔父の目に觸れしめんとする也。「彼の農翁」は「フラン」をいふ。「罌粟あまた生」りし云々、かゝる淡墨畫の間に此の一點孔作者が點彩の巧なるを味なへし。her heart「勇氣沮落す」といはんほどの義。「ある程に麥刈る男等」云々、こゝの and は「かゝりければ」又は「すなはち」などの義に近し、故に其の次行なるはすべて「やがて」と訓じり。all the land は恰も「四面山」の義也。

But when the morrow came, she rose and took  
 The child once more, and sat upon the mound;  
 And made a little wreath of all the flowers  
 That grew about, and tied it round his hat  
 To make him pleasing in her uncle's eye.

Then when the farmer pass'd into the field  
 He spied her, and he left his men at work,  
 And came and said: 'Where were you yesterday?  
 Whose child is that? What are you doing here?'

Pleasing「自易う、愛らしう」の義。ドラ女が優美なる工風はたちまち此の一段をして一幅の好畫圖と成らしむ白頭の老圃可憐なる淡装の田舎乙女、花鬘をいたける紅顔の稚兒、綠樹黃麥、遠山近水、正に是れ圓山派得意の好田家山水。

So Dora cast her eyes upon the ground,  
 And answer'd softly, 'This is William's child!'  
 'And did I not,' said Allan, 'did I not  
 Forbid you Dora?' Dora said again:  
 'Do with me as you will, but take the child,  
 And bless him for the sake of him that's gone!'  
 And Allan said, 'I see it is a trick.'

Got up betwixt you and the woman there.  
 I must be taught my duty, and by you!  
 You knew my word was law, and yet you dared  
 To slight it. Well—for I will take the boy;  
 But go you hence, and never see me more.

「我れ我がすゝかこゝを去りて白頭翁たる我れちのが爲すべき義務を知らずめらん  
 やは汝等の指圖を受くるよりは奇怪なり」の意。片意地ぢやらの性よく見えたり。  
 well は「ト、どうなづく程の意なり、悉しくらくばそれも宜からん、我が命に背くも  
 よからん、其の小俗は我れ將しゆくべし」の意。

So saying, he took the boy that cried aloud  
 And struggled hard. The wreath of flowers fell  
 At Dora's feet. She bow'd upon her hands,  
 And the boy's cry came to her from the field,  
 More and more distant. She bow'd down her head

Remembering the day when first she came  
 And all the things that had been. She bow'd down  
 And wept in secret; and the reapers reap'd,  
 And the sun fell, and all the land was dark

「手の上を伏す」は我が手の上を親伏せし打遊への意也。此の段の趣致は通讀し  
 して其のてがら明なり。

Then Dora went to Mary's house and stood  
 Upon the threshold. Mary saw the boy  
 Was not with Dora. She broke out in praise  
 To God, that help'd her in her widowhood.

broke out in praise は略々傍訓の物せる義なり、突如として稱讃の言を發せるを  
 540  
 And Dora said, 'My uncle took the boy;  
 But, Mary, let me live and work with you;

彼は言ふ「彼はまた見なす見ない」  
 He says that he will never see me more.  
 彼の母の答へ「わが子、此は決して見なす見ない、  
 Then answer'd Mary, 'This shall never be,  
 我の困難は汝の取手を取らざれば、  
 That thou shouldst take my trouble on thyself:  
 今こそ我の思ふに彼の人の見を以てさす  
 And, now I think, he shall not have the boy,  
 彼の人は我の子に無情な笑ひを其の母をさす、  
 For he will teach him hardness, and to slight  
 彼の母を;  
 His mother; therefore thou and I will go,  
 我の子を我の母を;  
 And I will have my boy, and bring him home;  
 我の子を彼の人の取手にさす  
 And I will beg of him to take thee back:  
 我の子を若し彼の人の御座を取戻す、  
 But if he will not take thee back again,  
 その時、  
 Then thou and I will live within one house,  
 我の子を其の母の取手にさす  
 And work for William's child, until he grows  
 わが子を扶へんを我の子に;  
 Of age to help us.

此の段は殆ど解釋を要せざるべし。田舎乙女の口吻の此れ彼れ共に質樸に寫されたり、そがなかにメリーは稍々世慣れて思慮もありげなるだけにアラランを怨

めしと思ふ心も女心のまはり氣も其のいひまはしにほの見えたり。かゝる無情き人に我が見を養はせば我が見もちのづから情知らずとなりて其の母をも忘るゝに至らん母を母とも思はざるに至らんと行末を思ひやりて其の見を取戻さんといふあたりドラマに對する義理のみにはあらで母親かたぎの自然なるべし。「さることとはゆめ」あるべからず「云々はゆめ」なることあらしむべからず「さふも同義」thisは次の行のthat以下の句の代詞を知るべし。

So the women kiss'd.  
 Each other, and set out, and reach'd the farm.  
 The door was off the latch: they peep'd, and saw  
 The boy set up betwixt his grandsire's knees,  
 Who thrust him in the hollows of his arm,  
 And clapt him on the hands and on the cheeks,  
 Like one that loved him: and the lad stretch'd out  
 And babbled for the golden seal, that hung

英訳註 八八

From Allan's watch, and sparkled by the fire.

「とみれば」と、原詞にては「抱きあげられたる童を見き」とあれば訓は態と語を前後して物せり。「金印」とは懐中時計に添へて鎖もて吊し垂れたる黄金の印形也。かたいちなる翁なれば如何にあそなむをむとくすらんかと心元ながりて往きて見れば思ひの外なる様なり。嬉しげなる見のふるまひ、愛情深げなる翁のあしらひ、ふたりが貌見合はせてまばし立もとほりしさま見るやうなり。

Then they came in: but when the boy beheld  
His mother, he cried out to come to her:  
And Allan set him down, and Mary said:

But といふ語かゝる處にては「流石に」の義となる。今までは祖父と共に氣嫌よく遊びをりし見なれど今ふと母親の影を見つけて流石に得たはずや母のもとへ行かんとして泣きいだせるなり。to come は「往かん」として訓すべし英語にて to come といふは往々我が「往く」往かんの義なり。I will come といふは「予が往くべし」僕参るべし」の義也。

鳴呼 鳴呼  
O Father! if you let me call you so—  
I never came a begging for myself,  
Or William, or this child; but now I come  
For Dora: take her back; she loves you well.  
O Sir, when William died, he died at peace  
With all men; for I asked him, and he said,  
He could not even rue his marrying me—  
I had been a patient wife: but, Sir, he said  
That he was wrong to cross his father thus:  
"God bless him!" he said, "and may he never know  
The troubles I have gone thro'!" Then he turn'd  
His face and pass'd—unhappy that I am!  
But now, Sir, let me have my boy, for you  
Will make him hard, and he will learn to slight

His father's memory; and take Dora back,  
And let all this be as it was before.

「井リアムは逝りし時云々夫井リアムは死に瀕みて天をも怨みず人をも怨みずしてみまかりにき又我れ(メリー)を娶りしために大人の勘氣を受けにしをも悔いず、彼れの曰はく「メリーよ御身は眞實にして能く我れと艱苦を共にせり我れ御身を妻とせしことを悔ゆる能はず」と。メリーが歎歎して亡夫が遺言を語るの状、あづから言外に溢れたり。「此の見竟に亡き父を云々、こは前段に見えたる、彼の人我が子に無情を教へまた其の母をちろそかにすることを教ふべければ」といへると、同じ意よりいでたるなれど、前には母をといひ爰にては亡き父をといふ、作者の用意の精緻なるを玩味すべし。

So Mary said, and Dora hid her face  
By Mary. There was silence in the room;  
And all at once the old man burst in sobs:—

All at once はらとも突爾の義。 burst は前にも見えたりいづとも突然の義を合

む、又我れ知らず物することになり。こゝは堪へかねて我れ知らず泣きいたせるなり。

I have been to blame-to blame. I have killed my son  
I have killed him—but I loved him—my dear son.  
May God forgive me!—I have been to blame.  
Kiss me, my children.

如何に胸を断つ老父が悔恨が僅々數句のうちに見し盡くされたるかを見よ。「はれ彼れをば愛せしぞや」の一句は老翁が肺肝底より沸きいでたるの語、さきに過酷と見られたりし處措は其の實此の慈父が愛子に對する切愛の反動に外ならざりしなり。「喃接吻せよ」と云々、姪をも嫁をも今は我が實の子ぞと頑固なる翁の我も折れ意地も摧けたる一しほに哀れなり。

Then they clung about  
The old man's neck, and kiss'd him many times.  
And all the man was broken with remorse;

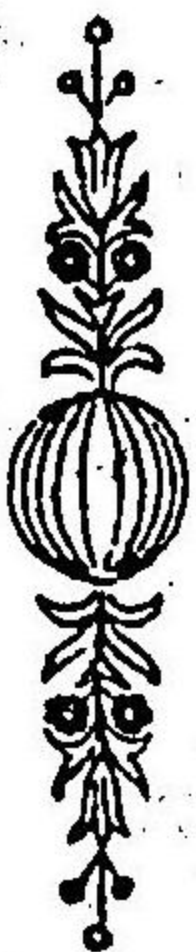
And all his love came back a hundred-fold;  
 And for three hours he sobb'd o'er William's child  
 Thinking of William.

此の段どころへ義訓したれば原詞をよく讀みて會得すべし。

So those four abode  
 Within one house together; and as years  
 Went forward, Mary took another mate;  
 But Dora unmarried till her death.

末一句餘韻媚たり。

(完)



英文

坪内雄藏

ジョセフ・アチソンの散文

英國散文の名家として、今もなほ推重せられ、普く我が國の英語學生にも知らるゝは、エリザベス朝の著述家にては、曾て評釋せしヘーコン、所謂十八世紀の詞客にてはアチソン、ジョソソソ、ス井フトの三名家なるべし。就中アチソンは、其の爲人も温厚にして、其の文はた雅馴、喩へば彼の徳川期に行はれし雅俗折衷の文章に似て、平易通俗ながら些も卑野に流れざる所、尤も愛すべし。更によろこぶべきは其の思想の穩健にして、偏僻の弊なきことなり。最も諷諧の文に長ぜり、面白くをかしく世を諷して、悠々追らざるうちに、ものづから興味啓蒙の力ある、眞にアチソンが特詣なり。

ジョセフ・アチソンは、一千六百七十二年に生まれ、同七百十九年に逝りぬ、今よりは殆ど三百年ばかり前の人なり。幼きころはチャーターナルハウスといふ學舎にて修學せしが、後にオクスフォード大學に入りて業を卒へ、さて後幾ばくもなくして、時の



國王の爲に頌徳の詩を作りて獻りし功にて、一年三百ポンドの年俸を給はり、剩へ歐洲大陸漫遊の費をも賜與せられき。アチソンが閑雅なる天性と優美なる文才とは、當時歐洲第一の文華の國たりし、佛蘭西、伊太利を歴遊せしが爲に、いよく圓美の致を極めき。彼れは恭謙寡黙、何事につけても他と争ふことを好まざりし人なり。政治上の意見は自由改進黨の主義なりしが、反對の黨人をも口ぎたなく攻撃せしことは絶えてなきゆゑ、如何なる黨派にも惡まれずして、改進黨大敗の秋にも衆議員の議員に再選せられ、該黨全盛のころとなりては、累進して内務尙書の高官までも經登りぬ。こはもとより節を二三にせしが爲にあらざ、其の自然の愛敬と温雅なる天性との然らしめし所なりき。

アチソンは博學多才なりしと同時に、廣く人情世態に通じ、俗に謂ふ通人の高雅なるものに似たり。我が化政度の作者中に似たるを求むれば、人柄もどことなく柳亭種彦の面影ありて、文もまた時としては幾分か似たる所あり、但し種彦の文章は概して遊戯三昧の趣あれども、アチソンの本願は俗を誨へ蒙を啓くにありて、その諷刺の鹽梅は故成島柳北翁が『朝野』の雜録に似て更に幾段か巧妙なるものなり。

其の著述は種々あれども、尤も世にもてはやさるゝは『スペクテーター』『觀察者』といふ定期刊行物なり。こは彼れが其の友スチールと共に發行せし、鈴木田時代の『讀賣新聞』より雜報をぬき去れるやうの刊行物にて、英國通俗雜誌の開祖とも稱すべきものなり。毎朝の發兌にて六百三十五號まで續きたり。専ら誠世諷俗の文章を掲録せるものにて、主筆の本意は英國の領外に非徳と蒙と味を驅逐せん爲に外ならざりしなり。該誌に載せたるアチソンが文章は種々雜多にて、堂々たる長論文もあればをかしき滑稽の諷刺文もあり、考證に類する文章もあれば、端物小説に似たる物語もあり。輕妙なる寓意譚もあれば、洒々落々たる論文もあり。假に種々の人物をつくりて眞に實在せる人の如くに狀寫し、殆ど寫眞小説を讀むが如く思はしむる文もあれば、嚴肅なる倫理を談じてそらるに讀者をして襟を正さしむるの文もあり。まことに千變萬化の筆、前後に其の比類稀なりとす。而も要するに其の旨は皆修身齊家の訓、陋野を懲治し、高雅を扶掖し、肉慾をいやしみ道義を奨勵するの意にいでざるはなし。まかれどもアチソンの意見は曾て實際と離ることなし、すなはち世間的道義論にして、哲學としては、高遠ならざること勿論な

り。されば其の宗教思想の如きも、今日の目をもて見れば、毎に幾分の俗臭を帯べり。彼れは屢々未來を説くも、決して現世間の禍福を忘れず、否、むしろ未來世の幸福を餌として現世間の善行を釣りいださんと力むるものゝ如し。彼れはいへらく、現世にての人々の務は、知るにあらで、行ふにありと、其の實踐躬行を旨とせる儒學と一なり。論者動もすれば之れを失として、アヂソンが想の高からざるを譏れども、雜誌記者としては蓋し止むを得ざる所なりしならん。

アヂソンは其の存生中には詩人として名高く、劇の作家としても知られたりしが、今日の標準より見れば、此等の作には殆ど稱すべきほどのものなし。所詮彼れは散文の名家にして眞の詩人にはあらず。吾人のアヂソンに於て最も服する所は、其の觀察の精細なること、其の頓智滑稽の上品にして自在なること、其の思想の穩當公平なること、其の措辭の巧妙なることのみ、而して其の觀察は彼のベリコンの如く抽象的にもあらず、はた其の文章もベリコンの如く高雅に失することなく、平易通俗にして靈妙なる所、實にアヂソンが文章の特質にしてまた十八世紀文學の特質也。

アヂソンが『スペクテートル』に掲げたる論文、諷刺文、比喩談、戯文等は、とり／＼にかしからぬはなきが中にも、とりわけて其の頃の浮靡遊惰なる風俗の見えてをかしきは、つき／＼に譯する二篇なるべし。其の一は「伊達男が頭腦の解剖」と題し、其の二は「男殺し(娼婦)が心臓の解剖」と題せり、共に遊惰淫逸なる當時の社會を諷刺せるものなれど、筆つきの高雅にして婉曲なるは、此の作者の特得にて、他人の企て及ばざる所なり。但しアヂソンの滑稽は我が一九三馬などのとはいたく趣を異にして、専ら含蓄を以て勝るものなれば、深く咀嚼せざれば旨味をさとりがたし。文體は頗る平淡なる雅俗折衷文にして、語法文格なども正しきものなり、勿論下の譯はそのかたかけをも現するに足らずと知るべし。

伊達男の頭腦の解剖  
Dissection of a Beau's Head.

伊達男とは、伊達を專とする男の謂にて、俗に謂ふキドリヤなり、鮎治郎なり、京傳の洒落本などに見ゆる遊治郎に似たるものなれど、彼れは中流(町家)のキドリヤ、これは紳士社會の鮎治郎なり。我が國の例もていは、緋縮緬の襦袢など被るやからなり。

I was yesterday engaged in an assembly of virtuosos, where one of them produced many curious observations which he had lately made in the anatomy of a human body. Another of the company communicated to us several wonderful discoveries, which he had also made on the same subject, by the help of very fine glasses. This gave birth to a great variety of uncommon remarks, and furnished discourse for the remaining part of the day.

右の一節をほゞ語を透うて譯すれば左の如し

ちのれ昨日好事家連の一會（オキケイカス）に参したりき、その折列席者の一人が、近ごろ解剖せし人體に關して、あまたの奇しき觀察を語りいでき。他のひとりもまた、同じ件につきていみじき顯微鏡の助けにてもものせし、種々の不思議なる發見を報じぬ。此の話種々の珍らしき批評を生じて其の日の殘分の話柄となり（キ）。

まぢめだちて言ひいでたる口吻、さながら老鍊なる落語家の序説（オキセ）を聽くらん如し。はじめより笑謔するは所謂前座の駄洒落（ダシヤレ）なり、アヂソンの滑稽は眞面目の裏のをかしみにて、さも言はぬ妙味なり。原文を細嚼して如何に言々の温厚篤實なる一

紳士の微笑しつゝ低語する面影を映出せるかを見よ。

The different opinions which were started on this occasion presented to my imagination so many new ideas, that by mixing with those which were already there, they employed my fancy all the last night, and composed a very wild, extravagant dream.

その折呈出せられしいろ／＼の説は、予が想像（オキゾウ）にあまたの新しき想念（オキゲン）を現じたり、かくてその新しき想念は兼ねて胸にありし他の想念と打混じて、昨夜はよもすがら予が空想（オキゾウ）を使役し、い／＼荒唐なる夢を醸（カ）しき。

「想像にあまたの新しき想念を現す」といふこと、國文としては意味通じがたかるべし。具しくは「予が想像力を刺戟して許多の新しき空想を醸（カ）し、いだしき」といはんほどの義也。こゝの「想像（オキゾウ）」といふ語も、末段の「空想（オキゾウ）」といふ語も、國文にてはちしなへて「こゝろ」と譯して可なるべし、共に心の作用（オキゾウ）をいふなり、詳しくは「想像を司る心のはたらき」「空想を司る心のはたらき」といふことにて二者同義也。

和漢の寓意談にもかなたのにもまづはじめは現（オキ）の事らしく物して、最後に「愕然と驚き覺むれば南柯の一夢なりき」とやうに巧を弄せる例さはにあれど、そはなかな

かにかをふりてめかしからず、初めよりむきだして皮を断れる筆のあらもやとな  
びたり。

I was invited, methought, to the dissection of a bean's head and of a coquette's heart,  
which were both of them laid on a table before us. An imaginary operator opened the  
first with a great deal of nicety, which, upon a cursory and superficial view, appeared like the  
head of another man; but upon applying our glasses to it, we made a very odd discovery,  
namely, that what we looked upon as brains, were not such in reality, but an heap of  
strange materials wound up in that shape and texture, and packed together with wonderful  
art in the several cavities of the skull. For, as Homer tells us, that the blood of the gods  
is not real blood, but only something like it; so we found that the brain of a bean is not  
a real brain, but only something like it.

予は思ひけらく、予は飽治郎（飽治郎）の頭脳と娼婦（娼婦）の心臓との解剖の席に招かれたり  
しに件の品はふたつながら前なる卓の上に置かれたりきと。さて予が空想  
の生みいだせる手術家（手術家）外科醫（外科醫）は許多の精鍊なる技倆（技倆）もて、まづ前者（飽治郎の頭

截開せり、そはふと打見たる所にては、餘の人の頭脳とおなじげに見えたりし  
が顕微鏡を適用するに及びていと奇妙なる発見をなしぬ。即ち腦髓と見た  
りしは實（実）はさるものにはあらで、奇なる一つかねの品を、彼の物の形に編みあ  
はせ捲きつけて、顱骨の種々の凹處（凹處）に驚くべく巧みにも詰めこめるなりけり。  
蓋し希の詩人ホーマルが神祇（神祇）の血汐はまことの血にはあらず、幾分かそれに  
似たる物ぞといへる如く、飽治郎（飽治郎）の頭脳も、まことの頭脳にはあらず、只幾分か  
それに似たる物とぞ知られし。

生理上の試験法たる解剖を心性の上に借り來たれる着想、眞個人意の表にいでた  
り。尤も妙なるはあくまでも謹厚げなる作家の筆つきなり、事柄いよ／＼をかし  
うして語る人はいよ／＼まぢめなり。つぎ／＼を讀み味ひてアチソンが筆の妙  
を知るべし。

希の詩人ホーマルは、古今屈指の大詩人、『イリアム物語』といへるを著して、其のうち  
に神祇相闘ふことを記せり。希臘の古神祇は、尋常の人とおなじく、傷して、血汐を  
流すことあり、されど其の血はアイコルといふものにて人間の血とは別なりとい

ふこと彼の物語のうちに見えたり。かゝる滑稽の諷刺文の中にかめしう古典を引用し、尤もらしう粧する作者のつらつきをかしからせず。

The pineal gland, which many of our modern philosophers suppose to be the seat of the soul, smelt very strong of a kind of horny substance, cut into a thousand little faces or mirrors, which were imperceptible to the naked eye; insomuch, that the soul, if there had been any here, must have been always taken up in contemplating her own beauties.

我が近世の理學者等の多數が、魂の在所と假定せる松子腺は、香水と橙花水との爲にいと鋭くにほひ、且肉眼には見えざりし無數のさゝやかなる面即ち鏡面だつものに刻まれたる角やうの物質もて圍まれたり、されば魂は若し此に宿れりしこともあらば、必や常にものが美しさをのみ、打詠むることに耽りたりしならん。

「理學者」の原語 philosophers 今は「哲學者」と訓ずるが常なれど、昔は醫學者、天文學者などやうの窮理學者をも「イロソフ」ルといへりき、本文の場合の如き是れなり。「松子腺」とは、脊椎動物の頭腦中にある腺形の物なり、松子に似たるゆゑ、かくは譯せり。

人間の靈魂は此の物の裡に住せりといふ説、十八世紀のところ行はれたり。「橙花水」も香水の一種。insomuch は次の that といふ字と合譯して「されば」又は「さるからに」と訓ずべし、場合によりては云々なる程に「云々」と思はるゝばかりに「など」次の句より訓み戻りてもよし。any の次に soul といふ字はぶかれたりと思ふべし。taken 是は「心を奪はる」又は「耽る」の意。beauties と複数に物せるは、美しき目、美しき鼻、眉、口元など種々に見らるゝゆゑ也。contemplate は「眼、想」なども譯す、つくゝと打詠むる意なり。

此の一段落の可笑味は結句にあり、我れぼめの男女を嘲りて、山鳥のちろの鏡を引合にするはめづらしからねど、真面目なる學説を小楯に取りて、自惚子の鴈をさぐりたるは面白し。魂の在所といへる松子腺が「鏡だつもの」もて圍まれたりとは、自惚子の平生を諷刺し得て痛切なり。總じてアヂソンの滑稽は、俗に謂ふ「考へ落」なり、讀者須からく熟考して、其の諷刺の妙を覺るべし。

We observed a large antrum or cavity in the sinciput, that was filled with ribbons, lace, and embroidery, wrought together in a most curious piece of network, the parts of which

were likewise imperceptible to the naked eye.

(さて)前頭部なる一大腔、即ち凹める處を觀察せしに、そはいと珍奇なる一種の網細工風に編みあはせたる飾紐、笹縁、刺繡などをもて充たされたり、是れはたその細部は肉眼には見えがたかりき。

めくまでも眞地目なる解剖學者の口吻をまねびて、シンシバット(前頭部)アントラム(腔)など仔細らしく言ひ做したるところをかしみ也。飾紐、笹縁のたぐひは虚飾品也、我が國の例もていはば、羽織の裏地に數奇を盡くし、帯又は羽織の紐などに伊達を街ひ、華奢風流に浮身をやつたぐひ也。「ニヤケ男の頭腦中には必定かゝる品のみ充滿せらるゝならん、彼れが一念は晝夜かゝる虚飾にのみ傾ければなり」といふ意を、尤も婉曲にいひあらはせるなり。其の細部は肉眼には見えがたかりきとわざと餘韻を残して逃げたる書きぶり、いと巧み也。

Another of these antrums or cavities was stuffed with invisible billet-doux, love-letters, pricked dances, and other trumpery of the same nature.

他の一腔、即ち凹みも、同じく肉眼には見分けがたき飽書、玉章、舞蹈會の紙牌と

ては同じたぐひの浮きたる品々 (trumpery) もて塞がりたり。

billet-doux は佛蘭西語、次の「玉章」と同様に専ら戀の書簡を指す、常は二者同義也、こゝにてはやゝ簡短なる端書やうの飽書を billet-doux と名けたるにや。「舞蹈會の紙牌」とは舞蹈會の番組をまゐせる紙牌なり、總べて彼なたの舞蹈は、男女ふたりづゝ打連れて踊るなれば、開會に先だちてあらかじめ組合を定むる例なり。pricked とは我れど組合ふべき女の定まりし時に、其の紙牌の番組に、針もて印を附くるをいふ。必竟踊は人前をつくらふ道具にて、まことは此れを傳手に、みだりがはしき縁邊を求むるなり。アチソンの意は、如何にニヤケ男の腦中のきたなくあさましく、色情又は浮氣又は虚飾などいふ念の外に、無一物なるを示すにあり。

In another we found a kind of powder, which set the whole company a sneezing, and by the scent discovered itself to be right Spanish.

(又)他の凹みには粉劑やうのものありて、ちほえず一同をして嚏せさせき、かくて其の芬にて、そは醇西班牙なりと知られたりき。

此の段尤も妙なり、一同がちほえずたごろぞて嚏せる貌持見るやうなり。「醇西班牙

牙<sup>カ</sup>とは、其のころの洒落者半可通などの賞翫せし煙草の一種にて、喫煙草と稱するもの也。西班牙産を本場物と稱して珍重せり、鼻先にあてゝ嗅ぐまでの費澤品にて、香のいと高きものとぞ。「醇」とはまがひにあらずとの意。ニヤク男などは兎もすればかゝる品を懐中して林々たる異臭を放ち、傍人の迷惑を思はぬもの也。

The several other cells were stored with commodities of the same kind, of which it would be tedious to give the reader an exact inventory.

他の種々の凹處にも、同じ様の品あまたありしが、その精細なる目錄をば、讀者に擧示せんは管々しかるべし。

There was a large cavity on each side of the head which I must not omit. 頭の左右に、大なる一凹處ありき、こは(かすかた)洩らすまじきものなり。

That on the right side was filled with fictions, fatteries, and falsehoods, vows, promises, and protestations; that on the left with oaths and imprecations.

右の方なるは、虚構、追従、詐偽、誓言、約束、分疏などをもち、又左なるは、起請と呪咀とをもちて、充たされたりき。

遊治郎の腦中には、卑劣なる情慾の外は、宿れるものなし、常に婦女をあざむきて我がものとし、ほしいまゝに弄ばんと思ふ心のみが盛なる故に、上に擧げたるやうの物のみ頭腦の凹處に充滿せりとなり。「虚構」以下の文、平々淡々として簡潔なりと雖も、苟も人情に通じたらん讀者は、此の簡短なる乾文字の中に、痴男痴女が相戯るゝさま、相罵るさま、相狎るゝさま、相あざむくさまなど、總じては浮靡狎褻なる當時の社會の髣髴として浮動せるを見るべし。

There issued out a duct from each of these cells, which ran into the root of the tongue, where both joined together, and passed forward in one common duct to the tip of it.

(さて)件の穴の雙方より、一筋の管さしいで、舌の根がたに達き、そこにて相合して同一道の管となり、さて舌の尖に達したりき。

解剖の順序のいとく精細なるを見るべし。三馬等の諷刺は鳥羽繪の如く、アヂソンの諷刺は油繪の如し。此の段は腦裡の虚構、追従等が、單に腦裡に存せしのみにあらず、常に口に傳はりし由を諷示せるなり。

We discovered several little roads or canals running from the ear into the brain, and took

particular care to trace them out through their several passages.

(又)耳よりして脳髓に流れ入れる種々の小き路、即ち溝くぼみの如きもの(を)を發見せしかば、其のさまじく(の)の通路を尾しなひて、その行くへを探らんと欲し、特別に意こころを注ぎぬ。

One of them extended itself to a bundle of sonnets and little musical instrument.

其の一は一束ひとつかの小歌集と、さしやかなる樂器とに達したり。

遊治郎の耳に聞き腦にとりめたる事は、如何なる事どもならんと、一きは留意して解剖すれば、耳より腦に入れる溝くぼみの奥に、一束ひとつかの小歌集、浪花ぶし、どしどしはうた、どちりさん(と)、さしやかなる樂器(三味線尺八又は月琴)などを發見せりとなり。尤も聞くばかりにはあらず、小歌を作り樂器を弄しなどして、徒らに遊び暮せるをも諷したり。

Others ended in several bladder, which were filled with wind or froth.

(さて)他の諸溝は風と泡とをもて充ちたる種々の膀胱に至りてどしどし(を)ありぬ。他の諸溝の奥には、風(の)の如き何の益もなき談話(泡)の如き何の意味もなき謔語(あり)ありしのみ。

But the large canal entered into a great cavity of the skull, from whence there went another canal into the tongue.

さもあれ其の中の大なる溝くぼみは、頭顱骨の一大凹處中に流れ入り、(さて)こそよりまた一溝發はせ、舌の中に流れ入れり。

This great cavity was filled with a kind of spongy substance, which the French anatomists call *galimatias*; and the English, nonsense.

此の大なる凹處は、海綿やうの物質もて充たされたり、これを佛蘭西の解剖學者等は「ガリメーシヤ」と名け、英國の學者等は謔言たはざなといふなり。

遊治郎が腦より發して其の舌に出づるものは、一つとして取るに足る價值なし、其の言ふこと彌々多うして其の價值彌々少なし、すなはち悉く謔言のみ、ムダゴトのみといふ意。

むねくしく佛蘭西語を取りいだし來てさも科語カクゴらしく見せかけたる、尤もをかし。ガリメーシヤとは、英語 nonsense と同義、ムチヤクチヤ「メチヤメチヤ」無意義「又



は、たはごとの義也。海綿やうの物質云々とは、海綿は能く水を吸ひこむ物ゆゑ、遊治郎の頭腦のクダラキヲを際限もく肥臆するに長ぜざるを、海綿の水を含蓄せるに喩へたる也。

The skins of the forehead were extremely tough and thick, and what very much surprised us, had not in them any single blood-vessel that we were able to discover either with or without our glasses;

前額の皮は甚しく剛うして厚かりき、さていなく驚かれしは、件の皮膚のうち、唯一の血管をだに發見する能はざりしことなり、顕微鏡を用ふるも、將用ひ

from whence we concluded, that the party, when alive, must have been entirely deprived of the faculty of blushing.

ざるによりて一同断じけらく、必定此の者は、其の世に在りし間、全く顔を赧うするの作用を欠きたりしならん也。

半可通が鐵面皮を罵り得て餘蘊なしといふべし。partyといふ語、かゝる場合に

は、此の聲など譯しても可也、但し必しも、複數の義に解するの要なし、彼の法庭語にて被告原告をpartyと稱すると同用法なればなり。

The os cribriforme was exceedingly stuffed, and in some places damaged with snuff.

篩狀骨は甚しく填塞せられ、且處々粉煙艸の爲にてそこなはれたり。

篩狀骨とは嗅神經の纖維が通過せる骨なり。この一句は、半可通が伊達の爲に粉煙艸を用ふるの甚しきを嘲り、彼れの如く、断えず用ひば、竟には嗅神經に損害を及ぼさざるを得ざるべしと笑ひたるなり。其の他香水又は薰物を用ふることの甚しきをも諷せり。

We could not but take notice in particular of that small muscle, which is not often discovered in dissections, and draws the nose upwards, when it expresses the contempt which the owner of it has upon seeing anything he does not like, or hearing anything he does not understand.

さて彼の稀にのみ剖拆中に發見せらるゝ鼻を引き揚ぐる小筋肉につきては、特に意を留めて檢せざるを得ざりき、件の筋肉は其の主(鼻の持主)がその好き

ざる物を見若しくは會得せざることを聽きて、蔑如の意を表する時鼻をうごめかすに用ふる者なり。

此の段、嚴密に語を逐ふて訓すれば解しにくくなる恐れあれば、わざと末句だけは義訓せり。凡そ半可通の氣障なる心術は兎角に鼻の先（きば）にぶらつく物なり。我が國の俗言に「鼻であしらふ」又は「鼻うごめかす」高慢が鼻にぶらつくなどの語あり、思ひあはせて此の段の隱微を味ふべし。could not but は「つても何々せざるを得ざりき」と訓すべし。

I need not tell my learned reader, that this is that muscle which performs the motion so often mentioned by the Latin poets, when they talk of a man's cooking his nose, or playing rhinoceros.

我が博覽の讀者に予は敢て告ぐるを要せじ、此の筋肉は、彼の羅句詩人等が、人の鼻を勃（い）起（か）らすること、即ち「鼻をまねぶ」ことを言へる折に、さしも屢々語れる（鼻の運動（鼻の運動）を成さしむる筋肉なるを。

此の句の可笑味は今日の讀者には傳へがたし、按ふに物味らしく羅句詩人が句中の語を引き來たれる所にあるべし。當時は何事もいにしへを尊崇せし時代とて、取りわけ、詩文などを論評するには、必ず羅句の作を例證とせしこと、猶こなたにて唐宋の作例、又は古今萬葉などの例を引合（ひきあ）に出だすがごとし。「鼻をまねぶ」とは、蔑如嘲侮の意をあらはす爲に鼻をいからすことを、鼻といふ獸が鼻頭をそりかへらするに喩へたるなり。總べて詩人は「失火」といふべきをも「祝融怒る」といひ、「風」といふべきをも「風伯」といひ、兎角に物に比していふがならひなり、「鼻をまねぶ」とは「鼻をうごめかす」といふことに對する慣用譬喩と知るべし。

We did not find anything very remarkable in the eye, saying only that the *musculi anatori*, or, as we may translate it into English, the ogling muscles, were very much worn and decayed with use;

眼には何等の深く注意すべきものをも見いださざりしが、只「秋波筋」即ち英語に譯して「斜視筋（斜視筋）ともいふべき者は、たび／＼用ひたりと見えて痛く磨りへらされ破れ損じたり、

whereas, on the contrary, the elevator, or the muscle which turns the eye towards

heaven, did not appear to have been used at all.

然るに之れに反して、昂起筋、即ち眼を天邊に向かはしむる筋肉は、絶えて用ひられたりとも見えざりき。

半可通が眼は常に美女を斜視するの用にのみ供せられ、曾て敬神崇天の爲に用ひられたることなし。天を仰ぐは敬虔の念深き者に限る、遊治郎等の曾てせざることなり。

We were informed, that the person to whom this head belonged, had passed for a man above five-and-thirty years; during which time he eat and drank like other people, dressed well, talked loud, laughed frequently, and on particular occasions had acquainted himself tolerably at a ball or an assembly;

聞く所によれば、此の頭腦の主は、三十五年間以上、一箇の男と見做されたりきとか、その間餘の人々にひとしく、飲食し、善装し、高聲に談話し、まばく笑ひ、又、格別の折々には、舞踏會もしくは集會などにて、頗る見にくからず振舞ひにきとか、

「一箇の男云々、嘲り得て痛快なり。」飲食し、善装し以下、よく半可通の平生を簡叙し盡くせり。eat といふ語、今は現在動詞としてのみ用ふれど、アヂソンの頃には今の ate にひとしく、過去動詞にも用ひたり。

to which one of the company added, that a certain knot of ladies took him for a wit.

一座中のなにかし、此の話につきて、さる一團の婦人等が、彼れをば才子視してありし由を語れり。

かゝる卑しむべき遊治郎も、或種類の婦人等には、才子とも通客とも思ひなされ、存外に悦ばるゝなり。certain といふ語は、或といはんよりは、確實なり、あるも、あるも國語にては同じなれど、今好譯語を得ざれば、假に「ある」といふ言葉を「ある」といはんよりは、やゝ重き意を見做して用ひつ。took は「信ず」「思ふ」「考ふ」などいふ義に解すべし。

He was cut off in the flower of his age by the blow of a passing-shovel, having been surprised by an eminent citizen as he was tendering some civilities to his wife.

彼れはその男盛りのところに、勘もて毆打せられてみまかりなき、各ある一市人

が妻に或慫慂を施しつゝありし折、突然其の夫なる人に襲はれしに因るとなり。

surprise は「突然襲ひ驚かす」の義。「或慫慂」既破せずして妙なり。Dover は「真盛り」といふ程の義。eminent「卓越」の義、「こゝは名ある」といふは入程の義に解すべし。

He applied himself in the next place to the coquette's heart, which he likewise laid open with great dexterity.

手術家は次に媚婦の心臓に着手し、これをいそ巧みに截開せり。

There occurred to us many particularities in this dissection;

此の剖拆中に許多の殊なる事ども起りぬ。

「殊なる事ども」とは、ほゞ「珍らしき事ども」といはんが如し、「格段なる事」の義也。

but being unwilling to burden my reader's memory too much, I shall reserve this subject for the speculation of another day.

されど、あまり多く讀者の記憶力を困しめんも好ましからぬば、こは他の考案の料に保存し置くべし。

『スペクテーター』に掲げたる原文は、上に訓釋せるよりも、尙二三節がた長きものなれど、管々しく興味無きを、其のまゝ譯し、いざさんも要なからんとて省きつ、原文と併せ看ん人怪しみたまふ勿れ。尤も近年出版に成りし教科書類に見えたる此の文の寫しは、此に譯出せるよりも尙一層省かれたり。

Dissection of a coquette's Heart.

媚婦が心臓の解剖と題したる諷刺文は、上の戯文の掲げられて後一週日を経て、『スペクテーター』の紙上に出でたり。旨意は前のにひとしく、當時の輕薄なる風俗を諷するにあり。媚婦とは我が國の娼婦若しくは自拍子の如く、男の心をどらかし、露ほども賊なうして情深げにもてなすものをいふ、但し娼婦にはあらず。十八世紀のところは更なり、現今の社會にも歐米には媚婦といふもの中流上流に夥多あり。蓋し男女混合の交際盛に行はるゝ社會にては、肉をこそ賣らざれ自家の才藝容色に誇りて年若き紳士等を掌上に弄び、媚を呈し情ありげにもてなし、いざといふ場合となりて俄に之れを打すて、顧ざる浮薄なる女性影からず。彼等の心術は我

が國の藝娼妓などに異なることなし。而して十八世紀の社會は其の最も甚しかりし時にて、當時の交際社會は、一種の高雅なる娼樓ともいふべく、所謂上流中流の貴婦人は、躰のよき白拍子にもたぐへつべし。只其の白拍子と異なる所は、女尊男卑の國柄とて、みづから高く標置し、常に威嚴を保ち、男に媚ぶるにも秋波を第一の武器とし、嬌態を第二の方便とし、自家の品位を下さずして、男性の心を籠絡せしに在り。白拍子の場合には、男は顧客なるが故に主位を占む、彼れに在りては、所謂媚婦は皆貴婦人なるが故に、男子却りて賓位に立てり、此の區別をわきまへて下の文を味はば、アヂソンが諷刺の隱微筆紋を數ふるが如くなるべし。

Having already given an account of the dissection of a bear's head, with the several discoveries made on that occasion, I shall here, according to my promise, enter upon the dissection of a coquette's heart, and communicate to the public such particularities as we observed in that curious piece of anatomy.

伊達男が頭腦解剖の件は、已に其の折發見せし種々の事柄と共に語りければ、こゝには約に従うて、媚婦が心臓の解剖に及び、此の珍らしき一種の解剖術に

於て、吾人が觀得たりし殊なる事どもを報すべし。

to the public とは「世間の」の義、即ち「世人に報すべし」の意也。

Our operator, before he engaged in this visionary dissection, told us, that there was nothing in his art more difficult than to lay open the heart of a coquette, by reason of the many labyrinths and recesses which are to be found in it, and which do not appear in the heart of any other animal.

手術家は、此の假空の剖拆に、着手せし前に、吾々に語りけらく、凡そ解剖術のうちにて、媚婦が心臓を截開するばかりむづかしきことはなし、その故は、曾て他の動物の心臓中には見えざる、許多の迷路やうのもの、隠處めくもの、其の裡に見いださるればなりと。

媚婦が心に定操なく、表裏常なく、殆ど端倪すべからざるを諷せんとして、まづ其の心臓の組織を略説して、彼等が行ふ所の變幻極無きは、其の心臓の組織の、香の圖の如く、八重襪の如く、摸索しがたきに基くと做す、妙想といふべし。visionary 夢裡の解剖なるが故に、いふ「假空」若くは「夢幻」などと譯して可也。

He desired us first of all to observe the *pericardium*, or outward case of the heart, which we did very attentively;

彼れは、第一に心胞すなはち心臓の外被を觀察せよと要めき、すなはち細心して之れをなせり。

and, by the help of our glasses, discerned in it millions of little soars, which seemed to have been occasioned by the points of innumerable darts and arrows, that from time to time had glanced upon the outward coat,

さて吾々は顕微鏡の助けによりて、それが表面に數百萬のいとしやかなる傷痕あるを認めき、この傷は間なく其の外上に閃きし無數の箭投矢などの尖に基けるものなるべし。

though we could not discover the smallest orifice, by which any of them had entered and pierced the inward substance.

但し、それがかりそめにも内質に透入せし時の孔と見ゆるはいとしやかなるをだにえみざりき。

好色の男子等が、ものゝけに媚婦に心を奪はれ、我れはくゞともの惚れて慕ひ寄れど、只ひとりだに媚婦がまことの情にあづかりし者は無し。「箭投矢」とは暗に好者が秋波に喩へたるなり。俗説に謂ふ小野小町が話などは、上流社會の媚婦の一例なり。九十九夜まで深草の少將を翻弄せし手ぎはり、彼なたの媚婦に於て常に見る所なり。

Every snatterer in anatomy knows, that this *pericardium*, or case of the heart, contains in it a thin reddish liquor, supposed to be bred from the vapours which exhale out of the heart, and being stopped here, are condensed into this watery substance.

少しく解剖學を心得たる者は皆知る、此の心胞、即心臓の外被のうち、に赤味を帯びたる薄き液體あるを、それは心臓より發生する蒸氣が、此の外被内に停められ、やがて凝り做して、水質となれるなりと假定せらる。

Upon examining this liquor, we found that it had in it all the qualities of that spirit which is made use of in the thermometer, &c. show the change of weather.

此の液體を試験するに及びて、吾人はさきよりいふは彼の驗温器とらふものに

用ひられて、天氣の變動を表示する、酒精の諸性能を具備したりと。此の意表に出でたる落想のをかしまは、説明を加へずとも下文を読みゆくうちに、そのつから明瞭となるべし。

Nor must I here omit an experiment one of the company assures us he himself had made with this liquor, which he found in great quantity about the heart of a coquette whom he had formerly dissected.

こゝに語り洩らすべききは、列席者の一人が嘗てみづから此の液もて物したりと断言せる一條の實驗なり、其が嘗て剖拆せし娼婦が心臓の邊には彼れらびたゞしく此の液を發見せりとなり。

He affirmed to us, that he had actually enclosed it in a small tube made after the manner of a weather-glass; but that, instead of acquainting him with the variations of the atmosphere, it showed him the qualities of those persons who entered the room where it stood. 彼は断證すらく、彼は現に、そをば風雨鏡にならひて作れる一小管のうちに入れたりしが、(案外にも)そは(尋常の風雨鏡とはちがひ)天氣の變動を知らしむる

ことをばせ、只そを置ける室に入來る諸人の資質のみを示したりきと。

He affirmed also, that it rose at the approach of a plume of feathers, an embroidered coat, or a pair of fringed gloves; and that it fell as soon as an ill-shaped periwig, a clumsy pair of shoes, or an unfashionable coat came into his house;

又断證すらく、そは羽根飾、刺繡せる外衣、又は縁飾ある手袋の近寄ればすなはち昇り、醜き假髪、ぶざまなる靴、又は不風流なる外衣の、其の家に入り來るや、墜て降りきと。

Nay, he proceeded so far as to assure us, that, upon his laughing aloud when he stood by it, the liquor mounted very sensibly, and immediately sunk again upon his looking serious.

加之、彼は更に進みて、彼その傍に立ちて聲高に笑ふときは、此の液もてさうく昇上し、なつて眞地目なる面地すれば、やがて忽然と降下せりと、そを確言するに至りき。

In short, he told us, that he knew very well by this invention whenever he had a man of sense or a coxcomb in his room.

要するに、彼は語るらく彼は此の新發明によりて室内なる人々の賢愚を詳に知るを得きと。

媚婦のよろこぶ所は華奢と浮靡となり、媚婦によるこぼるゝは遊治の徒にあらずは輕薄の徒なり。其の友を見れば其の人の人柄を知るに足るべし。遊治嫵媚の徒は只管無意義笑諠を喜ぶものなり、されば談ずること眞面目となれば擧縮し辟易す、マヂソンが姚曲の筆は彼の輩が弱處を痛刺して精妙なり。

Having cleared away the pericardium, or the case and liquor above mentioned, we came to the heart itself.

かくて心胞、即ち外被井上に入りたる液腔を取り除きて後、吾人はいよいよ心臓の解剖に着手せり。

かかる場合の itself は「心臓の本体」といはんほどの義なれば、こゝには「しや〜」と云ふ言を用ひて其の意をあらはせたり。 itself と「其の物」と訓ずるは近ごろのなりはしなれど、いかたや。

The outward surface of it was extremely slippery, and the *nuclo*, or point, so very cold

withal, that upon endeavouring to take hold of it, it glided through the fingers like a smooth piece of ice.

(若かるに)その外面ことの外、平滑にて細尖即ち、たるところいと冷なりしかば、そを把へんと力むる程に、なぬら滑なる氷片のやうな、つゝと指の間をすべりぬけぬ。

媚婦が心の浮薄冷淡なるを諷刺せるなり。「細尖」とは解剖學上の語、心臓の頂點の尖りたるあたりを指す。

The fibres were turned and twisted in a more intricate and perplexed manner than they are usually found in other hearts, insomuch, that the whole heart was wound up together like a gordian knot, and must have had very irregular and unequal motions, whilst it was employed in its vital function.

(なご)纖維は、他の心臓中に通例發見せらるゝよりも、更に幾層か紛糾錯雜して纏繞したれば、心臓全体は、なごら一箇のゴルヂオス繩のやうに捲束せられたり。されば、それが活作用に用ひられたりし折には、一定不規律且不平等なる



運動をなせりしならん。

此の段はた媚婦の無節操なるを説く、其の定見なうして多情なる性は其の心臓の組織に見えたりとなり。浮草やきのふは東けふは西なる浮氣心のすこしも定まらぬからは、心の臓の組織もこゝに物したる如く複雑至極の物なるべしとなり。「ゴルヂオス」は希臘の古事也、昔フリツアといふ國の王にゴルヂオスといふあり、天神ウウスといふに、車一輛を獻じ、その柱の傍に其の車を繫ぐとて木皮もて長き紐を作りさて、輓ひきに結びたるが其の纒ひき堅うして解くべからざりき、さるほどにウウス神の託宣あり、曰はく、此の纒を解きほぐし得ん者は全亞細亞に君たるべしと、後年歴山大王の此の地に來たるや、かゝる纒のときほぐしがたき理あらんやとて、まばらしくは手もて試みけるが、やがて佩劍を抜きて只一擊に結び目を切斷し、我れこそはゴルヂオス纒を解きたれ、やがて全亞細亞に君たらんといひけり。此の古事によりてすべて紛糾錯雜せる纒のことと、「ゴルヂオス」といふ間々盤根錯節若しくは「亂麻」などいふ意味にも用ふ。

*One thing we thought very observable, namely, that upon examining all the vessels which came into it, or issued out of it, we could not discover any communication that it had with the tongue.*

一事の甚注意すべく思はれたるが、ありき、他なし、こゝに通へる、又はこゝより出でたる一切の管をもと檢するに及びて、心臓と舌との間に何等の通傳をもえみいださざりしことなり。

媚婦が口にいふ所は一もまばらしくは、より出でず、さるべき。諷刺のらと婉曲にしてせまらざるうちに、そのつから他を慚死せしむる力あるを味ふべし。

*We could not but take notice likewise, that several of those little nerves in the heart which are affected by the sentiments of love, hatred, and other passions, did not descend to this before us from the brain, but from the muscles which lie about the eye.*

全く注目せざるを得ざりし事は、彼の戀慕、怨惡、及び其の他の情慾の爲に動かさるゝ心臓神経の種々が我が前なる此の物にありては、脳髓よりは來たらずして、眼邊の筋肉より來りしこと是なり。

媚婦が愛慕、怨惡等は、すべて分別、智慮の結果にあらずして、目に見たる醜美の感覺

Upon weighing the heart in my hand, I found it to be extremely light, and consequently very hollow, which I did not wonder at, when, upon looking into the inside of it, I saw multitudes of cells and cavities running one within another, as our historians describe the apartments of Rosamond's Bower. . . . .  
 手をもて心臓を量り見るに及びて、予は、その甚しく輕やかなること、隨うてはと空虚なることをもとどりぬ、そとば訝しとも思はざりき、(何となれば)その内部を檢するに及びて、我が歴史家等が叙状せる彼のロザモンド姫が林亭の秘房のやうに、次第に内部に重疊せる無數の胞腔を見つればなり。  
 ロザモンド姫は英國王ヘンリー二世の寵姫なり、王其の皇后の嫉妬をちそれて、大林園中に人知らぬ林亭を設け、そこに姫を棲ませたり、件の林亭の建てかたはいと不思議なるものにて、譬へば八重櫻のやうに造られたり、いにしへの飛驒の工や物しげんと思はるゝばかりに、室内にまた室ありて入れどもくまこととの奥の間に達することなし、すなはち稀有の迷殿なり、故に彼方にて「ロザモンドの林亭」

といへば我が國の「八幡知らず」などと同じ義に解せらるなり。こゝにては媚婦が心底の變幻究なくして端倪すべからざるに喩へたり。胞腔は胞と腔と別々にして見るべし、共に解剖學の脛胞の形したるもの腔の如く凹みたる處といふ義。

Several of these little hollows were stuffed with innumerable sorts of trifles, which I shall forbear giving any particular account of, and shall, therefore, only take notice of what lay first and uppermost, which, upon our unfolding it, and applying our microscope to it, appeared to be a flamecoloured hood. . . . .

此の種々の空處は無數の贅具類もて充されたり、その詳細なる説明は、こゝに物することを忍ぶべければ、只最上部に、まなきに横はれりしものゝみに注意を下さん、その開き展べて、顕微鏡を應用するに及びて、火炭色の帽子なりと見られき。

「火炭色の帽子」とは當時の風流女等の好みて着用せる帽子也。火炭色とは橙々色のやゝ赤味の勝ちたるをいふ。かゝる媚婦等が念頭に來往せる事は總じてタライもなき事のみなり、美しき衣裝着たし、流行の帽子かぶりたしなどいふ念のみな

りといふ意。帽子の色を火炎色といふは男をたらしめて焦れさせ入と思ふ下心を顯示せるなりといふ説ありしかばや。

We were informed that the lady of this heart, when living, received the addresses of several who made love to her, and did not only give each of them encouragement, but made every one she conversed with believe that she regarded him with an eye of kindness.

聞く所によれば此の心臓の主たりし婦人は世に在りしころ彼れを戀ひ慕ふ種々の男等のいひ寄れるを聽きて其の人々の言に未頼もしう思はせしのみかかりにも相語りし人言をして此の姫我れに情ありと信せしめきと。

「此の姫我れに情あり」云々原文には情深き目もて我れを見るなりと信せしめきとあり同義也。娼婦が口をきほどは誰にも愛さうよきぞらや。

For which reason, we expected to have seen the impression of multitudes of faces among the several plaits and foldings of the heart, ざるからにわれ人どもに此の心臓の種々の褶折目の間には面の數百萬の印象を見るならんと待ち設けたりした。

but, to our great surprise, not a single print of this nature discovered itself, till we came into the very core and centre of it.

大案外にもざるたぐひの印跡は其の心核に達せしまでは只一つだにあらはれぬりき。

娼婦は何人にも情ありげにもてなしたりといへば其の意中の人の無數なりしは思ひやらるゝすれば一定其の心臓面には無數の戀男の面の印跡せられてあるべしと豫期しつゝに取調の結果は案外なりきとの意。

We there observed a little figure, which, upon applying our glasses to it, appeared dressed in a very fantastic manner.

さてそこには(心核に)一のちよやかなる人の姿を知たり眼鏡を應用するに及びてそれはさうも嗚呼なる風躰に服裝せりと見えたりき。

The more I looked upon it, the more I thought I had seen the face before, but could not possibly recollect either the place or time; when, ぞをながむればなむるほど前に見し面なりと思ひければとていふもさう

At length one of the company, who had examined this figure more nicely than the rest, showed us plainly by the make of its face, and the several turns of its features, that the little idol which was thus lodged in the very middle of the heart, was the deceased beau, whose head I gave some account of in my last paper.

竟に餘人よりも一層綿密に件の姿を取調べたりし列席者の一人が、其の面の格好と其の容貌の種々の特質とによりて、明白に暗示しけらく、此の心臓の眞中心に、かく安置せられたる小やかなる本尊は、予が往ぬる日の紙上に語りし、彼の頭腦の持主なりし故伊達男に外ならざりし。

浮薄婦人が唯一の意中の人は故伊達男なりと結びたる筆つきを、もやは老成なれど、訓釋しては世の旨味もなし、よく原文を咀嚼して其の緯々たる諷諷の餘韻を知るべし。

As soon as we had finished our dissection, we resolved to make an experiment of the heart, not being able to determine among ourselves the nature of its substance, which

differed in so many particulars from that of the heart in other females.

解剖を終りしや、やがて人々は此の心臓を試験すべしと決定しぬ、蓋他の女性の心臓とは夥多の要點に於て異なる、此の心臓の本質をば理論のみにては到底決論しがねし故なり。among ourselves 云々とは異論紛出して一決しかねたりといはんほどの義。「試験すべし」とは化學的實驗を行ふべしと云ふ義。

Accordingly we laid it into a pan of burning coals, when we observed in it a certain salamandrine quality that made it capable of living in the midst of fire and flame, without being consumed, or so much as singed.

かゝりければ吾人はそを炭々たる石炭の皿のうちに置、その時吾人は觀察せり、此の心臓には一種山椒魚的性能ありてたとへ火の眞中にあるも、燒き盡さるゝことなればた焦さるゝことだになく、依然として生存し得べき性質あることなり。

これも浮薄女子が心の冷やかなるをいふ也、又其の情熱の爲に我れを忘るなどい

をこそ無きと刺る。こゝに火焰といふは専ら戀情の切なるを指す。

As we were admiring this strange phenomenon, and standing round the heart in the circle, it gave a most prodigious sigh, or rather crack, and dispersed all at once in smoke and vapour.

人々が此の奇なる現象に駭歎して、件の心臓の周邊に環立したりし折から、そはいとあそろしきうめき聲、否むしろ破るゝ如き響を發しつゝ、さて突然と煙と化し、湯氣となりて八散しぬ。

This imaginary noise, which methought was louder than the burst of a cannon, produced such a violent shake in my brain, that it dissipated the fumes of sleep, and left me in an instant broad awake.

予が(夢心に)大砲の響よりもすさまじと覺えし此の假空の物音は、我が頭腦にいと激しき振蕩を生ぜしかば、眼の霧はたちどころに消散し、予はやがて全く目もめき。

醒め來れば南柯の一夢といふ結末は平凡なれど、前以て夢と斷たるたけに大人び

たり。○總じてフアンソンの二編略は其の筆致と共に從容として、せん、こまじからざる所に不可言の妙ありしを、は品評せず、また品評せんとするも能ふまじき也、看ん人之を諒せよ。

(完)

~~~~~

扇子の用法  
Exercise of the Fan.

此の一篇は前の二篇にひとしく頗るよくフヂンが婉曲なる諷刺を表示するに足るものなり。其の旨意は當時の上流婦女が時尙の扇子を弄びて媚惑の具とし、種々の妖態を事とせるを笑へるなり。すなはち是れも媚婦を諷刺したる文章也、前に釋したる文と相照して味は、所謂媚婦の情態を勞踊するに足るべし。總じて本文中に見えたる諸般の舉動はいさゝか誇張して寫しだされたと要するに當時の貴女等が實際相ひきゐて行へりし所に、一として寫實的ならざるはなし、同代の人が此の文を讀みし時には恰も文化文政の江戸市人が京傳三馬等の諷刺文を讀みしとは、同様の興を感ぜしなるべし。されども其のころの時様を知らずして只文字のまゝに卒讀しゆれば或は何等の妙味をも感ぜざるべきか、こは蓋し風俗文の多少まぬがれがたき不幸なるべし、而も予が前段に説明せる所によりてフヂンが文章の特質を了解し、十八世紀の風俗を追想し、而して善く此の文を味はば、諷刺文の極意を研究するに於て裨益する所甚からざるべし。原文は例

の如く平易雅淡をもてはあくまでも眞面目にして裏には洒脱の滑稽あり而して諷刺の間殆ど些の惡意をもとてはなまざる所實に此の作家の特得なり。

I do not know whether to call the following letter a satire upon coquettes, or a representation of their several fantastical accomplishments, or what other title to give it; but as it is I shall communicate it to the public.

予は左の寄書を媚婦に於ける諷刺と各くなきか、又はその種々の嗚呼なる藝術の記事と呼ぶべきか、はた如何なる名稱を與ふべきか知らざれば予は其のありのまゝなるを世間に傳ふべし。

「メヘンテ」の主筆として物誌より大人ぶりたる巨吻はともかひ。みづから物したるを寄書のやうにもてなしてかくは前書したるなり。

It will sufficiently explain its own intentions, so that I shall give it my readers at length, without either preface or postscript.

その旨意はものづから明なるべければ、或も附書もせず全文を讀者に供するべし。

此の前替の口眞似ならねど、本篇は文章平易にして旨意もほと／＼明なれば成るべく細釋を略き又評言をも省くべし、又此の篇にては少しく原文の風致をも示したく思へば翻もところ／＼は義譯的となすべし、フヂヨンの文致文の風味を示さん爲には是非義譯法を取らざるを得ざればなり。

“Mr. Spectator, Women are armed with fans as men with swords, and sometimes do more execution with them.”

觀察者足下、女子の扇をもて武器と爲たし候は男子の劍に於けると一般の儀に候へども而も時としてはとゞまて一層の殺傷をたらし候。婀娜たる女子が一本の扇子を利用して頗る媚態を凝らすときは男子の惱殺せらるゝもの數を知らざるといふ處を四角ばんじりせむと云ふは、扇のさかしみ也。

To the end, therefore, that ladies may be entire mistresses of the weapon which they bear, I have erected an Academy, for the training up of young women in the Exercise of the Fan, according to the most fashionable airs and notions that are now practiced at court.

かゝるがに予は婦人たちをして其の携ふる武器の完全なる達人たらしめん爲に、方今宮中にて行はるゝ最も時尚的なる風格作法エグゼシブによつて年少なる女性達に扇子の使用法を傳授せんと欲し、一の學校を設立したし候。扇子を弄して媚を街ふことの上流女子社會に流行するを諷刺せんとして、扇ファン使用法學校を設立せる者の廣告を擬造し來たる眞個奇想といふべし。昔て『早稲田文學』に掲げたる小説學校といふ諷刺文は此の旨を學んで至らざるもの也、何となれば彼れに見えたる諷刺はあまりに露骨にして何となく嘲弄の氣味多く此の作家の如くとも言はぬ温然たる所無ければなり。

The ladies who carry fans under me are drawn up twice a day in my great hall, where they are instructed in the use of their arms, and exercised by the following words of command:

- Handle your Fans,
- Unfurl your Fans,
- Discharge your Fans,

Ground your Fans,

Recover your Fans,

Flutter your Fans,

予に就いて扇子を携ふる婦人たちは一日に二度予が廣堂内に排列してその武器の用を學び且左の號令によりて傳習に從事することに御座候。

扇を把れり  
扇を開けり  
扇を發射せり  
扇を擲けり  
扇を復せり  
扇をはたらかざり

By the right observation of these few plain words of command, a woman of a tolerable genius who will apply herself diligently to her exercise for the space of one half year, shall be able to give her fan all the graces that can possibly enter into that little modish machine.

これら少許の平明なる號令を守り候はゞ凡そ半年間その練習に勉勵せん相應の才ある女子は必ずや其の扇に此の小やかなる風流器の領し得べき一切の妙趣を興へ得べく候。

以上いづれも根も葉も無きこしらへことなるをいかにもまことらしく尤らしく眞にさる講習所出來たるかと思はしむるやうに物したる筆つき老練といふも餘りあり尙以下の記事を熟讀せば風刺の趣味次第に瞭然たるべし。

But to the end that my readers may form to themselves a right notion of this exercise, I beg leave to explain it to them in all its parts.

さうながら讀者諸君として正しく此の練習の旨を解せしめんが爲に予は詳細なる説明を許容せられんことをこゝにねがひ候。

When my female regiment is drawn up in array, with every one her weapon in her hand, upon my giving the word to Handle their Fans, each of them shakes her fan at me with a smile, then gives her right-hand woman a tap upon the shoulder, then presses her lips with the extremity of her fan, then lets her arms fall in an easy motion, and stands in readiness



to receive the next word of command. . . .  
 我が女隊がものゝ、其の武器を手にして整然と排列いたし候や、予が扇を、  
 抱れいと號令するを合圖に、ものたゞ一齊に嫣然と打笑み、予に向かひて扇を打  
 揮ひ、さてそれが右手なる女子の肩を、とと打ち、さてものゝ、扇の端もて一齊に  
 ぞが唇頭を、おさむ、やがてしなやかに武器を下して、次なる號令の掛けらるゝ  
 を相俟ち候。 . . .  
 當時宮庭若しくは盛會の席に應めば、恰もかくの如き光景を見ることが常にありし  
 也。彼等貴婦人等は、もとよりいひおはせて講習したりしには、あらねど、流行の目  
 然の結果として、殆どいひおはせたらんやうに同じさまの媚態を物せり、平生講習  
 などせるにやと思はるゝばかりなるが、かたはら、若くは調練に據して刺れ  
 るなり。

*all this is done with a close fan, and generally learned in the first week.*

以上はすべて閉ぢた扇をもて物することを御座候、而して最初一週間に  
 習ひ得るをもて通例といはし候。

再釋すれば以上の使用法などは、如何なる交際なれぬ少女にても、苟も交際場へ出  
 で來るほどの者は行ふ所なれど、以下の巧妙なる媚態に至りては、老練の媚婦にあ  
 らざれば、能し得ぬところといふ意。これより以下の文、尤も作者の特色を現す。

"The next motion is that of Unfurling the Fan, in which are comprehended several little  
 flirts and vibrations, as also gradual and deliberate openings, with many voluntary fallings  
 asunder in the Fan itself, that are seldom learned under a month's practice.

その次は扇を、ひらく法に御座候、此のうちには種々の細き振りかた、顔はせか  
 たなども含まれをり、又次第にゆるく開く法、かねては自然に、ハ、ハ、と開  
 かする法なども有之候、これは一ヶ月間の實習にて習ひ得ることは稀に候。

This part of the exercise pleases the spectators more than any other, as it discovers on a  
 sudden an infinite number of Cupids, garlands, alders, birds, beasts, rainbows, and the like  
 agreeable figures, that display themselves to view, whilst every one in the regiment holds a  
 picture in her hand.

此の段の練習は他の何れよりも、觀者を悦ばせること一層に御座候、蓋し突如

として無数の戀の神、花がつら、祭壇、鳥、けもの、虹、さては同じたぐひの面白き畫どもを發現いたし候が故なり、こは隊伍中の各人が其の手に一畫圖を持する間、一時に目前に顯はるゝ所に御座候。

戀の神以下は、扇面に畫きたる畫様をいふ。戀の神はキウピッドといふ盲目裸躰の童神なり手に弓矢を携ふ。此の矢にあたるものは戀慕の暗に迷ふとなり。此の神を盲目としたるは「戀の暗」といふ比喩なり。祭壇或は供物壇とも譯す、神に供物をそなふる時に用ふる机又は臺をいふ。

"Upon my giving the word to Discharge their Fans, they give one general crack, that may be heard at a considerable distance when the wind sits fair.

さて扇を發射せしの際令を與へ候や彼等は一齊に憂然たる響を發し候これば風向よるしき日などにはいみじく隔たれる處にても得聞かるべく候。

This is one of the most difficult parts of the exercise; but I have several ladies with me, who at their first entrance could not give a pop loud enough to be heard at the further end of a room, who can now Discharge a Fan in such a manner, that it shall make a report like a pocket-pistol.

此の段は使用法中のいとくむづかしきもの、隨一に候へども予が門下なる若干の婦人は其の入門の當時には室の極端にて聞くに足らん音をだに得成さず候ひしが今は懐中ピストルのやうなるいみじき物音を成さん程に能く其の扇を發射し候。

扇子を使用することに熟れたる者が半無意識にして物する種々の媚態を物々しく教授するやうに説き來たる所此の諷刺文のをかしみなり。憂然たる音とはバチといふ音なり我が國人が扇を開閉してバチ／＼と音さすると同様の所爲にて煙艸を吸ひなれたる者か指先にて煙管を弄ぶたぐひなるをそを替古せでは叶はぬことのやうに物々しく説けるゆえにをかしみ生ず。此の般諷談のあぢはひは翫味してみづから知るべし。

I have likewise taken care (in order to hinder young women from letting off their fans in wrong places or unsuitable occasions) to show upon what subject the crack of a fan may come in properly.

予はまたあらぬ場處さてはふさはしからぬ場合に若き婦人の扇を發射するをといめんとて扇の憂然は如何なる事柄に適當するかを頗る留意して教示いたし候。

思ふに當時の婦人等が扇を鳴らせしは幾分か暗號の氣味ありしなるべし例へば他の服裝をそしる時又は「一看せよあの人の風采は可憐ならずや」とか又は其の他何事かを相知らせん爲に扇を鳴らせしことあるべし。然るに交際なれぬ若き婦人などはかゝる例を知らず只人真似に意味も無く扇を鳴らすことありかくては上流の風儀に叶はずと例のシヤツメンらしく教授の一々條としたる例のをかしまなり。

I have likewise invented a fan, with which girl of sixteen, by the help of a little wind which is enclosed about one of the largest sticks, can make as loud a crack as a woman of fifty with an ordinary fan.

予はまた新一扇子を工風いたし候その最大なる骨の一には少許オシホカリの風を含ませ置き候へば十六才の少女もその助によりて尋常の扇をもてる五十歳の

婦人のに同じきすさまじき響を發し得べく候。

此段はさほどに扇を鳴らすことが大切なる時尙ならばイン器械じかけの扇子を用ひば手輕なるべしといふ意を婉曲に物したるなり。

"When the fans are thus discharged, the word of command in course is to Ground their Fans.

扇のかく發射せられ候や次に來たらん號令は扇を捌くわけいにて候

This teaches a lady to quit her fan gracefully when she throws it aside, in order to take up a pack of cards, adjust a curl of hair, replace a fallen pin, or apply herself to any other matter of importance.

こは婦人たちが骨牌かたのひとくみ一組を取りわけ又は愛敬毛あいきやうを整へ又は落たちる留針を元の如くしさては其の他あらゆる緊要の事どもをせん爲に扇を傍かたへ投なげやる時そをしなやかに物するの法を教ふるものに御座候。

輕々貴婦人等が媚態をかぞへ來たる所却りて妙。緊要の二字全幅を諷し得て輕妙。

This part of the exercise, as it only consists in tossing a fan with an air upon a long table (which stands by for that purpose) may be learnt in two day's time as well as in a twelve-month.

此段は只態教<sup>たて</sup>やく其の扇を(豫め其の爲に置かれたる)長卓子の上に投ぐるに過ぎぬれば十二ヶ月間にては將た二日間にては習ひ得らるべく候。

"When my female regiment is thus disarmed, I generally let them walk about the room for some time; when on a sudden (like ladies that look upon their watches after a long visit) they all of them hasten to their arms, catch them up in a hurry, and place themselves in their proper stations upon my calling out Recover your Fans.

我が女隊が斯く素手と相成りたる時予はしばらく彼等をして室内を逍遙せしむるを通例といたし候やがて突如として(猶彼等が長坐の後急に其の懐中時器を見るがごとく)一同急ぎ走り戻り、あわてゝ其の武器をとらゝせて予が扇を復せいと呼ぶに及びてものゝ其の正當の位置に復し候。

此の段はた時向を直寫す、當時の婦人等がいひ合はせたらんやうに自然に行へる所を取りて修練の後に行ふことゝせるがをかしみ也。

This part of the exercise is not difficult, provided a woman applies her thoughts to it.

此の段の修練は心を用ひて習ふべきはむづかしきものぢからず。

"The Fluttering of the Fan is the last, and, indeed, the masterpiece of the whole exercise; but if a lady does not mispend her time, she may make herself mistress of it in three months. 扇をはた<sup>た</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>ことは最後の法にして實に全修練中の奥ゆるした候へとも若し時をむだにせずして學習いたし候はば多分三ヶ月内にて通達し得らるべく候。

I generally lay aside the dog-days and the hot time of the summer for the teaching of this part of the exercise; for as soon as ever I pronounce Flutter your Fans, the place is filled with so many zephyrs and gentle breezes as are very refreshing in that season of the year, though they might be dangerous to ladies of a tender constitution in any order.

予は通例狼星日及び夏の暑き間をば此の部の練習に取りのけよき候其の故如何となれば予が扇をはたかさいと命じ候や否やあびたりしき微風と涼風とが忽ち室内に充滿いたし候儀ゆゑ暑き時候にこそ頗る爽快なるものに

候へど他の季節には或は孱弱き躰質の婦人などに危険これあるべくやとぞ  
んぜられ候ためなり。

危険の二字點し得て妙。

“There is an infinite variety of motions to be made use of in the Flutter of a Fan: there is the angry Flutter, the modest Flutter, the timorous Flutter, the confused Flutter, the merry Flutter, and the amorous Flutter.

そもく扇のはたきかたの儀は實に千差万別にして其の用法くさく有  
之候例へば腹立たしげなるはたきかた温淑げなるはたきかた怯けたる  
かたあどつき狼狽たるかた嬉しく樂しげなるかた情ありげなるかたなど。

Not to be tedious, there is scarce any emotion in the mind which does not produce a suitable agitation in the fan; insomuch, that if I only see the fan of a disciplined lady, I know very well whether she laughs, frowns, or blushes.

簡短に申候はんに凡そ人心の感動にしてそれに適當せる搖動を扇子に現せ  
ざるものは殆ど無之候例へば予などは斯道に熟練せる貴婦人の扇をだに一

見いたし候へば其の人笑へるか憂めるか將た報顔せるか容易に判知し得る  
程に御座候。

婦人等が其の場の躰裁をつくらふため俗にいふテレカクシの爲に扇を利用する  
鹽梅を極めて婉曲に諷刺せるなり。平安朝の貴婦人等が如何に繪扇を利用せし  
かを想像せば思なかばに過ぐるものあらん。

I have seen a fan so very angry, that it would have been dangerous for the absent lover  
who provoked it to have come within the wind of it; and at other times so very languishing,  
that I have been glad for the lady's sake the lover was at a sufficient distance from it.

予は嘗て甚しく立腹したる扇を見て候ひしがそは此の珍事の原となりし不  
在の情郎が若し其の風下にちかづき候はば頗る危険なるべしとぞんぜられ  
し程なりき又嘗て觸らば落ちんやうにいとく力無げなるをば見受け候ひ  
きされば予は其の婦人の爲にあはれ其の情郎たらん人の遙かに隔たりてあ  
れかしと祈り候ひき。

人を主とせず扇を主としたるは妙なり諷刺の婉曲を味ふべし。 Languishing はい

とく力無げなるをいふ。かゝる折には男心の癖として間々自惚心を起こし此の女我れに情ありなど思ふならひなれば當の婦人が思はぬ迷惑を蒙ることあるべし其の情郎たらんもの傍かたわらにぬこそ當婦人の爲なるべけれとなり。此の解はデイトン氏の解に據りたるなれど尙聊かうなづきがたき節ふしあり。或は *language* 語を單に「力無げに」と譯して慈然たる婦人の形容とせば如何。さすれば此の一句の解下の如くなるべし。曰はく予は此の婦人の情郎のあたりにあらざらんを願ふ何となれば若しかゝる折に情郎來たらば此の婦人或は得忍びかねて稠人の中をも顧ず如何なる愁歎場を現出し來たらんも圓りがたければなり云々。尙再考すべし。

*I need not add, that a fan is either a prude or a coquette, according to the nature of the person who bears it.*

申すにも及ばざる儀に候へども扇は其を携ふる人々の品質次第にて貞女ともなり媚婦とも相成候

又人を主とせずして扇を主とす諷刺文の本領。 *prude* とは媚婦の反對力めて行

儀を粧ひ貞淑を粧ふ女をいふ。必ずしも褒美の稱にあらずと知るべし。但し女の品格を上下するは女自身の爲人であり扇に罪もなく咎とがも無しと扇の爲に餘地を存じたる筆致何でも無きことのやうなれど老成の筆法なり。

*To conclude my letter, I must acquaint you, that I have from my own observations compiled a little treatise for the use of my scholars, entitled, The Passions of the Fan, which I will communicate to you, if you think it may be of use to the public.*

さて終に臨みて諸君に申しあぐべきは予は自身の觀察に基きて門弟等の用にとて『扇子の情欲』と題したる一小論文を編纂いたし候が此書の若し世間にも入用あるへう思し召され候はば予はそを諸君にもお傳へ申すべく候。

*I shall have a general review on Thursday next, to which you shall be very welcome if you will honour it with your presense. — I am, etc.*

(又)次の木曜日には總ざらへを行ひ候筈に有之候諸君若し臨場の榮を賜はり候はば謹みて歓迎仕るべく候。 某頓首。

*I am, etc.* は彼あなたの書簡文例 *etc.* は等の義「予は足下の順僕云々の語を略したる

なり。こゝには某頓首と義譯せり。

"P. S.—I teach young gentlemen the whole art of gallanting a fan.

追啓 予はみやびやかに扇をやりとりするの全法を年少の紳士がたに教授いたし候。

婦人に對する諷刺一轉して年少紳士に及ぶ輕妙。P. S. は羅句語 post scriptum の略、追啓の義。

"N. B.—I have several little plain fans made for this use, to avoid expense."

注意 費用を節するため無地の扇いろく備へ置き候。

一結妙といふべし。總じて流行時尚は矯奢を衒ふを主とするものゆゑ費用の問題は提出すべからざる筈なるゆゑ此の一句矛盾を極む隨うてをかしみ一倍す。讀者よく此の一文を通讀再讀せば諷諧の本意を會得するに庶幾からん。N. B. は nota bene の略「善く注意せよ」の義。

(完)

### 英文評釋

英詩英文の評釋もやゝ歩武を進められたれば稍々長篇に過ぐるの嫌あれど本號以下シェイクスピアの脚本を講じ試んとす。這是嘗て或文學雜誌に掲げ中ごろ止むを得ざる理由ありて中絶せしものなるが此のたび更に訂正を加へ及ぶべきだけに初學者にも領解し易きやう註解を施して間斷なく續稿を掲げ第三年度の末までには必ず全篇を譯了せんと期す。從來評釋し來たれるは孰れも皆金片玉屑すなはち英文學中の小品たるに過ぎず、此のたび譯出するは歐洲美文壇上に於ける有數の作なり隨うて用語古雅、着想の千變萬化して端倪すべからざると共に措辭はた險晦、語法文格の如きも尋常一様の文例と異なるものあり卒讀して解しがたきもの數あるべし諸子あらかじめ其の心して反復熟讀し原文の妙を會得するに力めよ。譯文の如きは僅に語を逐うて訓を下し、原意に忠ならんを專とするのみ風致と餘韻とはすべて原文に就きて求めざるべからずと知るべし。

評釋者識

シェークスピア作『マクベス』

シェークスピアの作と稱せられたる脚本あまたあるなか、確に彼れが作なりと認められたるは、おほよそ三十六篇に過ぎず。これらは一千五百八十八年(作者二十四歳の時)より同六百十三年までの作なり。而して作者シェークスピアは一千五百六十四年に生まれて同六百十六年五十二歳にてみまかりぬれば、絶筆は四十八九歳の時なりしか。さすれば彼れが著作の時期はおほよそ二十五年なりそを彼れが作に現れたる技倆、結構、着想等の異同を元として大別すれば、四期となる。第一期は彼れが修行期ともいふべき時にて、即ち諷刺談話を主としたる喜劇と『ロメオ、アンド、ジュリエット』の悲劇とを作りし時代なり。第二期は史劇と快活なる喜劇とを作りし時代、其の三期は深刻なる悲劇と、おもて快活にして、うら、嚴酷なる喜劇とを作りし時代、而して其の四期は沈靜嚴肅にして、而も優美爽快なる悲喜混交の劇を作りし時代なり。シェークスピアの著作は此の四期に於て著き異同あり、着想の優劣はいふまでもなく、文章結構にも著き差違あり。此の故にシェークスピアを知らんと欲せば、越くとも此の四期に就きて一二篇宛は讀まざるを得ず。

例へば第一期の代表としては彼れが處女作とみづから稱せし『ギリーナス、アンド、アドニス』といふ叙事の時、兼ねては『ロメオ、アンド、ジュリエット』など。第二期の代表としては『キング、ジョン』、『ヘンリー、四世』、『リチャード、三世』など並びに『マルチャント、オブ、エニス』など。第三期の代表には所謂四大悲劇『ハムレット』、『マクベス』、『キング、リアー』、『オセロー』など、第四期の代表には『テムベスト』、『フィンタルス、テール』など。但しこれは唯予が卑見によりて選りいでたるのみ、其の選擇は人々の見識によりて異なるべし。

シェークスピア研究の方法よりいへば第一期第二期と順序を追うて評釋するかた穩當なるべきが思ふ由あれば、態と第三期の作よりはじむべし。其の故は第一期の作には所謂懸りことば、語呂口合等多ければ、解釋すればとて英語を知らぬ人には到底會得せらるまじき故なり。而して此の評釋は英語を知らぬ人にも多少参考になれかしとてするなれば、予が本意にたがへり。さて又第二期の作も喜劇をさて置きていへば、英國史に疎き人には興味甚だ深からず、且は歴史上の管々しき註釋を加へんもうるさし。加之技倆も着想も第三期のに劣りたり。所詮本評



釋の主旨はシェイクスピアの作意文脈等を其の一作によりて示さんとするにあれば成るべくは傑れたるを取るかた至當なるべしとて遂に四大悲劇の隨一なる『マクベス』の劇をえらぶこととせり。

或は大體を知らせんとならば管々しき註釋よりは誠實嚴正なる翻譯を掲ぐるかた優れりといふ人もあるべきがさるは予の如き勦才不文のもの、企及すべきことにあらず此の故に予は一意原文の字句を追うて意義を解釋するを力め必ずしも詞美を傳へんとはせざるべし。讀者若し眞にシェイクスピアの詞美を知らんと欲せば原文に直接して會得せよ予は唯大要の義を示すのみをもて甘んずべし。

此の作の始めて出版せられしは紀元後一千六百二十三年(作者の死後)のことなりと傳へたり。其の原稿の稿本頗る亂雜なりしと見えて第一版なる謬脱錯誤はいと多かりきときこゆ。其の道の學者が多年の盡力にて誤脱の大かたは正されしが流石に疑はしき詞句の尙殘れるもあれど全く讀み難きは絶えて無し而も尙爰かして一字一句に二三以上の異説あるもあれどそを一々に擧げんはいと管々

しければ重要ならぬ限りは大體の義譯にて足れりとすべし。讀者諸子之れを諒せよ。

此の作脱稿の年月に關しても種々異説あれど假に一千六百〇六年といふを正しとすべし諸子は此の作をもて作者が全盛の時の作と思はば足れり。

此の作の材料は作者と同時代の史家ホリソンシエドといふが著し、蘇國の歴史ヒストリーよりいでたり。人物の姓名も事實の大體もすべて彼れによれるなり。もと件の蘇國史は正史よりは野史に近くて我が『太平記』などに似たるものなるを作者がところくぬきとりてつなぎあはせ更にまた潤色したるなれば事實はいふに及ばず主人公と立てたるマクベスの性質も正史のとは同じからず。活歴史といふことを史劇の本意なりとせばシェイクスピアの如きは太く脚本の本領を誤りたる作者ならんかし。併しながら史と詩とは別物なればマクベスが正史に外れたればとて別に論には及ばぬなるべし。

此の作の數場の中なる幾十節はシェイクスピアが筆ならずといふ説あり。云々の句より云々の句までは他の作者ミッドルトンといふが挿入せしなりなど明に指

摘せし學者もあり。此の事シェイクスピア研究の爲には大切の件なれど入門釋義には必要とも思はれず此の故に言はで叶はぬ分の外は皆省くことゝすべし。此の事につきてはマクミラン版の『マクマス』の緒言又はドゥデン氏の『シェイクスピア』を参照すべし。

シェイクスピアの臺帳は我が國のどちがひ床の淨瑠璃もなく明細なる道具立書割若しくは衣裳の詠へ等もなし唯大跡の場割とおよその舞臺面を示せるのみ又人物の科介こせ思入れ等もたまさかに大要をかき入れたるのみ詳しくきことは無し解釋には種々管々しきことを書き入れたれどそれらは本文にあらざると知るべし。シェイクスピアのも作によりてはほとゞ幕毎に開場詞の附きたるもまた末に閉場詞のつきたるもあれど此の作には無し。

DRAMATIS PERSONAE.

- DUNOAN, *King of Scotland.*
- MALCOLM, *His Sons.*
- DONALBAIN, *His Sons.*
- Young SIWARD, *his Son.*
- SEYTON, *an Officer attending on Macbeth.*
- Boy, *son to Macduff.*
- An English Doctor.

- MACBETH, *Generals of the King's Army.*
- BANQUO, *Generals of the King's Army.*
- MACDUFF, *Generals of the King's Army.*
- LENNOX, *Generals of the King's Army.*
- ROSS, *Generals of the King's Army.*
- MENTETH, *Noblemen of Scotland.*
- ANGUS, *Noblemen of Scotland.*
- CATHNESS, *Noblemen of Scotland.*
- FIANOE, *Son to Banquo.*
- SIWARD, *Earl of Northumberland, General of the English Forces.*
- A Scotch Doctor.
- A Soldier.
- A Porter.
- An Old Man.
- LADY MACBETH.
- LADY MACDUFF.
- Gentlemen attending on Lady Macbeth.
- HECATE, and three Witches.
- Lords, Gentlemen, Officers, Soldiers, Murderers, Attendants, and Messengers.
- The Ghost of Banquo, and other Apparitions.

SCENE—In the end of the Fourth Act, in ENGLAND: through the rest of the Play, in SCOTLAND.

登場人物

- 蘇國王
- 同長子
- マルコーム
- 同
- 貴紳
- ロックス
- メンテイス
- 同
- 貴紳
- ロックス
- メンテイス
- 同

英文原典

同 次子  
 蘇の將軍 ドナルベイン  
 マクベス  
 同 パンユー  
 貴 紳 マクダフ  
 同 レンノクス

同  
 同 アンガス  
 同 ケイス子  
 同 パンユー子  
 英軍の將(ノサムブランド伯) フリアンス  
 同 子 シワード  
 同 少 シワード  
 マクベス近臣 セイトン

マクダフの男(少童)  
 英廷の侍醫一人  
 蘇廷の侍醫一人  
 兵卒一人  
 門番の男一人  
 老翁一人  
 マクベス夫人

マクダフ夫人  
 マクベス夫人の侍女二人  
 女魔並に三妖婆

貴紳、官人、武士、刺客、從臣、使者、數十人  
 パンユーの靈並に其の他の妖怪

場處 其の四段の末段は英國  
 其の他は蘇國

ACT I

第一場 野外  
 Scene I.—An Open Place.

Thunder and lightning. Enter three Witches.

アクトの原義動作、シーンの原義景なり爰には意譯を掲げたり。此の二語シエー  
 クスピアの作にては右の如く意譯しても若しくはアクトを幕若しくは套、シー  
 を齣と譯しても差支なければシーンは必ずしも場若しくは齣と譯しがたき場合

他の脚本にはあり。例へば佛の喜劇などに見えたるシーン<sup>シーン</sup>はむしろ景又は舞臺面と譯すべきか。蓋し登場の人物が増減する毎に舞臺面の變換するを第一景第二景と名づくるなり。若し獨舞臺を第一景とすれば申上げます云々といひながら侍士のいで來て問答するは第二景なりさて此の侍士去りてまた獨舞臺となれば第三景となるなり餘は之れに準ず。されば時としては一幕中に數十景を含めることあり。シェイクスピアにはさること絶えて無し彼れがシーンと名づけたるは殆ど我が場と同じものなり。

舞臺の構造當時はなほだ粗末なりしかば道具立書割なども總て當場のちもむきをほのめかすに過ぎざりき。或は荆棘の小枝をこゝかしこにさしはさみて深林の有様を知らしめ或は小石五ツ六ツ散らし置きて瀟邊なる由をきかせたることもあり。甚しきは爰は何村何町など、札に書きて舞臺に掲げたることもありきとぞ。我が能狂言などの舞臺面に似たるものなりけん。餘事ながら我が國今日の舞臺は道具立の大げふなること趣向こそ異なりたれ西洋今日の譲るべしとも思はれずむしろ本式に棟柱などを釘附にする所よりいへば彼れよりも贅澤な

りと評すべし是れ或は我が國の將來にシェイクスピア風の作者を出だすことを妨ぐべき一因縁とはならずや道具だてを頼む心が作者の念頭を離るまじき故なり。シェイクスピアの作を見るに善美悉く其の作の詞句人物が科白レキヤクの間において彼れは眼に訴ふることよりも心に訴ふことを専とせしこといと明なり。或は彼れは道具立等の粗略にて依頼しがたきを知れりし故に自然全力を人物の上に致し、にやあらん。兎に角に道具立などを離れても趣味深きがまことのドラマなるべし。

野外とあるは舞臺面のちほよそを眺へたるなり版によりては荒野と記したるもあり。雷鳴電光とあるも眺への道具鳴物なり。三妖婆とあるは我が國のいづな使ひのやうなる老婆なり。登場とは妖婆のみたり連れ立ちて場に入るをいふ。シェイクスピアの作にては幕あきて後人物の登場すること十中八九の例なり又一場果つる毎に出場の人物悉く立ち去るを十中八九の例なりすいづれも直に舞臺面を換ふるに便宜なれば斯くしたりしならん。勿論登場退場ともにシラセ無く床の淨瑠璃も無し我が國の劇を觀慣れたる目には随分間の抜けたるものなり。

本來此の劇の大筋は蘇國の皇族マクベスがはじめは無二の忠臣なりしが中ごろ逆心を生じて其の君ダンカン王を弑し奸計をもて巧に弑逆の跡をくらまし首尾よく國王の位に登りてまばらしくは榮華に誇りたりしも終にダンカンの皇子マルコオムの爲に誅戮せらるゝに至るといふ筋なり。第一段のはじめの趣はマクベスがダンカン王の勅命を蒙りてペンコーといふ將軍と共に西方群島の領主マクドナルドが謀叛したるを征伐し勝利を得て凱旋する由を妖婆が妖術によりて早くも豫知し途中に待ちうけて魔道に誘はんと試むといふ筋立なり。妖婆が人を魔界におとすといふことは當時の謬信にてシェイクスピア時代の脚本若しくは小説類などには間々見えたり。

第一場の常頭に雷といろき稲妻ひらめく物すこき有様を見せて三妖婆をあらはしたるは此の黯慘たる悲劇の發端たるにいとよく叶ひたり。案ずるに第一場は妖婆等が己に魔法を修しはてし將に立ち別かれんとする所なるべし。我が劇なりせば爰は後ろ黒幕などなるべければ三妖婆の場を退くと共に幕を落とし第二場陣營の場となるべき者ならん。そもく道義の日輪漸没して主人公マクベス

が罪惡の奈落に墜つるといふが此の劇の要點なれば序幕に小暗き夕方の景色を點出したることを暗に主觀的斜陽をも示すに似て面白し。

1 *Witch.* When shall we three meet again,

In thunder, lightning, or in rain?

甲 妖婆

いつ三人がまた會ふべき雷鳴りひかり雨ふる最中に。

此の一齣は悉く韵語より成りたれど風調の美は移しがたし。總して作者は嚴肅、高雅沈痛等の場合をば下めとしておよそ重要な限は律語を用ひたり。韵を押したるは特に優雅なる場合か嚴肅なる場合なり、尤も此れも彼の四期によりて相異あり。妖婆は卑しきものにはあれど爰にてはいと嚴に宣せたり。末句の or 或は and をも替を置せり、故に譯文は and の義に釋したり。

2 *Witch.* When the hurley-burley's done,

When the battle's lost and won.

乙 妖婆

らんちく騒ぎの終らん折に軍の勝敗きまらん時に。

「らんちく騒ぎ」は官軍と叛徒との鬪戦をいふ。勝敗云々もあるも同下。句拍子と音律の都合によりて斯くは重れたるなり。hurley-burley といふ語其の發音の中におのづから動擾の義を現してゐてたし。

3 *Witch.* That will be ere the set of sun.  
丙妖婆 それぞ夕日の沈きぬうち。

1 *Witch.* Where the place?  
甲妖婆 シテ其の場處は。

イッラメに出逢ふべき場處を問ふ。先づ時を問ひ次に處を問ふ。  
2 *Witch.* Upon the heath.

乙妖婆 うつもの荒野也。

*heath* は荒れ果てたる岡なり。妖婆等の如き化生の物の腹よりきくする處と見えなれば意を酌みて「うつもの」を *the* の字を釋しつ。今も其の地なるべしと信ぜられたる處蘇國にありて物産き場處なりと云々。

3 *Witch.* There to meet with Macbeth.  
丙妖婆 オ、マクベスを俟ちあはさん。

原文には「其處にてマクベスにあはんすため」とあり、されど此のあたり張音の數不足して韻律の少しく亂れたるを思へば原文に二三音の脱落あるにやとも思はる。先置既に「俟」(即ち *Expect*) をいふ一語を挿入れて張音の不足を補はんとせり又或註釋家は此の白の前「シテまた誰れにあはんす爲め」

といふ意味にて *Whom* といふ語を挿入して丙妖婆の白をば其の答の如く作りなせり或は *When, Where, whom*, を三問にもてなさんとてなり。爰には諸釋を參酌して前文の如く譯しつ。

さて此のトマンに彼方にて妖猫の啼く聲すと思ふべし。此の猫は妖婆が使役せる怪獸なり。鼠色の猫を「グレイマールキン」又は「グリアールキン」といふ。啼くは其の主を呼ぶなり。  
*Chant*

1 *Witch.* I come, Graymalkin.

甲妖婆 オ、今ゆくむらのグリアールキン。  
2 *Witch.* Paddock calls.

乙妖婆 アン振が呼んでみまぞや。  
蓋も亦使役せらるゝ動物なり。此の蓋は丙妖婆の使ふと見えたり。

3 *Witch.* Anon!

丙妖婆 今すぐは。  
これにて三人打連れ立ちて去らんとす即ち諸共に左の句を唱す。

*All* Fair is foul and foul is fair;  
*Hover* through the fog and filthy air [*exceunt*].

昔々 あなめはれめたきものこそみにくけれ、みにくきものこそめでたけれ。

いさ諸共に霧をかきいぶせき空に漂はむいさせき狭霧に漂はむ。

此の句前のご同く約語にて四張音の句を用ひたり歌といふべきにはあらねどおのづからなる風情ありて尋常の白とは異なり。此の四張音句といふは作者が妖婆若しくは妖怪などの白にのみ用ひたるものなり。四四四四なごいふ句法にて聯しなば或は其の句拍子の面影をだに得らるべきかなと思ひしが力及ずして止みつ。怪物はすへて逆境を穿入るものなれば人間の善美とするものを醜悪なりとし人間の醜悪とするものを善美と思ふなり其の故に狭霧の中は溶りくいぶせき空にたゞよはんといふなりいぶせきを穿入ばなり。Filthy air は狭霧をめて小昏くいぶせき空をいふ。空中に漂はんといへるにて其の飛行自在なるを見るべし。

Scene II.—A Camp near Forres.

Alarum within Enter King Duncan, Malcolm, Donalbain,

Lennox, with attendants, meeting a bleeding Captain.

第二場 フォレンス近在の陣營

鐘鼓騒然(奥にて) ダンカン、マルコオム、ドナルベイン、レンノックス、從臣數人と共に登場手負ひの武官に邂逅す。

フォレンスは地名蘇國の北東部エレンツ州にあり、マクベス、メンコーの兩將が凱陣の途中此の里に到ら

んとして圖らず妖婆に出であひし由ホリメンエッドが蘇史に見えたり。陣營とは蘇王ダンカンが木營をいふ。アラームは鐘鼓騒然といふに當るべし。奥にてとは舞臺の奥の方の邊。マルコオム、ドナルベインは共に蘇王の皇子、レンノックスは公卿前に見えたる登場人物の表とあはせ見るべし。

ダンカン王に邂逅せる手負ひの武官はフォリオ版には Captain とあり後の版には Sergeant とあり爰にあげたる原文は前者に従ひたるなれど恐らくは後の方正しかるべし。此のサルセントの解いるくなれど近衛の武官といふが最も穩當なる解と見ゆ。此の武士の役廻りは所謂「御注進」に似てまつらすむしる手を負うて戰場より退きたる途中にて圖らず王の日にさまりてかく軍物詰に及べりを見るがよかるべし。

Dun. What bloody man is that? He can report,

As seen by his plight, of the revolt

The newest state.

ダンカン ヤ、何者ぞ血に染まりたるあれなるをのこは。容子によって察する所、あの者こそは賊兵等が最近の模様を語り得べし。

Revolt といふ語爰にては賊軍(叛徒)と解すべし。血の字幾たびさなく用ひられて全篇を貫ける、さながら血をもて斑々たる足跡を残したるが如し。おのづから此の劇の主眼字。

「あれなる手負ひ」といはずして「血に染まりたる云々」といへるはいさよく溫和なる老王が性にかなひ

たり。俄然として先づ鮮血の淋漓たるに目を注げりなり。

*Mal.*

This is the sergeant

Who like a good hardy soldier fought

'Gainst my captivity. Hail, brave friend!

Say to the king the knowledge of the broil

As thou didst leave it.

イルロオム  
かれこそは先づこゝに捕はれむとせし予を救ひ、殊勝のはたらき  
せし武官に候へ。ヤマ珍らしや、勇武のもの、汝が戰場を退りし折、見聞した  
る一伍一什、疾く〜陛下に申しあげよ。

「殊勝のはたらきなり」原文には「善き勇取のもの」とあり。「珍らしや」原文には「Hail」な  
り。ハールは祝賀の詞「汝が敵ならんことを祝す」なり。原義なり我が國の「珍らしや」なりといふべき  
處合なるべし。

*Cap.*

Doubtful it stood,

As two spent swimmers, that do cling together

And choke their art. The merciless Macdonwald—

Worthy to be a rebel, for to that

The multiplying villainies of nature

Do swarm upon him—from the Western Isles  
Of kerns and gallowglasses is supplied:

武官  
さん候を見分まかねてぞ候ひし、疲れ果てたる酒の達者が双方互ひにか  
らみあひ角ふたりしも斯くやらん。残忍なるマクドナルド、あらゆる悪事を  
生みいつへき悪念心に群たれば、叛逆人の根本に、いどふとはしきマクドナル  
ド、西の方なる島々より夥多の軍兵驅りあつめ、輕き打物、重き武器、とり〜なり  
ける其の行装。

And Fortune, on his damned quarrel smiling,  
Showed like a rebel's whore: but all's too weak,  
For brave Macbeth—well he deserves that name—  
Disdaining Fortune, with his brandished steel,  
Which smoked with bloody execution,  
Like valour's minion,  
Carved out his passage, till he faced the slave;  
And ne'er shook hands nor bade farewell to him,  
Till he unseamed him from the nave to the chaps,



And fixed his head upon our battlements.

加之「時運」の女神も、笑顔を作り媚を呈し、賊が娼婦となり果てたり。されども争でか味方に敵せん、名にし負ふたる勇武將軍、「時運」には目もかけず、まこと「武勇神」の愛見の如く、揮ひらめかす刃の血煙縦横無盡に血路を開き、なんなく賊首にめぐりあひ、彼奴が胸の真中より願骨のあたりまで、さつと切りさき、其の首をば、我が陣頭に懸けられたり。

「見分きおれて云々」勝負を見分きおれたる意。「角ふたりし云々」互ひにからみあひたるため双方共に其の伎倆をほしいまゝにするを得ずして共溺れにならんことをいふ意。「あらゆる悪事云々」此のころ原文には *Multiplying* といふ語を用ひたり、此の語の意味は「悪事を増殖すべき」といふ意味なり、短く譯しがたければ本文の如くに譯しつ。原文に *in nature* があるは「人の身にそなはれる」といふ程の儀。此の一句の原意は「人の身にありといふ子を生むべき悪念が彼れが身に群りたれば、猶若蠅が食物に群りて、忽ち蛆を生むが如くに、穢き悪念を増殖するや必せり、が故に彼れは賊首たるに適當せり」といふ意。「時運には目もかけず」時運は敵の方にありと見たれども、事ともせず却りて時運を卑めりといふ意。「勇武將軍」原文には「勇武のマクベス」とありて、勇武といふことを緯號の如くしたれど、東西語法異なれば譯には「マクベス」といはずして將軍としたり。「勇武神の愛見」前の「時運の女神」對にしていへり。泰西にては時運を人に擬して女性とすること常なり、其の定めなき水性が娼婦など

の心に似たればなるべし。原文の末に「搦手して別かれむともせざりき又さらばともいはずりき」といふ辭あり、其の意は「マクベスがマクドナルドにめぐりあひて格闘し勝負決するまでは別かれざりき」といふ心なり、即ち敵將の戦死を嘲れるなれど、咎々しければ譯には省けり。「我が陣頭」原文には「我が凸字壁に懸けたり」とあり。Kens 井に *Gallowglasses*、前者は輕き武器を携へたる兵士、後者は重きを携へたる者。「西の方なる島々」とは蘇國の西にあるノブリスアイズ群島をいふ、マクドナルドが所領也。

*Dum. O valiant cousin! worthy gentleman!*

ダンカン　　ホ、勇まじき從弟が振舞をかしたり〜。

「從弟」は「マクベス」をいふ、たゞ史によりてまが作りたるなり。「でつしたり〜」原文の意はあな尤けき貴紳なるべし。

*Cap. As whence the sun gins his reflection*

*Shipwrecking storms and direful thunders break,  
So from that spring whence comfort seemed to come  
Discomfort swells. Mark, King of Scotland, mark:  
No sooner justice had, with valour armed,  
Compelled these skipping kerns to trust their heels,  
But the Norwegian lord, surveying vantage,  
With furbished arms and new supplies of men,*

Began a fresh assault.

武官 味方はこれに力を得て昇る朝日のうらくと晴渡りたる彌生の空に、いと物すごき霹靂船くつがへす大あらし、忽然として起るが如く快樂湧よと見えたりし泉のうちより不測のわざはひ、御聽あれや蘇國のおほ君、大義を戴く武勇の刀風、逃足輕き木の葉武者を物の見事に走らせたる、味方が隙にノルウェイ國王、血ぬらぬ打物新手の軍勢、どつとあめいて横合より、息をもつがせず攻掛けたり。

「味方はこれに」意を酌みて添へたり原文には無し。昇る朝日云々原文には「大陽が其反射をばトむるところより」とありて解釋さまくなり其中最も穩當なるは本文に譯したるが如き意味なるべし。案するに彌生の空はトめて春暖なる時にて所謂春分なり、まがるに此季節にはおそろしきあらしの起ることを常なり案外の異變といふ事の喩に春分のあらしを引き來たりたるなり。「木の葉武者」原文には「飛びはれる輕器兵」とあり、輕き打物を擔へたる兵士は身輕なればイザ敗北さなれば武器を頼みて戦ふことをせずしてひとへにその國に依頼して走ることなり。木の葉武者は其の義譯。「ノルウェイ國王」歐首マクドナルドに應援して兵を出だし横合よりマクベスが軍を襲へるなり。此の王の名はスウェーデンを稱せり。

Dim. Dismayed not this.  
Our captains, Macbeth and Banquo?

ダンカン ミテそれが爲に味方の兩將、マクベス、マクノー、狼狽へたりしや。

原文には「狼狽へたりしや」とあり、東西語法異なれば本文の如く譯しつ。

Cap. Yes,  
As sparrows eagles, or the hare the lion.  
If I say sooth, I must report they were  
As cannons overcharged with double crack;  
So they  
Doubly redoubled strokes upon the foe:  
Except they meant to bathe in reeking wounds,  
Or memorise another Golgotha,  
I cannot tell—  
But I am faint, my gashes cry for help.

武官 さん候、雀にあうたる高根の鶯、兎にあひし獅子の如くに。實事を語り奉れば、兩將軍は、大炮が二倍の彈藥得たらんやうに勇氣日ごろに幾倍なし、向うに前なき奮撃突戦、沸きたつ血けぶり、血汐の中に浴せられん所存なるか、さなくば第二の「骸骨園」を此國にきづかんそのありさま、ア、さりながらもはや息きれ、奏しが

たし、それがしが深手の疵口助を求め候ふなり。

「さん候」には然りの意味に用ひたり、「狼狽へたりしや」といふ間に答へて「然り、狼狽へたり」と答へたるなり即ち釜に遭ひし鬚、兎に遭ひし獅子の如くに狼狽へたり、いひ換ふれば「鬚も鬚く色なかりき」といふ意味なり。かく反語を用ひて答へたればこそ其の次に「賈を賈り奉れば」といひ改めたるなれ。此の武官深手を負ひにならば「賈を賈り奉れば」といひ改めたるなれ。此の武官深手を負ひにならば「賈を賈り奉れば」といひ改めたるなれ。此の武官深手を負ひにならば「賈を賈り奉れば」といひ改めたるなれ。

氣を稱する言葉と照しあはせて見るべし。  
原文に Cracks とあるは砲發の響なれど修辭法に謂ふ換喩にて因果を相換し彈藥の義となるなり。「骸骨岡」の原語 Cracks は地名、エルサルムの東北なる小高き岡なり。原義は「骸骨が原」といふ程の義、古代の刑場なり本文には骸骨みて山をなすといふ趣なはいはんとて用ひたり。

Dum. So well thy words become thee, as thy wounds;  
They smack of honour both:—Go, get him surgeons.

[Exit Sold., attended.]

ダンカン 勇まし、／＼汝が言葉も汝が身傷もいとよく汝が身に叶ひて、武士の面目見えたるぞよ。誰ある彼れを外科醫が許す。

「武官介抱せられて退場」

「痛手に屈せざる物語といひ百傷といひ勇士たるに耻かしからずといふ武士の眞面目に叶ひたり、此の二者(言葉と身傷)の上に汝の譽ある武夫たる證見えたり」となり。Smacks といふは「徴を現せり」

さういふ程の義。

Who comes here?

誰ぞあれへ参るは。

以上武官の軍物語もあり業々しくしてまことしからずといふ説あり或はまた第二齣はシエークスピアの筆にあらざるべしとて種々の理由をあげたるもあり皆々しければ爰には畧きよき折を得てあげつらふべし。

Enter Rosse

ロッセ登場

ロッセ侯勝軍の報道をせんとて殿前より蘇王の本營に來たれるなり。

Mal. Worthy thane of Rosse.

マルコム オ、あれこそはロッセの侯爵。

原文の Worthy といふ語は其の身分に耻かしからぬ又は有徳なる等の意味をもてる語なれど、この場合に用ひたるは多くは尊重の意味を含めるのみにて深意なし故に侯爵の二字を添へて義譯したり以下かゝるたぐひ多からん一々断らざるべし。

Len. What a haste looks through his eyes! So should he look,  
That seems to speak things strange.

レンノクス 忙しげなるあの眼光。それもその筈、正しく珍事を報ずる使節。

Rosse. God save the king!

ロッセ 天神もが大君を護らせたか。

「は獨「陸」才「才」が「つ」ふ「る」し「つ」も。國君に「も」く「る」折「く」い「ふ」は彼れの習俗なり風俗をも見せん。國を原の儘を置かん。」

Dun. Whence cam'st thou, worthy thane?

ダンカン ヤン・ロッセの侯爵何處より参りひるん。

Rosse. From Fife, great king,

Where the Norwegian banners flout the sky,

And fan our people cold. Sweno himself,

With terrible numbers,

Assisted by that most disloyal traitor

The thane of Cawdor, began a dismal conflict;

Till that Bellona's bridegroom, lapped in proof,

Confronted him with self-comparisons,

Point against point rebellious, arm 'gainst arm,

Curbing his lavish spirit: and, to conclude,

The victory fell on us.

ロッセ ハ、惶れながら「ファイフ」より、ノルウェーの大旗虚空に羽うち、味方を煽ぎ、身の毛よだす戰場より。さても敵將「スエノー」王、猛兵あまた引卒なし、不忠不義の叛逆人、カウドル侯に應援せられ、いと物すごく押寄せたり、然るに味方の「マーズ」尊神「百鍛鐵」の甲冑に身を固めたる一騎と一騎、彼れにいであひ鋒より、火花をちらして戦ひしが、終には難なくとりひしぎ、味方の勝利となつて候ふ。

「虚空に羽うち」原文には「虚空を戲弄し」といふ程の意味にものして敵の軍旗が傲然として翻へるさまをきかせたり。此の一句に就きては種々の解あり官軍全勝の後に「ファイフ」を立いでたる使者なるべきに「身の毛よだす云々」といふは不都合なり斯くては賊軍が勝を得たりしに似たりといふ評あり。或は「flout」の前に「Did」といふ語を加へて過去に訳ませたるもあり、されど散文とはちがひ、かゝる法律の時には語格を破ることも問々あるべし、さなくともかゝる語法は修辭法に附ふ現寫法の一例として解すべきにや。「スエノー」王は前に見えたる「ノルウェー」の王なり。「カウドル」の侯は「ダンカン」の臣にして「ヒソッ」に敵に應援したるものと見るべし、まがらされば後段に至りて解しがたき所あり。「マーズ」尊神「原文には彼の「ペローナ」の花婿」とあり、ペローナは羅馬の軍神にして女性なり常に血兒、火兒、肌兒といへる三侍女を従へて來たるものと傳へたり。爰にては羅馬の軍師「マーズ」神の事として「マーズ」の神號としたれど正傳には「ヘリマーズ」は「ペローナ」の夫にはあらず。「百鍛鐵」原文には「保證の甲冑」とあり堅固なる甲冑の義なり。「一騎と一騎」此の原文の直譯は「自家比較をもつ」とあり解釋せば「互ひに」一騎打つて優劣を決せん」といふ意なるべし。又原文に「Point rebellious」とあるは叛賊の

韓の破なりシモースマンには往々形勢を主格物の名詞のやうに用ひたるはあり。

*Dum.* Great happiness!

ダンカン ホノ重慶マン。

*Ross.* That now

Sveno, the Norway's king, craves composition;

Nor would we deign him burial of his men

'Till he disburséd at Saint Colme's Inch

Ten thousand dollars to our general use.

ロッセ かゝりし程に敵將メモノ勢<sup>ソウ</sup>挫けて降伏なすされどもセント、コールム

島にて軍用として一万弗<sup>ポンド</sup>味方に上納致せしまでは、賊が死骸の埋葬をも、いッかな許さず候ひ也。

「ダンカン「コーンマド」蘇國ノホースの入江にある小島なり今はインチ、コールム、又の名コロム島をいふ也。」「一ガ弗」時代はひなり、メノラー、といふ貨幣一千五百十八年出ヒミヤにて鑄造せし「Thaler」といふ貨幣よりは大きなり。」「一」る時代はひは此作にも他の作にもあまたあり。

*Dum.* No more that thane of Cawdor shall deceive

Our bosom interest:—Go pronounce his present death,

And with his former title greet Macbeth.

ダンカン 此の上はカウドルをして再び予が信任にそむき不軌を企つることあらしむべからず。疾く彼れを死刑に處せよ。キツたかれが爵號もて將軍マクベスを迎賀し給ふれ。

Bosom interest. クラークは「親密の愛憎」を翻したり「深く信任して寵用したる心」といふ程の義。「迎賀」譯のなりの翻譯なれは「カウドルの侯爵の榮號をもてマクベスに呼びつけ凱陣を賀し來れ」となり。

*Ross.* I'll see it done.

ロッセ ハ、かしてキツてムリをさす。

原文の直譯は「勅命注意して取行ひ候へし」

*Dum.* What he hath lost, noble Macbeth hath won.

[Exeunt.]

ダンカン 賊臣カウドルが失ひたるをば、忠臣マクベスが得たりけり。

此の幕切、我が劇ならば「マクベスが得たりけり」の次に「げに妙なるは造化の配劑、ハテ争はれぬものぢやなア」なるあるべし、さなくば尻切さ心はさやらん其のささいさわるるべし。

(一同退場)

以上第貳場はほんの序幕なれば取りいでし評すべき程のことなし。此の齣にては作者力めてマクベスが勇武絶倫なる證を挙げたり彼れが戦に臨みては獅子の

如きこと後に對照の必要あり、善く心にためて味ひ置くべし。  
ダンカンがマクベスを信任寵用する心、此のたびの勳功によりて大に増加したる  
趣王が白<sup>ホワイト</sup>にいちじるく見えたり、王さまには輕々しくカウドルを信用して彼れの  
叛するに及ぶまでは聊かも其の野心をさどらず今やうやく過<sup>オウゴ</sup>をさどりながら、ま  
た輕々しくマクベスを寵用せんとす、作者暗に此の王の不明を點示す。

SCENE III.—A Heath.

Thunder. Enter the three Witches.

第三場 ノオレス近在の荒野

雷鳴 三妖婆登場

此の場も前のご同じ日の事なり。三妖婆約束の如く再會してマクベスが來たる  
を俟てり。妖婆が白は例の如く律語にて第八行以下は押韻したり。  
作者が用ひたる通常の律語は韻を踏まざる二單音づゝの五歩より成れり而して  
各歩の第二單音を張音となせること例なりまかれども、ひとへに此の躰をのみ用  
ふるときは千篇一律となりて恰も七五若しくは五七の句拍子を全篇に通じて用

ひたらんやうにて興薄く且は心もたゆまるべし此の故にや作者便宜を計りて或  
は張音の置きどころを換へ或は變躰の律歩をまじへなどして巧に同調の弊を避  
けたり。さてかゝる變則にもあつから定規ある由はアポットが著『シエークス  
ピフ、グラムマー』を看て知るべし。

1 Witch. Where hast thou been, sister?

2 Witch. Killing swine.

3 Witch. Sister, where thou?

甲妖婆 姉御よ、そもじはマア何處へ往てあぢやツたぞ。

「先刻別かれて後何處に何事をしてありしや」と問ふ意なり。此の段の妖婆等の詞づかひは第一場に見  
えたるに比べて遂に下卑たり。下段の評註とあはせ見るべし。

乙妖婆 豕を殺してゐたわいの。

妖婆人を怨むことあれば其の人が飼へる豕を妖術をもて殺すといふこと當時の膠信なり。此の膠信  
近きころまでも残りたりきとおほしくアヤソン、スコットなどの著述にも同く趣のこと見えたり。

丙妖婆 シテまた姉御は、そもじは何處に。

甲妖婆に向ひて問ふ。

1 *Witch.* A sailor's wife had chestnuts in her lap,  
And mounched, and mounched, and mounched:—

'Give me,' quoth I:

'Arount thee, witch!' the rump-fed ronyon cries.

Her husband's to Aleppo gone, master o' the *Tiger*;

But in a sieve I'll thither sail,

And, like a rat without a tail,

I'll do, I'll do, and I'll do.

甲 妖婆　そればらの「聽」したも、ある船長の嫌めが前掛に栗の實のせて喰ふ程にのくむつりむつりあんまりうまさうにくうてゐたゆゑわなみにも給へといへば「エ、退りをれ妖術婆」と肥満のしつかき女め惜しくしう絶叫くさる。○あの嫌めが亭主は「タイガ」號の船長、アレックホーへ往てある筈見よ、今に飾に獲り、風をうて我れあしこゝわたり、尾無鼠と姿を變へやんがてくく。

妖婆が仇をなすは、ある瓊屑の毒に基くと信ぜしは當時の妄想なり。「飾に獲て」飛行すと云ふも當時の謬信なり。「尾無鼠」妖婆は變化自在にして如何なる動物にも化け得れども其の尻尾無しと云々。「やんがて」原文には「爲」してのけんくく」と重ねたり云ふこゝろは風となりて「タイガ」號の中に潜

み船底をくひやぶりにて海水の注入するやうになさんとなり。即ち楯に對する怨を其が夫に向ひて修めんとするなり。「アレックホー」は地名。「聽いてたも」あんまりうまさう云々「惜々しく」見よ、今に等は原文に無し。「見よく」以下原文にては韻語なり詞形と共に情の變轉したるを味ふべし。

2 *Witch.* I'll give thee a wind.

1 *Witch.* Thou art kind.

乙 妖婆　其の時こそは此のむしが一手の風を贈らうむらひの。

妖婆は風を役し且、それを賣るものなりといふこゝろ當時の謬信なり。爰にては友達しくゆゑ無代償にて順風一手を贈らむといふ也。「一手の風」は東南の風若しくは南西の風なりといふ也。

甲 妖婆　オ、かたどけなうら。

原文には「オ、カトドケナウラ」。

3 *Witch.* And I another.

1 *Witch.* I myself have all the other;

And to every point they blow,

All the quarters that they know

I' the shipman's card.

I will drain him dry as hay:

Sleep shall neither night nor day

Hang upon his penthouse lid;  
 He shall live a man forbid.  
 Weary seven-nights, nine times nine,  
 Shall he dwindle, peak, and pine.  
 Though his bark cannot be lost,  
 Yet it shall be tempest-tost.—  
 Look what I have.

丙妖婆

シテまた「手はこの我が。」

甲妖婆

オ、あかたじけ。其の餘の風の手は、残らずわしが有ッてゐれば、風吹き及ぶ浪港風が承知の方角は、磁石の面に見えたるかぎり、心のまゝ。見よ、今に血を絞り、彼奴がからだは枯草同然、夜といはず晝といはず、何の眼蓋をふさがせうぞ、あのれやれ、魔に魅入られじ苦しみを、今に思ひ知らせてくれうぞ、味氣な、夜を九たび、また九回重ぬたら、身神共に病み衰へ、瘦せさらぼひてくつをれをらうぞ。よしんば、彼奴が乗る船を、くつがへすこと叶はずとも、浮かせ沈ませ苦しません。○見やれ、これを。

「血を絞り」以下の呪詛は當時の迷信に基きていはせたるなり。「眼蓋」原文には小屋の屋根といふこと

より導かれたる眼蓋といふ語を用ひたり原文の lid は蓋といふ語なり。a man forbid には魔に魅入られし人の體邊の原語は「魔に魅入られたる人の經驗すべし苦しき月日を送りしむ」といふ程のこと。「味氣な」夜「まゝ」味氣なき七夜一週日を九九八十一回重ぬさせんといふ意深遠あるにあらす、長く苦しむべしといふ程なり。九三等の数は不祥の数をしたるなり。「やせさらぼひて」以下は妖術をもて種々の詭計にふるまはせぬの意。何をこつていふ呪詛めたる事なり。

2 Witch. Show me, show me.

1 Witch. Here I have a pilot's thumb,  
 Wrecked as homeward he did come.

[Drum within.]

3 Witch. A drum, a drum!  
 Macbeth doth come.

All. The weird sisters, hand in hand,  
 Posters of the sea and land,  
 Thus do go about, about:  
 Thrice to thine, and thrice to mine,  
 And thrice again, to make up nine.  
 Peace!—the charm's wound up.

乙妖婆 オ、何ぞ、見せてたも〜。



甲妖婆 歸る途中で難船させ殺してのけた水夫が拊指。

案するに我がまへかたの手柄を誇示するなるべし、かの唄が夫をもまづこの如くせんといふこゝろが。譯文は其の意を酌みて翻譯したり。

(奥にて陣太鼓の音)

マクベス、メンコーが陣陣の太鼓の音なり。

丙妖婆 アレ／＼聞こゆる太鼓の音は。さてこそマクベス。

これにて皆々よろしくこなし聲を揃へて歌ふ。

皆々 まがつ日の神につかふる姉妹は陸と海との急使手に手を取りて疾しや疾し、斯くこそ回れ斯くこそは三たびは汝の、三たびは吾の、もいちど三たびくるとりやくるり合せて恰ど九たび。○シツ／＼呪符は出来たわいの。

「狂津日の神」云々原文には「人間の宿命をつかさどる姉妹」とあり、宿命といふことは多くあしき命に用ふれど固より禍とはおなからず、いまだ妥貼なる譯語を得ざれば假に本文の如くに譯しつ。案するに希臘の鬼神誌に「宿命の神」といふ三姉の姉妹あり長を Oioho、次を Lachesis、末を Atropos といへり長は人間の命の糸車をひかへ次は糸をひきいだし末なるが、映もてこれを切る云々。爰にては此の三姉妹の役廻りを三妖婆にさせたりと見ゆ。此の一節の語語は妖婆等が互ひに手をひきあひてくる／＼と踏りまはりながら唱ふなり。一人につき三度づゝ都合九たびめぐるはまづなひと見えたり。三九

の数のことは已に前に解きたり。

以上妖婆が性質は悉く當時の謬信によりて作り設けたりと見ゆるものから第一場に見えたるもの、並に下文に見えたるものとは甚しく相異なる所あるに似たり。下文なるはあくまでも「狂津日の神につかふる姉妹」といふ趣見えて神々しきまでに物すこし、老かるに以上に見えたるは其のいふことも詞づかひも無下に卑しう品下りて我が國にいふ飯綱使ひなどに髣髴たり。こは宿命の神の役廻りをせさせんといふ作者が本意とは稍違へるに似たらずや。此の故に或は第三場のはじめの部分は他人が書加へしものならんなどいふ説もあり、如何にや。其の議論の一端はハドソン著『メーホーシメロヤ』第二卷マクベスの條下に就きて見るべし。

Enter MAOBEETH and BANGUO.

Mac. So foul and fair a day I have not seen.

Ban. How far is 't called to Forres?—What are these,

So withered, and so wild in their attire,

That look not like th' inhabitants o' th' earth,

And yet are on't? Live you, or are you aught

That man may question? You seem to understand me,  
By each at once her choppy finger laying  
Upon her skinny lips: you should be women,  
And yet your beards forbid me to interpret  
That you are so.

マクベス並びにメンコー登場

マクベス かく陰晴定まりなく醜く且可愛き日はそれがし曾て見つることも無し。  
「先刻までは晴天うちうらやみにしていまめでたき日和なりしに倏忽としてこの日も曇りたる懸  
しき空合となれること不審醜美を一時に現下たるが如く不思議の天気は予未だ見及びしこと無し」と  
いふ聲。解説いろいろなれど右にいへるやうに解くが最も適當なるべし。また空の俄に曇りたるは  
妖婆が魔術に因るを解すべきなり。此の白中の fair and foul といふ語第一場なる妖婆の白 fair is foul  
といふ語に呼應す作者が孟浪筆を下さざるを見るべし。ドゥアン曰はく「マクベスはまだ妖婆と相見  
すといへども其の心己に妖婆と相通下たる由は此の語の相呼應したるを見て知るべし」云々。案す  
るにマクベスが逆心は妖婆が刺戟を得て増長したるのみ其の案は其の心に存したりと解すべし。

メンコー シテ此處よりフオベスまでは路程如何ほどに候ふやらん。

空響り雷轟き前途漢々たりメンコー、マクベスに向ひて本營への距離を問ふ。其のトタンに妖婆の  
姿を認めて愕然たるべし。

ヤ、あれなるは何者なるか顔色しわみ着たる衣みだりがはしく人間界に在る  
ものども見えぬ姿の在りとし見ゆるは。

マクベスはまだ妖婆を見ずメンコー先づ彼等を見るを解すべきの否然らばマクベスの目はメンコ  
ーよりも先に彼等の姿を見たりしならんが口を開くこと能はざりしなりと解するが難なるべし。イ  
クベスが口を開くは無意識の間に我が心の我れを告ぐることをめればなり。

いかに汝等は生あるか。人間の問答し得べきものなるか。ム、しわみたる唇へ  
齊しくびらわれたる指を置くは、ムとては我が意を解したるな。さるにても女  
と見ゆれど口聲ありンテナマ。

妖婆は容貌若女の如くにして口邊に露ありマクベスもまた當時の懸信なり。

Mach. Speak, if you can: what are you?

1 Witch. All hail, Macbeth! hail to thee, thane of Glamis!

2 Witch. All hail, Macbeth! hail to thee, thane of Cawdor!

3 Witch. All hail, Macbeth! that shalt be King hereafter!

マクベス やそれ返答せよ物らひ得べくば汝等は何者なるぞ。

甲妖婆 万歳マクベスもの。万歳マクベス侯。

英文原典 マクベス

「デラミス侯はマクベスが現爵なり。」

乙 妖婆 万歳マクベスどの。万歳カウドル侯。

前場の末にダンカン王のロックス侯に命じてマクベスをカウドル侯に叙せよといひつけつけれどもマクベスの未だそを知らざることを勿論なり、妖婆は逸早くもこのことを豫知せるなり。

丙 妖婆 万歳マクベスどの万歳々々やがて國君ともなりませんや君。

all hail マクベスと hail マクベスと受けては共に万歳の儀なり。マクベスひそかに野心あり我が心より外には知るものなきと思ひたるに今ゆくりなくも道被せられたり彼れ豈博然として豫然たらざるを得んや。察するに此の利那には未だ欣然として將來の成功を思ひやるべき邊なるべし故に目をみはり口をひらきて博然マクベスの一へのや。

*Ban.* Good sir, why do you start, and and seem to fear

Things that do sound so fair?—I' the name of truth,

Are ye fantastical, or that indeed

Which outwardly ye show? My noble partner

You greet with present grace, and great prediction

Of noble having, and of royal hope

That he seems rapt withal : to me you speak not.

If you can look into the seeds of time

And say which grain will grow and which will not,

Speak then to me, who neither beg nor fear

Your favours nor your hate.

マクベス 万歳マクベスどのなにとて和殿は打ちのしきておはするぞやいとめでたう聞かるゝことを。○いかに善言、汝等は幻影なるか、但しはおもてに見えたる如きか。同僚マクベスどのを、汝等現爵もて賀ぎ、未來の榮進を祝し、剩へ遂には國君とならんといへり、爲に彼の人は恍惚たり。我れには汝等絶えて語らず。やをれ化生、汝等は『時』の懷にありといふ機運の種を窺ひ、どの粒が生長なし、どの粒がせぬかを語るを得ば、いと語れ我が爲にも、我れは汝等が愛をも求めず、また汝等が憎をも恐れず。

1 *Witch.* Hail!

2 *Witch.* Hail!

3 *Witch.* Hail!

1 *Witch.* Lesser than Macbeth, and greater.

2 *Witch.* Not so happy, yet much happier.

3 *Witch.* Thou shalt get kings, though thou be none.

So, all hail, Macbeth and Banquo !  
I Wicli. Banquo and Macbeth, all hail !

甲 妖婆

万歳。

乙 妖婆

万歳。

丙 妖婆

万々歳。

甲 妖婆

マクベスものに比ぶれば、劣れを優る福壽海。

乙 妖婆

幸は一層少むれば、やしほにまゐる幸あつて。

丙 妖婆

國王とこそはなりたまはぬ、國王もまた生みたまはん、されば祝へや諸

共に。万歳マクベスもの、万歳マクベスもの。

甲 妖婆

マクベスもの、マクベスもの、万々歳。

妖婆曰く「マクベスを見て驚りて、マクベスに近づかんとす、其の時までは偶然たりしマクベス海にあつて、たゞ幸を蒙りたりしなり。」

Macb. Stay, you imperfect speakers, tell me more.  
By Sinel's death I know I am thane of Glamis ;  
But how of Cawdor ? the thane of Cawdor lives,

A prosperous gentleman ; and to be King  
Stands not within the prospect of belief,  
No more than to be Cawdor. Say, from whence  
You owe this strange intelligence ? or why  
Upon this blasted heath you stop our way  
With such prophetic greeting ? Speak, I charge you.

[ Witches vanish.

マクベス ヤンキエてきたうぞ、合點ゆかざる物のさひやう、暗れ、更めて晴りませし。  
父のシナル遊たれば、シラミスの侯たりとは我れもまたこれを知れり、されども  
カウドルの侯とはいかん。

「合點ゆかざるマクベス」は「マクベス」は「汝等不分明なることをいふや、むらぶま」あり、imperfect. 爰に  
ては「暗昧の義なり。」父のシナル「シリ」シエドの蘇史に「正史」に「フインレー」あるを「字形の似  
たるより」離りたるならんと言ふ。マクベスが熱くなりて「問ひ反へず」暗氣の中に「一物あること」明なり  
内心平ならば、他の何ぞいはうを問ひ反へず、すもあるべし、内外呼應する所あるゆゑに「聞流しがた  
きなり。」

カウドルの侯は尙存へ、今尙時めき榮えたるを、また國王とならんなど、は、此れ  
彼れ共に信じがたし。